

もう一つのチベットへ

桃源境への山旅

シャラリ峰登山の記録

日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

桃源境への山旅

日本ヒマラヤ協会 (HAJ)

1989年シャラリ登山隊





▲ベース・キャンプから仰ぐシャラリ北壁（中央が最高点）



▲露岩内に咲く青いケシ



▲深い樹林に囲まれた山湖



▲寺に続く橋にはタルチョーが

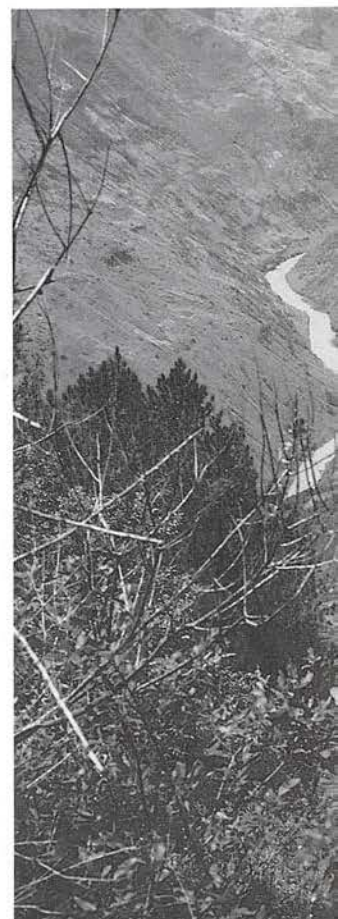
大河を越えて



▲遥かなり木里遠望

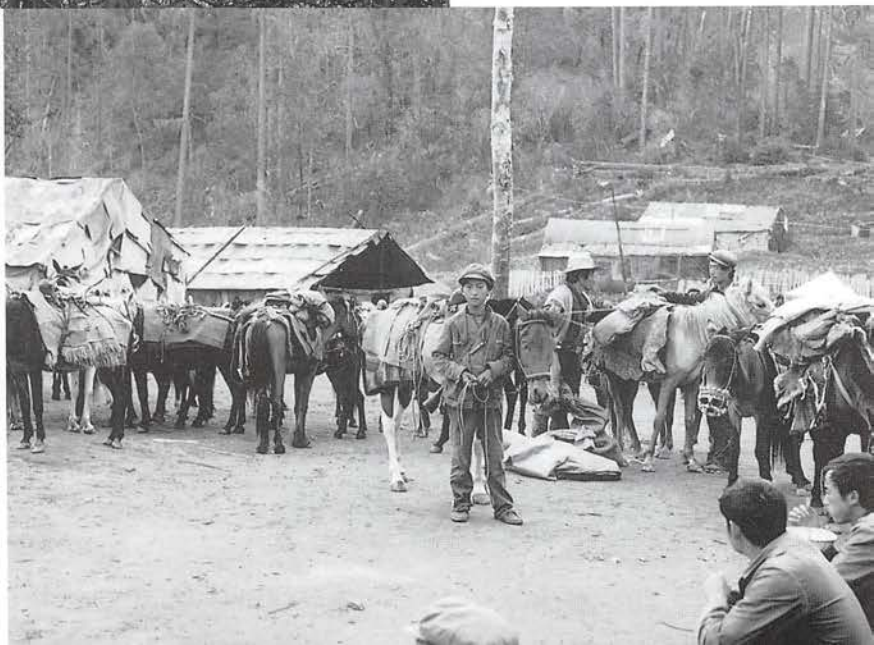


▲木里のシャクナゲ



▲遥か眼下に雅礪江を見る

▶ キャラバン・スタートの白揚平



兆源境へ



▶ 深い原生林を水洛河へと下る



▶ 水洛河にはタルチヨーがはためく立派な吊橋があった



▶ 都魯の村落には昔の通信塔が残る



ベース・キ

◀別天地コンガ・チヨンゲーのせせらぎ



▲チベット人の食事風景



▲樹林帯を越えて

▶ヤクが群れる高原に行く



キャンプへ



▶ベースキャンプで西嶋隊員の誕生日



▼キャラバンでは雨の合い間に楽しい松茸パーティーが…



▶ベース・キャンプでの交歓会



西稜を巨

◀ ガリーはC1へのルートとなった

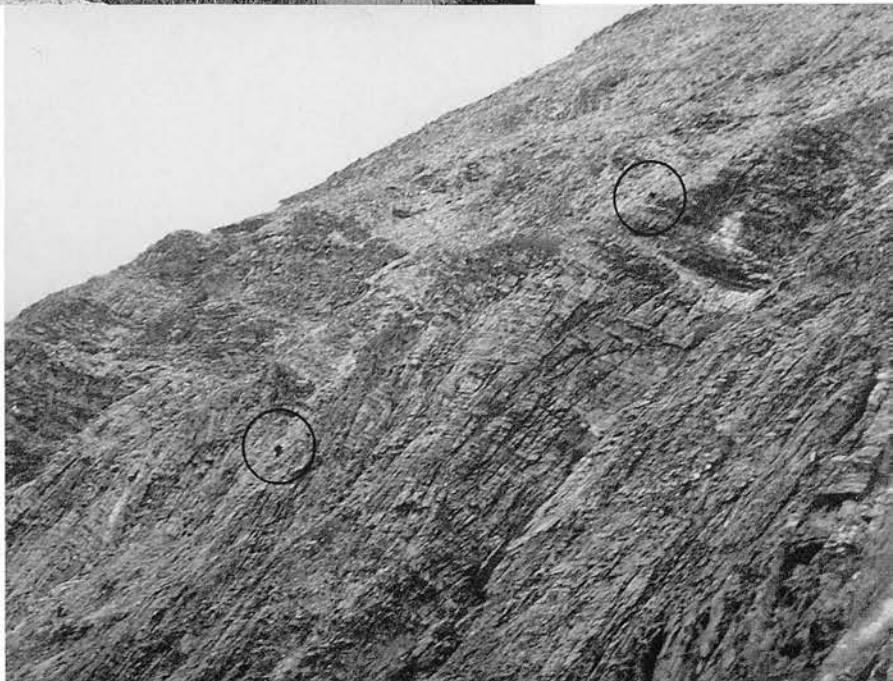


▲ C1と越えてきた岩壁



▲ 荷上の途中で

▶ C1へ続く岩壁にルートは拓かれた
○印は登攀中の隊員



ざして



▲岩壁に囲こまれながら主氷河は西稜に続いていた

▼モレーン稜を行く



▼氷河上を行く





▲西稜と行手を阻むアイスカップ



◀氷河上からルート工作隊をみる

処女峰の

▼指岩（右）直下を行く荷上隊





▲脆い岩稜が続く

▶西稜上からC2〇印と登頂した
ピーク（右後方）を見る

頂は遠く



▼最高到達点の酒井（左）と西嶋（右）



◀ 再建された木里大寺



◀ 木里大寺の修業僧たちと



▼ 西昌に建つイ族の英雄像



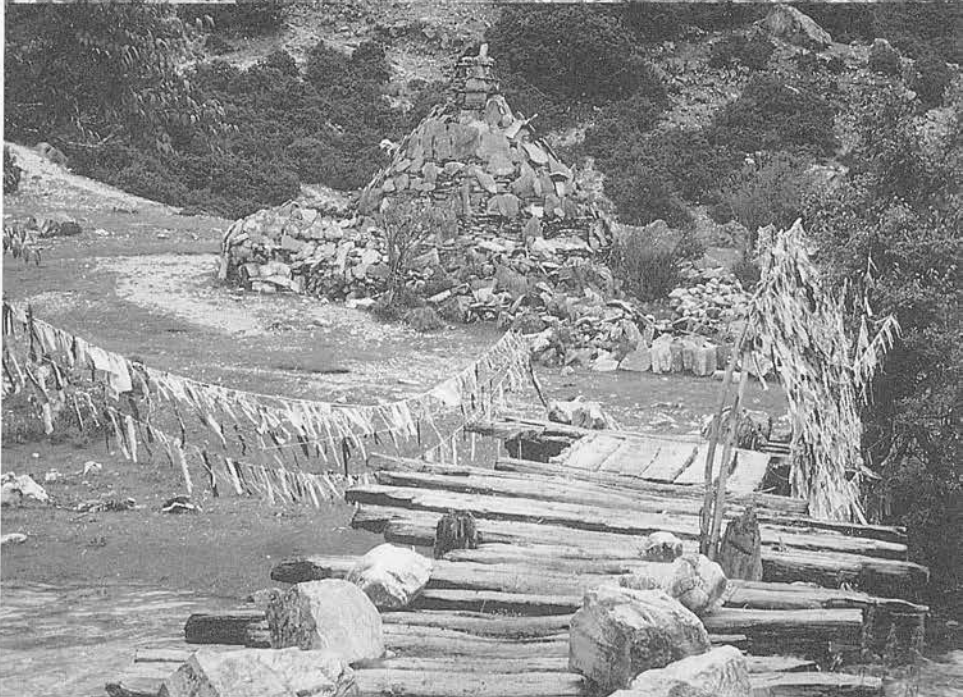
◀ 東拉付近で会ったチベット人母娘



▶チョングー古寺の跡にもタルチョーが



チョングー古寺へ渡る橋にも多くのタルチョーがかけられる



▶西昌の街で会ったイ族の娘たち



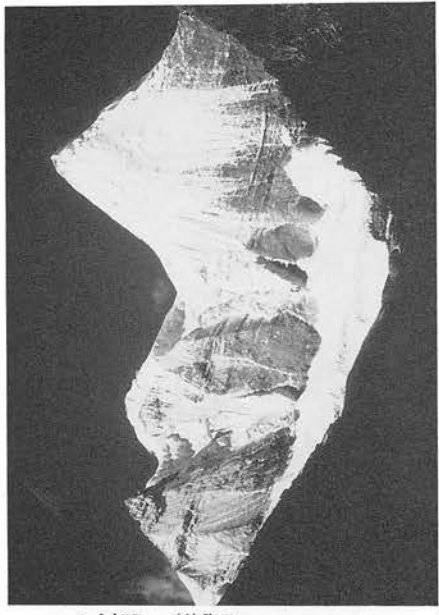
真嘎雪山（三山）

▼長男・夏諾多季



シャノドジ（5,958m）

▲次男・央邁勇

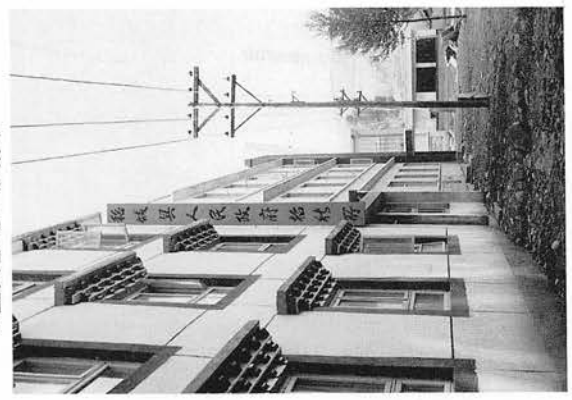


ヤンメイヨン（5,958m）

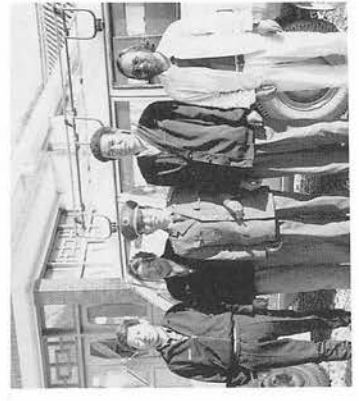
▼三男・先熱日 シャラリ 6,032m



▼登山基地・稻城県



稻城県の幹部と
酒井 副県長
森 体育主任
山 県長



目次

ごあいさつ

日本ヒマラヤ協会シャラリ登山隊	
隊長 山森 欣一	1
神秘の四川省西南部	
連絡官 江 硯 都	2

・第 I 部・

登山報告

登山隊の概要	山森 欣一	5
行動概要		5
発端から実施へ	山森 欣一	7
もう一つのチベット	谷田川 武	8
ベースキャンプへの道	貝塚 珠樹	10
北面ルート偵察	松館 正義	12
西面ルート偵察	菅沼 弘子	13
花咲く内院へ	西嶋鍊太郎	14
雨に煙る岩壁帯に行く	大久保 博	16
氷河を抜けて希望のコルへ	干場 晃	18
サインはV、指岩へ	菅沼 弘子	20
アイスクラップを目指して	酒井 国光	21
さらばノシャラリ	山森 欣一	24
シャラリ半周トレック	酒井 国光	25
チベット人家族との一日	貝塚 珠樹	29
桃源境をあとに下山	谷田川 武	31

隊員の横顔	33
-------	----

随想

小さな歴史の証言 ^{できごと}	酒井 国光	39
幾山河を越えて	西嶋鍊太郎	40
東夷北狄、中華思想は今も続く	大久保博	41
忘れ得ぬ旅との出会いから	谷田川 武	43
シャラリ登山の思い出	菅沼 弘子	44
遙か桃源境の旅	貝塚 珠樹	45
未知に魅せられて	干場 晃	47
岩壁に咲く花	山森 欣一	48

・第 II 部・

隊務報告

事務局日誌	53
渉外	山森 欣一 54
登攀	酒井 国光 55
装備	菅沼 弘子 59
食糧	西嶋鍊太郎 60
医薬	貝塚 珠樹 62
気象	大久保 博 64

考察と研究

貢嘎雪山三山の考察	酒井 国光 65
シャラリ山名考	山森 欣一 70
木里藏族自治県の概況	山森 欣一 71

報道	73
----	----

・第 III 部・

資料の部

中国登山の手続き	79
中国登山の費用徴収規定	83
四川省高峰登山小史	87
四川省内高峰位置図	89
四川省登山の和文参考資料一覧	90

御協力者名簿	92
--------	----

編集後記	92
------	----

ごあいさつ

隊長 山 森 欣 一

1989年夏に実施いたしましたシャラリ峰登山に際しましては、各方面の方々から暖かいご支援とご協力を賜わりまして誠に有難うございました。厚く御礼申し上げます。

日本ヒマラヤ協会は、1967年にヒマラヤ愛好者を対象に創立されて以来ユーラシア大陸の山野を舞台として活動し、登山・踏査だけでも60数隊を派遣し、成果を上げて参りました。

日本ヒマラヤ協会の野外活動は、未踏峰や未踏査地域をめざす隊、高所の困難な課題をめざす隊、豊かな旅を追求する隊等に大別されますが、わけても未踏への憧れは、本会の活動の根幹を成すものであります。

アジア最奥の地——チベット——心地良いこの言葉の響きに、どれだけ多くの岳人が酔い知れたことでありましょうか。長い年月、岳人にとってチベットは夢の又夢でありました。

ところが、1980年のチョモランマ開禁以来、チベットの多くの山々が登られるのと平行して探検、学術、映像などのチームが様々に形を変えて、チベットの素顔を紹介して来たのであります。

このため、わずか10年の間で、かつて岳人の間に君臨し続けて来た「アジア最奥の地——チベット——」は、観光客の溢れる所となり、神秘さが薄れ魅力も急速に色褪せてしまったのであります。

しかし、チベットの世界は、観光客が目をつけるボタラ宮やタシルンポ寺の在るチベット自治区や、タール寺の在る青海省ばかりではなかったものであります。四川省の西部には広大な高原が広がり、そこにもチベットの世界が在ったのです。そして、更にその南、雲南にほど近い地に忘れられたような形で、「もう一つのチベット」が在りました。そこが今回の未踏への旅への舞台となった「木里」でありました。

日本ヒマラヤ協会の活動が、中国で始まった1983年の最初の舞台が四川省でありました。それ以来毎年のように登山・踏査隊を派遣し、親善と友好を深めて参りました。その強い絆の中から、今回の活動の場である「木里の踏査とシャラリ登山」が実現したのであります。

横断山脈の南端を形成する四川省南部は、少数民族である「イ族」の世界であります。その凉山イ族自治州の中にある「木里藏族自治县」は、四川省西部に広がる「カム高原」から流れ出た3本の大河（雅砻江、理塘河、水洛河）が県内を北から南へと、或るものは東へと長江を目指して縦横断しています。

このため木里は深い谷で四つの地域に分断され、さらに、南と北では大きな標高差があるため、一日で県内を移動すれば一年の季節を体験できると云われております。

この木里の西に聳えているのがシャラリでした。「分断された深い谷間に、チベット文化と伝統を守りながら、ひっそりと息づく村がある。そこには、陽当りは良いがわずかばかりの傾斜地に麦を植え、ヤクや羊を追いつながら暮す人々がいる。正にそこは文明から忘れられた桃源境に違いない。そして、シャラリは、このような桃源境に住む人々の信仰の対象として聳え立っているに違いない。」これが、木里を訪ねシャラリを探し登ろうとした出発点でありました。

訪れた地は十余の少数民族が住み、解放後未だかつて外国人が訪れたことの無い地でありました。これまでに培った経験を元に、知られざる地域に初めて入域する外国人としての節度を守ったつもりであります。が、地元の人にとっては、私達の入域そのものが、既に迷惑ではなかったかと危惧もしております。

登山は、あまりにも脆い岩稜のため下山時の安全を期することができないと考え約5,500mで登頂を断念致しました。御協力いただきました皆様に吉報をお届け出来なかったことを残念に思っております。

最後に重ねて、登山の実施にあたりましてひとかたならぬお世話をいただきました皆様に改めてお礼を申し上げ御挨拶といたします。

神秘の四川省西南部

四川省登山協会 江 硯 都

中国古代の神話物語り“西遊記”の描写は“西部”という概念に神秘的色彩を付けている。

四川省は中国の西南部に位置しており、“先熱日”山域も横断山脈の北部に属し、雲南省に近付いている四川省西南部に位置している。ここでは50万人にものぼる少数民族が住んでおりほとんどがチベット族とイー族である。木里県、稻城県、このような地方は我々四川東部都市の者にとっても、やはり見知らぬ土地である。今度、日本ヒマラヤ協会登山隊に同行して聞いたり、目撃したりしたことは私自身にとっても感慨無量なことである。

成都を出た車は大渡河、雅礱江をのりこえ、また、一面の平野と山々をあとにしながら、まる四日間走ったのである。途中には四川西南部の重要な都市がある。また、涼山彝族自治州の首府でもある西昌を経由した。しかし運悪く、我々は五日前に行われたという彝族の伝統的な祭り“火把節”を見ることができなかった。“火把節”というのは祭りの日の夜焚松を手に持った人々が集って踊ったり歌ったりしながら、悪運を退け豊作を祝う祭りだそうだ。

車は西昌を出て西に向って走り続け木里藏族自治县についた。彼ら民族の独得な服装、生活習慣、宗教、信仰は、我々を未知の世界にさそい、我々を驚ろかせた。もうこれ以上車が走る道はなかった。これから徒歩によるしかない。我々はまる五日間歩いて、やっと海拔3,000m～4,700mの高さにある森林にたどりついた。ここは我国の三つの大きな森林の一つである。ここは交通が不便のせいなのか数多くの貴重な大木が自生しているが、東北地方の森林が採伐しすぎで問題になっているの比べると、あまりにも鮮明な対比で、人に非常に感慨深い。なお、木里県は我が国の杜鵑花の主な産地の一つでもある。毎年八月になると満開の花といろいろな鳥の泣き声で、山は言葉に言い表わせないほど美しくなるのである。その上、天候もよく変わり我々はほんのなん日か泊っている間に春、夏、秋、冬の季節の風景を体験することができた。

成都を出てベースキャンプに到着するまで九日間かかった。苦労も多かったが、忘れられない思い出も多かった。私に深い印象を残したのは日本のみんなが喜んで松茸でつくった食事を楽しんだことだった。あの時はちょうど松茸を取る季節でもあって、一番新鮮な松茸を手に入れることができた。また、値段も日本の市場の松茸の100分の1ぐらいであった。あの日、焚き火を囲んで食べた、松茸でつくった食事あの美味しさは、言葉で言い表わせないほどだった。

ベースキャンプに到着してから、連日雨が降りつづけた。それから三日目雨があがるにつれ、堂々たる先熱日の雄姿を見ることができた。そのため、漂っていた神秘感もすっかり消えてしまった。

私が今までうけいれて来た外国人の登山はほとんど四川省の西部あるいは西北部でであった。今度の日本ヒマラヤ協会登山隊の先熱日という山への挑戦は、たんなる登山ではなく、両国の人々の友誼を深める意義深い活動だったと思う。この登山の成果を登頂に成功したかしなかったかで判断すべきではないと思う。

ここ四川省西南部の山岳はもうはや門戸を大きく開き、世界各国のみなさんに開放されており、またここには、海拔6,000mぐらいの未踏峰が聳えて、そのふもとの山々、河流、森林、またここに住んでいる中国の人民は世界各国の友人のみなさんがこの神秘の世界を訪れ、ヴェールを脱いでくれるのを、心より待っているのである……………。

第 I 部

登山報告 隊員の横顔 随 想



登山隊の概要

1. 隊の名称

日本ヒマラヤ協会シャラリ登山隊 (H.A.J. Xiarari Expedition 1989)

2. 目標の山

中華人民共和国・四川省甘孜藏族自治州稻城县：シャラリ峰（先熱日 Xiarari 6,032m 別名薩内日）

3. 派遣母体

日本ヒマラヤ協会

4. 隊の構成

山森欣一隊長以下9名 中国側スタッフ3名 合計12名

5. 推進組織

日本ヒマラヤ協会シャラリ登山実行委員会

会 長： 遠 藤 登（日本ヒマラヤ協会会長代行）

副 会 長： 稲 田 定 重（同 専務理事）

委 員 長： 山 森 欣 一（同 常務理事・隊長）

事務局長： 飛 田 和 夫（同 常務理事）

委 員： 八木原罔明、尾形好雄（同 常務理事） 各隊員

6. 留守本部

〒169 東京都新宿区高田馬場3-23-1 淀橋食糧ビル506号

日本ヒマラヤ協会 ☎03-367-8521 FAX 03-367-4509

7. 中国側

接待単位： 中国登山協会（現地： 四川省登山協会）

行動概要

7月26日 成田発9時42分（JL781）、北京着13時24分。北京発19時18分。成都着21時55分。（錦江賓館）

27日 成都で食糧の一部購入、隊荷の再梱包作業。四川省登山協会による歓迎会。

28日 成都発8時18分、石棉着20時10分。ジープ3台とトラック1台。（石棉県招待所）

29日 石棉発8時18分、西昌着13時20分。西昌彝族博物館見学。市内で買物（邛海招待所）

30日 西昌発8時30分、木里着18時。連絡官と今後の日程協議。木里2,350m（木里県招待所）

31日 木里発8時50分、木里大寺着13時20分。再建された寺を見学。大寺発14時5分、4,080mの峠を越えジープの終点である白楊平着17時30分。3,600m。今日からキャンプとなる。

8月1日 白楊平発10時15分、水洛河右岸隆勇着15時5分。この日は猛暑。隆勇2,150m。馬24頭。

2日 隆勇発9時15分、呷洛着19時45分、幾つもの集落を通る長歩き。呷洛3,120m。

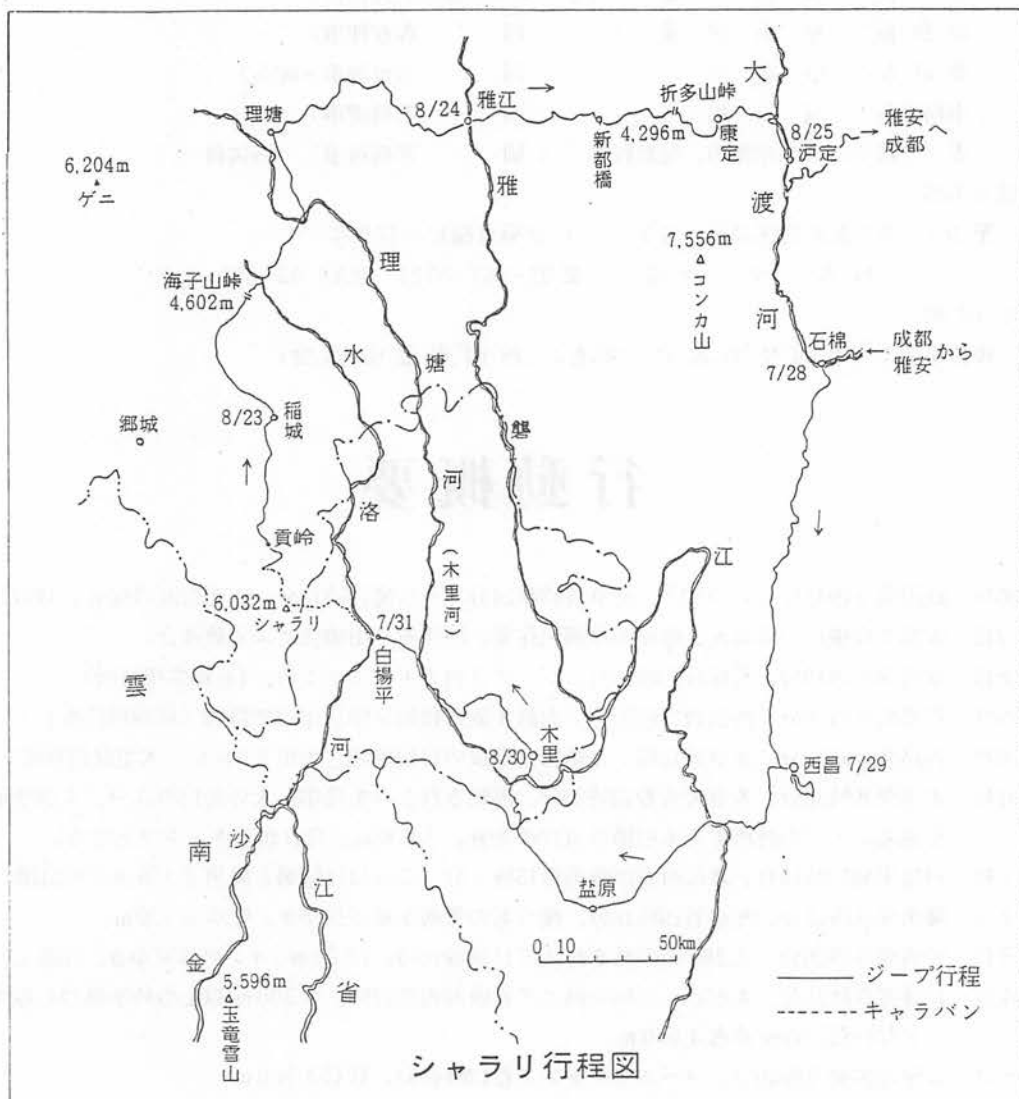
3日 呷洛発9時20分、4,280mの峠を越えて日薩着16時。4,000mラインの草原歩き。日薩4,320m。

4日 日薩発9時15分、4,850mの峠を越えて貢嘎冲古着17時。4,500m以上の峠を幾つも越えるハードな行程。貢嘎冲古4,000m。

5日 貢嘎冲古発9時40分、ベース・キャンプ着13時40分、BC4,500m。

6日～7日 北面～西面の登路偵察

- 8月13日 内院4,700mに第1キャンプ建設。
- 15日 北西稜のコル5,150mに第2キャンプ建設。
- 16日 北西稜の約5,500mに到達。
- 18日 コルの南にある5,250mの峰に全員で登頂し、第2キャンプを撤収し、ベース・キャンプへ。
- 20日 ベース・キャンプを撤収し貢嘎冲古へ下山。
- 21日 シャラリの東面～南面トレッキング
- 23日 貢嘎冲古発9時30分、唐姑着14時20分。迎いのジープに乗り唐姑発15時35分。稻城着17時50分。
- 24日 稻城発9時20分、高原を走り理塘を経由して雅江着18時20分。
- 25日 雅江発8時55分、折多山峠を経て康定へ下り、泸定着17時。
- 26日 泸定発7時45分、霧の二郎山を越えて雅安經由成都着19時15分。
- 27日～28日 成都で隊荷整理、買物。答礼会など。
- 29日 成都発8時20分、北京着10時25分。北緯飯店に入る。夜は許兢先生の招宴。
- 30日 北京発14時30分、大阪着17時45分。石川県組と別れ大阪発20時40分。羽田着21時40分。解散。



発端から実施へ

1983年3月初めて北京の中国登山協会を訪問したH A J 代表団は、今後の中国における活動計画として、30座の登山と10コースの踏査、並びに3つの大河の川下りを申請した。

中国登山の醍醐味は、四輪駆動車で高原を走り、砂漠をラクダで旅し、大河を舟や筏で渡り、鉋や鋸で道を切り拓きながら入山する、そのようなアプローチ・マーチにあると云えるだろう。

そして、中国登山の特色の一つとして、ヒマラヤとカラコルム両山脈以外の内陸部に高峰が林立していることを挙げることもできるだろう。その内陸部を、青藏高原（青海、西藏）に源を発する黄河（5,464km）と長江（6,400km）の大河が流れ、流域には6,000 m 級の未踏峰が聳え立っている。

又、四川省西部の甘孜、阿坝2つのチベット自治州は、日本では康定から巴塘の所謂「川蔵公路」に関する多少の記録が見られるだけで、大部分については、未踏査の地域でもあった。

このような状況を踏えて、長江下りを主体とし、周辺の未踏峰を登る計画が進められた。その計画の山の中心はあくまでも、雲南の梅里雪山周辺、玉竜雪山、四川の雀児山、海子山であった。

ところが、四川省登山協会と渉外を重ねる中で徐々に、四川省西部の広大な高原に6,000 m級の山々が点在していることが判ってきた。その中の1つに「先熱日・6,032 m」があった。標高が6,000 mを越えていることも魅力であったが、興味のそそられる地域でもあった。こうして、先熱日はH A Jの目標となったのである。

木里（ムリ）稲城（タオチエン）郷城（シャンチェン）など長江の東に当る地域については、我々が入手できる文献は少ない。木里から先熱日を目指すことにしたものの、山そのものは勿論のこと、この地域の概略を知る文献すらなかった。

1987年になって中国で発行された「木里藏族自治县概況」を東方書店で見つけることができた。

この本には、県内の概念図が添付されており、そこには無数の4千～5千メートル峰が示されていた。県の西に「夏諾多季・5,958 m」とあり、すぐにこれが先熱日に間違いのないと思った。何故なら位置はほぼ似通っており、標高と山名は違うものの、中国の地図（特に概念図）では、山名の標記が違ったり、標高が違うのはよく見受けられるからであった。

概念図を見て驚いた。県内を南北に川が貫流し、集落は中央部から北に固っており、先熱日の在る西側にはほとんど無い様子なのである。そしてこの山の東には「水洛河」が流れており、集落が少いこともあって、「果してこの河を渡る橋があるのだろうか」不安でもあった。

山の写真は勿論なかった。しかし、参考になる地図や概念図は下記の物があった。

1) 中国自然地理図集

薩内日・6,032 mの表示があり、山名は異なるものの、この山が先熱日であろうと仮定した。

2) O N C

この山の位置付近に19,890 ftの標高が表示されていた。

3) THE MOUNTAINS OF CENTRAL ASIA

同じく6,063 mの無名峰が表示されていた。

隊員を募り、隊が始動しようとしていた1989年2月ようやく、四川省登山協会から周辺のアプローチ図と写真が3枚送られてきた。驚いたことにこの図には、薩内日（先熱日）と夏諾多季・5,958 m、央邁勇5,958 mの三山が、夏諾多季を頂点とした二等辺三角形形状で至近距離に在り、総称して「貢嘎雪山」と表示されていた。前述した「木里藏族自治县概況」に夏諾多季だけが記載されていたのは、先熱日と央邁勇は隣の稲城県に所属するためであったのだ。

こうして徐々におぼろげながらも、先熱日は我々の前に姿を現わしたのであった。（記：山森欣一）

もう一つのチベット

桃源境・木里へ

7月26日 (晴) 成田ー北京ー成都

5時起床、5時半、山森、酒井以外の7名は宮崎久夫氏のトラックで箱崎へ。ルーム・箱崎で数名の見送りを受ける。感謝。箱崎で山森と合流、7時のリムジンで成田へ。成田で酒井と合流。

9時25分、JL 781便で北京へ。機内はがらがらで、次から次へのアルコールのサービスにそれぞれに酔払う。13時24分、北京着、快晴。空港は来年度のアジア大会に向けて工事中。中国登山協会の汪鉄銘、趙建軍、李豪傑氏らの出迎えをうける。成都への便が19時ということで、山森、酒井は中国の先生方と打合せ・懇談、他隊員は空港内見学と空港前公園の昼寝とで過ごす。

19時10分、テークオフ。西南航空 4106便、スチュワーデスは美人だが、不愛想。21時55分、小雨降る成都着、空港は工事中であった。四川省登山協会副主席苟氏、連絡官の江氏、孟氏、通訳の張氏の出迎えをうけ、ホテルへ。22時45分、錦江賓館着、立派なホテルだ。打合せ(キャラバンの件など)の後、就寝。

7月27日 (小雨後晴) 成都滞在

8時起床、小雨に街が霞んでいる。緑が多く、建物も古いものも多く、落ち着いた印象をうける。三国志の劉備玄德、諸葛孔明、また、安録山の乱にこの街をめざした玄宗のことなどをふと思い浮かべたりする。9時半、登山協会事務所へと向う。人口500万の大都市、カラフルなボンチョに身を包んだ自転車が大波のように行交い、車はその間を走っていく。10時過ぎより、2班に別れて、買い出しとデポ品確認、パッキングとを行う。12時、午前中の作業を終え、陳麻婆豆腐店で元祖麻婆豆腐を味合う。辛いが美味。13時45分、事務所へと戻り、午後の作業をする。17時、準備終了、なかなかすごい荷物だ。明日からのキャラバンに胸が高なる。

19時より、ホテルで登山協会による歓迎会、何

杯も乾杯を重ねる。連絡官の江・孟両氏、通訳の張氏ともに愉快そうな人だ。歓迎会の後は街の散策、ハガキ書き(日本への航空便は1.3元)などでそれぞれに過ごす。愈、明日は出発である。

7月28日 (晴) 成都ー雅安ー石棉

7時起床、ジープ3台とトラック1台とで、8時15分出発。15分も走ると田園が現われ、郊外から市街地へと向う自転車の大量と擦れ合う。この大量はかなり長い間続いた。10時、大河・岷江を渡る、段々と心が弾んでくる。邛崃にて休止。11時45分、土砂崩れのための不通箇所に出会う。復旧を待つ人々にジュースやキャンディを売り歩く人々がいる。少人数の作業にもかかわらず、短時間で復旧化する。山を下り、12時50分、雅安の街に入る。街中を雅安河が流れる何処か西洋的な感じのする美しい街である。川のほとりの雅安賓館にて昼食。

14時発、川に沿って上る。なかなかすごい道となってくる。峠で休止の後、遠々と下って、18時、九襄鎮着、休止。暫く走った後、尼日河に沿ってさか上るが、なかなかすごい水量だ。途中、山頂部まで耕された段々畑の風景などが印象に残る。20時、石棉の街に入る。民族衣装の女性が目につき始める。石棉招待所泊、招待所一帯は門戸管理制度(治安制度)の跡を残している。夜の街は活気があるが、この街は薄暗く、見るべきものは特になかった。強行軍の一日であった。

7月29日 (晴) 石棉ー西昌

7時起床だが、ラジオ放送に6時過ぎに起こされる。8時20分出発、南桧河に沿ってさか上る。俄脚にて道が別れ、右に入るが、先頭の2号車(とてつもなく速い)は1・3号車を待つ。その間、民族衣装の老婆と接し、近くの山村を見る。この家の壁や屋根は竹を編んだものであった。ここよりやや細い道を上詰め、広々とした谷へと下る。この谷は遠くに雪をつけた山を望み、働く人々の

表情も明るく、何処かのどこさを感じさせる美しい所であった。何枚かの写真を撮る。12時過ぎ、冕宁通過、道の両側の並木が美しく、周辺は明るい田園が続く。暫く走ると、成昆鉄道が左右する。ディーゼルの貨物が走り行く。帰途に乗ってみたいとの声があがる。13時過ぎ、西昌の街に入る。荷台に豚を積んだ荷車などが行交い、活気を感じる。街を通過して、13時20分、邛海招待所着。邛海は対岸が霞んでみえる大きく美しい湖で、湖岸の柳が中国らしさを感じさせる。のんびりとした後、近くの食堂にて昼食。松館、女性陣は台所を覗き、調味料の多さに感心している。この店はなかなかの美味であり、連日の豪華な食事とビールに“やせない”と松館が嘆き始める。

食事後、彝族奴隶制社会博物館へ。ここは山の中腹にあり、下に邛海が美しく見える。彝族は人口数百万を擁する少数民族（西南中国では最多）で、解放前までは、茲莫・諾合・曲諾・嘎加・嘎西の5階級に分れ、奴隶制を布いていた。ここにはそうした彝族の様々な文物が展示され、興味深いものがあり、また、立派な造りに民族政策の一端をかいま見た気がした。西昌の街に戻り、買い物などを行う。ジープを止めた広場ではサッカーと輪投げとに人々が興じていた。輪投げはジュース類からテレビ、テープレコーダーまでが賞品にある。火把節の後のせいか、街は生々していた。

夜、招待所にて、中国側と歌などに興じる。

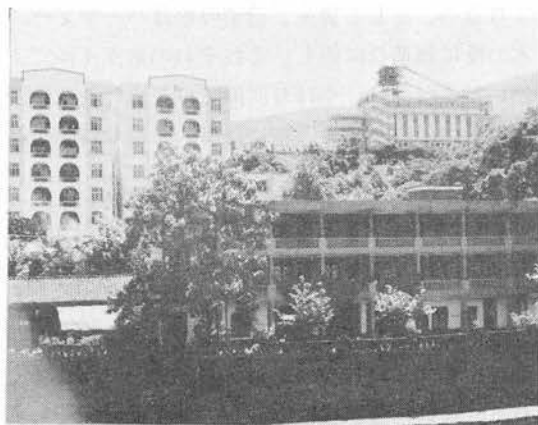
7月30日（晴） 西昌—盐源—木里

7時起床、朝の邛海が美しい。8時半出発、今日は木里に入る。田園風景の中のガタゴト道を走

り、山道を上詰めると、朝もやに霞む西昌の盆地がとても美しかった。峠を越えると、山の斜面に広がるトウモロコシ・ソバ畑の色合がまた美しかった。そんな中を暫く下ると、下に雅砻江が見え出す。この風景は雄大で、如何にも中国大陸らしいものであった。その大河めざして、ジープは転がるように下って行く。11時、長い釣橋を渡り、金河にて休止。サボテンがあり、南に下ってきたことを感じる。11時45分発、支流に沿ってさか上るが、木を運ぶトラックの数が多くなる。13時、峠を越えるが、やはりトウモロコシ・ソバ畑が美しい。30分程で広々とした台地に出る。あふれる緑に豊かさを感じるが、家には大分差がある。13時45分、盐源着、昼食。民族衣装の女性が美しいが、顔つきは厳しい。まぶしい陽光に見上げると、太陽に大きな輪が出来ていた。

14時55分発、街を出ると、台地状の穀草地帯が続く。やがて峠を越え、大きな谷を巻き込み、つづら折の道を走る。17時15分、小金河を渡り、暫く上ると、木里が見えてきた。運転手の“木里”という声に、ジープ内には何ともいえぬ感嘆の声が起きた。17時50分、木里着。想像していたより大きな街だ。西昌と木里を結ぶバスの本数も意外と多かった。夕食に松茸が出る。感激した一行は薫風堂という店でまたビールを呼る。チベット民族の民族性なのか、店の名の如く、ここの5人娘は爽やかで、にこやかだった。“やせられない”と、また松館が嘆く。皆、元気だ。

（記・谷田川 武）



▲高層ビルが立ち並ぶ雅安の街



▲雅砻江に架かる立派な橋

ベースキャンプへの道

知られざる里を行く

7月31日（晴れ）

いよいよ木里を出発する。車の周りには珍しさいっぱい顔が並ぶ。一泊しか滞在できなかったけれど、もう少しじっくり知ってみたい所だった。走り出すとランクル3台のみ。険しい道だがどんな所にも人の手が入っている。突然ボツンと人が現われて土砂崩れを治していたりして、驚きは隠せない。峠を越え、河を渡りさらに峠を上る。途中、木里最大のラマ寺、木里大寺へ立ち寄ることになる。さらに険しい岩道カーブを登ること20分。文革で壊された建物は今や招待所造りに人の手が入っている。車から下り、上の寺まで歩きだす。なんとネコが出迎え、入口の門では大きな老犬が陽なたばっこをしている。ここでも小さなラマ教徒たちが修業を積んでいる。いつ、誰が来るとも知れない、何もない山の上で彼らの厳しい生活は続けられている。少年たちとラマ僧が親しみをこめてニコニコ出迎えてくれる。とれたての桃を御馳走になり、カタをいただく。これからの登山の安全祈願の赤いヒモをいただき、フッと落ちついた気持ちになる。さらに車を走らせる。針葉樹の続く道がどこまでも広がる。まるでラリーコースの中を車はグングンとばす。体中ホコリまみれ。そして、夕方、ようやく白揚平着。4日間の車の旅もここまで、まずは予定通りに着いてホッとひと安心。小さな集落からどっと人が集まる中、隊荷をトラックから降ろす。すっかり埃をかぶった荷が今回の長い道のりを思わせる。人々が囲いをつくって見物する中、荷を分け、食事の支度。よほど珍らしいのだろう、陽が暮れてあたりが暗くなっても見物人の輪は減らない。何をするでもない、たまに互いに囁きあう以外はただ見ている。カメラを向けると恥ずかしがって逃げる女の子以外は笑顔で応えてくれる。いよいよ明日からキャラバンが始まる。どんな人々が居るのだろう。思わずワクワクする。

8月1日（晴れ）

馬28頭が集まってきた。カランコロシと鈴の音が快ちよい。しっかり踏み跡のついた道をひたすら下る。途中、ハーフドームの様な岩を見ながら水洛河目ざして下る。それにしても暑い。日陰を見つけてはぐったり、皆暑さでいささか、元気がでない。それでも途中、村人から松茸を手に入れ大喜び。さっそく手の平以上もある松茸を両手に記念撮影。食担の手にぶらさがった松茸を気にしつつ、道を急ぐ。急な滑りやすいホコリっぽい下りも皆の心配はただ一つ。ズルッと転ぶと、すかさず、“大丈夫か!!……マツタケ。”なんて優しい人たち。それにも増して腰は打っても松茸は、しっかり手から離さない食担の根性に拍手。皆の期待を一心に受けて、目の前の水洛河目ざしてグングン下る。さすがに大きい河だ。ウズを巻きながら濁流が波打っている。当初はこの河の渡河に、ウェットスーツが要るのでは？という声がかかる程、危惧されていたのだが、そんな心配とは裏腹に、タルチョーたなびく、立派な吊橋がかかっており、無事何なくクリア。良かった、よかった。

今日の天場は水洛河の右岸。早めの天場で皆、解放気分。さっそく河で水浴び、釣り、昼寝、洗濯、と思いい場所できつろぐ。スイカを思いきり食べ、そして焚火。待望の松茸パーティー。木の枝に無造作に刺し、それぞれのスタイルで、ぜいたくな夕食。やはり河原では焚火だ。炎を囲んで日中の歌が続く。空には星。幸福な時間が過ぎる。明日も天気だ。

8月2日（晴れ）

今日も暑い。水を求めながらひたすら歩く。遙か山の山また奥。通過する村の先々では珍らしそうに人々が駆け寄ってくる。豊かな緑と石の家が続く、素適な民族衣装の娘たちが笑顔で迎えてくれる。長い行程、暑い中、今日は干上がってしまった。10時間行動でやっと辿り着いたがこの村の

テントサイトはまるで牧場。広びろとした芝草の上で気分爽快。疲れもカンペーと共に砕けていく。テントを囲む多勢の村人におかまいなく、カンペーの宴は続く。しかし、夜半から雷雨。嫌な予感。

8月3日（曇り－雷雨）

村人から近道を案内されて出発。いばらの葉が足に刺さって痛い。サルオガセが鬱蒼と茂った森の中を進む。気分は探検隊。高度は4,000 mを越え、今日はゆっくり順化を図って登る。しだいに視界が開け、お花畑の中に出る。花は今が見ごろなのかもしれない。いろんな種類の花がカラフルに咲いている。フィルムがいくらあっても足りない。そして、あのブルーポピーと御対面。自分も初めてだったけれど、隊長はヒマラヤ通いをして、この方初めて、ということで喜びもひとしお。シャッターを押す手にも熱が入る。とはいえ、高度4,000 mをすぎた地点で、風がとぎれるまで息を止めての撮影はきつい。嬉しさと共に頭がボーとする。今日の天場は予定地より2時間位手前で荷が下ろされてしまったため、やむなく幕営となる。牛の糞だらけの斜面で草を刈り、スコップで糞をどかしながらの作業は意外と難気である。夕食後から黒雲が近ずき、とうとう激しい雷雨となってしまった。いよいよ天気は崩れてきた様だ。しかし、テントの中はサイコロを転がし、歓声で沸き上がる。

8月4日（ガス・小雨）

昨晚降っていた雨は上がったが、ガスの中寒い。カルカがあり、牛とヤクの合の子のゾウが放牧されている。日本庭園の様なお花畑をひたすら峠に向かって進む。木里と稻城の境界線になっている峠には多くさんのタルチョーがかけられている。閑散とした中、ガスの切れ目に浮かび上がるたくさんのマニ塚とタルチョーのはためきは異様なムードをかもしだしている。途中から降り出した雨がミゾレになり、アラレに変わる。寒い。足はビショぬれ。

やがて、峠を下った高原からシャラリの一部がガスの合間から見えだす。険しい岩壁、自然と皆の足にも力が入る。木の精気を感じながら鬱蒼と暗い樹林帯の腐葉土をどんどん下る。途中、コケむした古い大木の先に、抜き捨てられた古い衣服

があちこちにかかっている。なんとなくゾッとしながら足早に立ち去る。突然視界が開け、豊かな、大きな河の流れと、明るい高原が目飛び込んでくる。素晴らしい眺め。まさかこんな所があるなんて、一瞬目を疑う。雲の合間から見える灰茶色の岩肌がまるでカナダを思わせる。豊かで、静かな河の流れを前に、別世界に入り込んだ気分だ。小雨のバラつく音さえ快ちよく、今日はゆったりと快適な天場となる。いろんな種類の鳥がたくさん河に集まってくる。まさにパラダイス。

8月5日（小雨。曇り）

山はガスの中。河の近くにある古い大きなマニ寺の中を通り、森の中から1本の小径を登っていく。あたりはガスで視界がきかない。BCの場所を捜しながら歩く。結局、峠の手前のお花畑にBCを設けることになる。これからの登山期間中のBCとなるわけだが、調度良い場所の所に、鳥葬台の様な大きな平たい一枚岩があり、その周りに平たい岩とくいが打ちこんである。無気味だがやはりいい場所はここしかない。中国隊の先生方は高度のことを考慮（もしかして、この鳥葬台のことも？）して、昨日の天場で大本営を開くことになる。ガスの中、テント設営。メステントの他に2張り。馬方さんもお疲れ様。馬方も今日はここで幕営。夜は飲みや歌えの大宴会が続く。外は歓迎の雨。いよいよこれからだ。

（記・貝塚珠樹）



▲眼下に水洛河を見ながら村落を行く

北面ルート偵察

8月7日、前日の夕方に、かすかにシャラリの頂上が見えた。北面側は、ヒマラヤ麓の立った岩壁で、登れそうにもない。右側（西面）は、ガスで良く見えなかった。又、BCとシャラリの間には、大岩壁が横たわっている。どこを通ればよいやら。明日（8/7）は、そのルート偵察ということ言われて、メステントに西嶋氏と泊まる。夜は雨が降って明日の偵察を心配しているうち寝むってしまった。

朝方ションベンがしたくて目をさます。7時だった。外は、霧雨で良い天気ではない。

山森、酒井、西嶋、松館、谷田川の5名で北面へ行く。9時出発の予定が「天気（ガス）」を見ているうち9時30分の出発になった。BC前のお花畑を通り、小川を渡って、BC南側のコルへ登る。10時にコルに着く（4,610m）。広い稜で、粘土のカワラのような岩ばかり。慰さめにブルーポピーとサボテンに毛の生えた様な花が少し咲いている所だ。南側は緩い斜面だが、ガスで下の方は見えない。小休止をしたのち、東側の稜線沿いに登って見るが傾斜がきつく、岩も悪くルートに採れない。

大岩壁帯のガレ場を、東側へ移動しながらルー

トを探す。不安定な「ゴロゴロのガレ場」の連続で、浮石が多い。草付で上部に出られそうに見える所も、行って見ると悪くてルートには出来そうもない。さらに東へトラバースぎみにルートを、探すが良い所は見つからない。おまけに天気も「ガス」が出たり晴れたりで、バツしない。

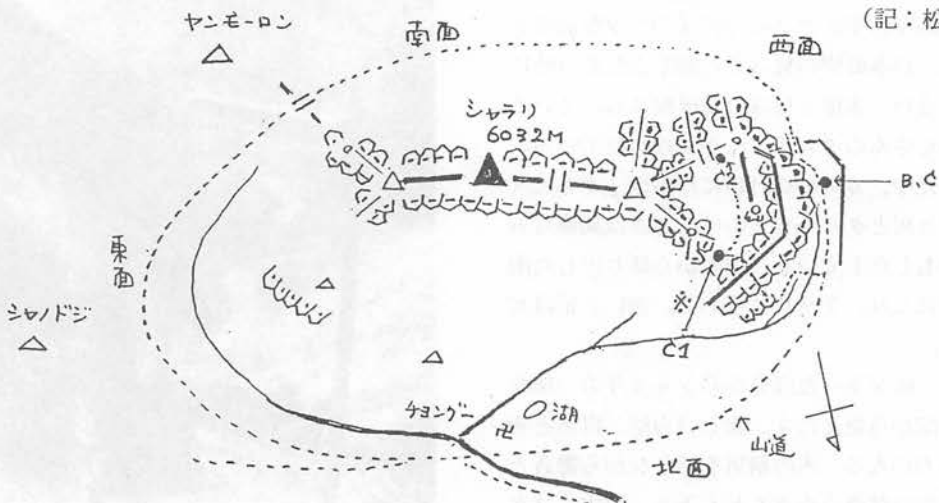
コルを出発してから、2時間位もトラバースして岩壁の左側のガリーの所に出た（12時30分）。山森氏がさらにガリーより東側に進んで見るが、前方はガケとのこと。西嶋氏がガリーを登ってみる。上部は「草付きプラトー」との西嶋氏の声で、全員ガリーを登りプラトーに出る。気持ちの良い草付きプラトーがあるが、さらに上部に岩壁帯が有り、がっかりする。「今日の偵察はここまで」という山森隊長の判断で、BCに帰ることにする。

プラトーで茸（ナラタケ）を採り帰路につく。ガリーの取付部から、対岩の貢嘎冲古からBCへ行く道をめざし、ガレ場を下り、小灌木を漕いで道路に出て、BCに帰った（14時）。

今日は、荷上げルートを、確保できずに終わった。

BC発9:30→4,610mのコル10:00～10:20
→ガリー上部12:30→BC着14:00

（記：松館正義）



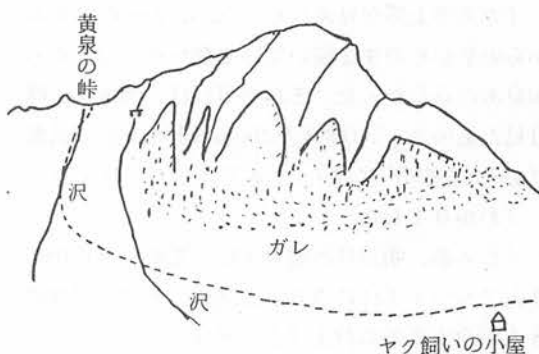
※ この間の樹林帯をぬけて内院へ入るこにも出来る。

西面ルート偵察

8月8日、山森、酒井、大久保、干場、菅沼、貝塚の6名で西面ヘルートを求めて偵察に行く。BCから西へコルめざして100mほど登る。5日にBC適地を探すため、ここまで登ってきていた隊員から聞かされたとおり、ここだけが異様な世界に見える。ボロボロの衣服や靴、帽子が岩や杖にひっかかっている。濃いガスの中、ブルーボビーとこれらだけが浮き上がって見える。名づけて「黄泉の峠」4,600m地点。

しばらく下り、ガラ場から草地へ出、沢を横切る。沢というより雨による流水かもしれない。何も見えないのでしばらく様子を見る（視界は30mほど）。時々ガスの切れ間から視界が開けてきた。小さな岩稜が幾本か走り、その間のルンゼ状からものすごい量の岩が押し出されて一面ガラ場になっている。登れそうな稜はないものか、と4,500m付近を水平にトラバースしてみる。途中、ヤク飼いのおじさんに会う。「おじさんシャラリはどこち？教えて。」と尋ねるが、もちろんちががわからない。しばらく行くと黒い岩峰が見え、そのコルから顕著な岩稜が続いている。あそこだけは硬

▼西面スケッチ



い岩であってほしい、と願いつつ近づいてみると、触ればボロボロ落ちそうだった。「滝谷第三尾根みたいだ。」と酒井さんが言う。気落ちしつつも更に右へトラバースしていくと大きく南へ回りこむようになり、ガラ場から草付へと変わる。シャラリの南面まで来たようだ。そのまま草付を下って道に出、BCへもどる。

BC発9:05→黄泉の峠9:30→西面偵察9:50~13:45→BC着15:30（記：菅沼弘子）



▲B.Cより北面偵察ルート



▲西面岩壁を偵察

花咲く内院へ

C1ルート工作

8月8日夕食時、酒井登攀リーダーよりその日の西面偵察の報告と9日の行動予定が発表された。

「ガスで上部が見えなかったが、西面にも北面からの壁がそのまま続いていて登れそうなところが見あたらなかった。それで明日は、西さん、昨日見たあのルート(標高差200mほどの北面の前衛フェース左岸壁)にフィックス工作してくれない。」

「わかりました。」

「じゃあ、明日は西嶋、干場、松館、谷田川の4人でルート工作に当り、大久保、菅沼、貝塚の3人が途中までの荷上げと、帰りにアプローチの整備をして下さい。全体のリーダーは西さんにまかせます。」

その晩、テントの寝床がデコボコのため背中が痛くてなかなか眠れないままに「あのルート」をどう処理するかあれこれ考えてみた。

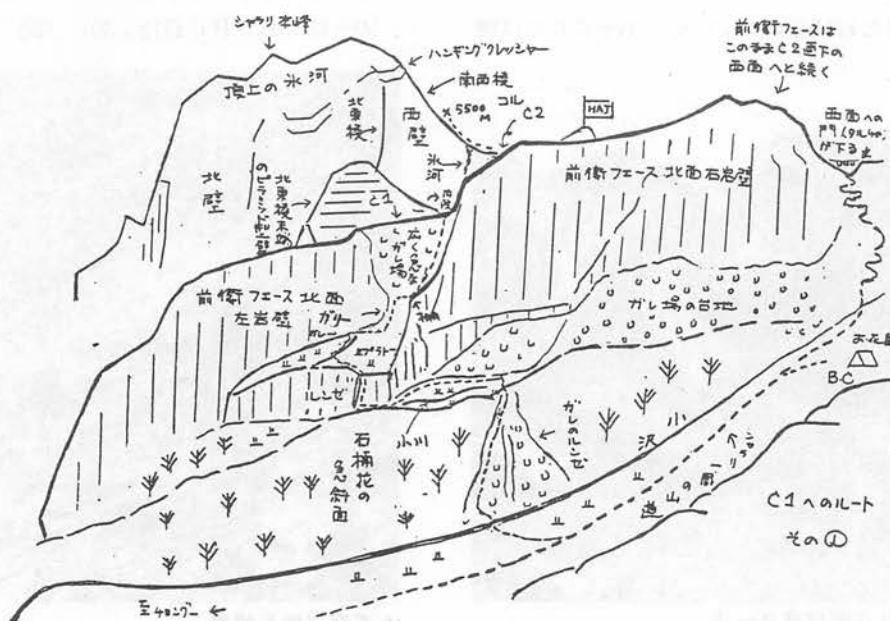
まずアプローチをどうするか。

「一昨日の偵察ではBCからフェース基部のガレ場を直接トラバースしたが足場が悪すぎてルー

トとしては使えないだろう。戻りはそこをさけて2メートルもあるシャクナゲの灌木帯の急斜面を約100メートルほど下り、小沢を渡って山道を30分以上かけて登りなおしてBCに戻ったが、それもシャクナゲを切るのは労力と自然保護の両面で面白くない。確か、山道からもう少しBCよりにガレたルンゼが中間ぐらいのところにつきあげていたはずだ。あれを使って見よう。」

アプローチ案は決った。前衛フェースをどう処理して内院に入るかが問題である。偵察時、壁を一目見て瞬間的に私は「ここならルートを開ける」と感じて「どうですか」と提案したが、「荷上げルートにはならない。」と否定されてしまったところである。西面が不可能とわかって再び見なおされたのだが、悪いことは確かである。

「私の勘は正しかったのだろうか。岩の質はもうそうだ。雨でぬれツルツルに光って見えた核心部にしっかりしたホールドはあるのだろうか。上部はうまく内院につながっているのだろうか。」



あれこれ考えゴロゴロと何度も寝返りを打っているうちにいつしか眠り込んでしまった。

8月9日、7時起床。脈拍64、体温36.4℃

今日は珍らしく終日晴れる。

9時30分、山森隊長、酒井リーダーを残し、7人元気でBCを後にする。

9時45分、昨夜考えたガレのルンゼを正面に見るところで山道はずれ少し下ってひとまたぎで沢を渡る。ガレには放牧用と思われるかすかな踏みあとがあり、約40分でBCから続いている台地に上る。下降点の確認用に大岩にケルンを積む。以後、そこが往復の休み場となる。

台地の中央を流れる小さな沢の右岸を前衛フェースぞいに約20分ほどたどると上部がプラトーになっている約20mほどの壁の張り出しに着く。

ここを登ると前衛フェースの約4分の1の高さがかせぐことができる。ボロボロの壁であるが、偵察時に1ヶ所だけ上部にぬけられるガリーを発見している。ガリーは浮石が多いとは言え2級上ぐらいのグレードなので全員ヘルメットのみ着用、ノーザイルである。落石を避けるため1人づつあがるが約5分ほどでぬけられるので時間はあまりかからなかった。荷上隊の3人はここまでしてデポ品を置いて、ボルトで支点をつくりガリーにフィックスロープ1本張った後、アプローチルートに目印をつけながら引き返していった。

私を含む4人のルート作戦隊は更にC1への道を開くため休まず壁にむかった。

プラトーの左に前衛フェースからゆるい稜がおりてきている。それをたどって上部の急なガレ場も登りきってしまうと10分ほどで完全な壁にぶつかる。右に30mほどトラバースし、かねてルートにとねらい定めていたガリー状の岩壁の基部にたどりつく。2本足はここまでで、全員ハーネスをつける。人工落石のこわそうなルートである（実際、菅沼隊員が撤収時に足首に落石をうけた）。

ハーケンを一本打ち込み、干場氏の確保で私、西嶋が9

mのメインザイルとフィックス用のザイルをつけてトップに立ち上部にむかう。最初の1ピッチ50mは約70°ほどの斜度を持つ核心部が20mほど含まれているのだが、ホールドが豊富で思ったより簡単に登り切ってしまった。登り切るともう2本足で登ることも可能となり、ガリーの落ち口を右に30mほどトラバースし、BCがのぞめるリッジの草付の棚で全員一休み。ここまでで50mフィックスを2本弱使用。棚より上部は傾斜こそ落ちるが鋭い岩角の石が累々と重なってはるか高みへと続いており大変登りづらい。

それで、更にフィックス2本（後日1本追加）を張り、午後2時、4,700mの頂稜にあがる。

頂稜より反対側をのぞいて愕然とする。

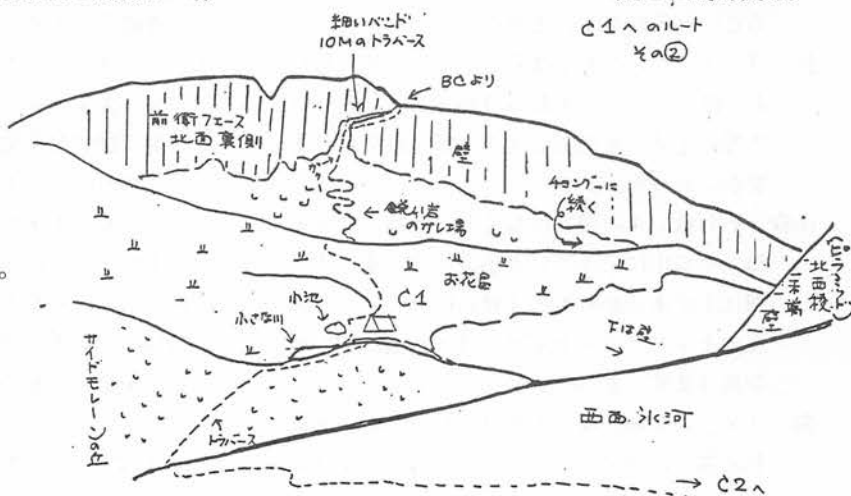
「壁になっとるぞ、こりゃあかんわ。」「あそこ通れるかも知れん、ちょっと見てくるわ。」

やっと一ヶ所、細いバンドをトラバースして崩壊したガリーからおりるルートを発見。フィックスを1本張る。ガリーの下の靴底も切れそうな瓦礫地帯を経て午後3時、花咲く別天地、シャラリ内院に立ち、しばし偵察をする。

「隊長、内院に着きました。水も流れているC1適地も見つかりました。」と無線でBCに報告。

ケルンを積みフィックスを直しながら（6本300m、ボルト2本、ハーケン8本）4人全員無事に午後6時BCに帰幕する。（後日、チョンゲーから谷沿いにつめて直接内院に達するルートも可能であることが判明したが、その時はBCはもっと下の谷筋になるであろう。）

（記：西嶋鍊太郎）



雨に煙る岩壁帯を行く

C 1 荷上

10日(木) 雨 C 1 へ荷上げ

山森「我々は、本日9人全員でキャンプワン4,680mのキャンプワン予定地へエー荷揚げをしました。10時30分にエー出発しまして17時過ぎに全員帰幕しました。エー了解でしょうか。どうぞ。」

張「ハイ了解。おめでとうございます。キャンプワンができて、えーとね、えー今日は・・・みてまして・・・いかがですか、どうぞ。」

山森「ハイきのう、先生方が見ていたように(張、江両氏はBCに訪問有り)岩壁の中はエーうまい具合に雨は上がってくれましたが、C 1に着いた当時、あるいは帰る時、そして、帰って来てからかなりの雨にみまわれましたが、エー全員元気で荷揚げに、荷揚げをしました。どうぞ。」

張「えーとみなさんが、まーご苦労したと同時に私たちは、下で本当に(山森「のうのうとしていただろう」)楽々と昼寝をしていました。(皆「ワハハハ」)どうぞ。」

山森「ハイ、C 1の予定地は高度えー4,680mエー草地で、近くに水が流れていまして、キャンプ予定の横には小さな池がある非常にすばらしい別天地です。どうぞ。」

張「ハイ、たいへんすばらしい所は、私ども是非一度行って(「来れるのかあ?」)みたいと思います。氷河湖の大きさはどれ位ありますか。どうぞ。」

山森「それは、氷河湖ではなくて、池塘、池ですね。草の中にできている小さな池です。氷河湖は上にあるかも知れませんが、エー現在のキャンプワン予定地にはエー池、草の池があります。どうぞ。」

張「えー、了解。えーと明日の私たちの予定は私と孟さんがズアーへ行きます。江さんは私

たちのキャンプを守ってくれます。えーと明日の朝は早く出発しますので、朝と昼の通信はやめていただきたいのですが、いかがですか。どうぞ。」

山森「ハイ明朝9時それから昼の14時交信をしない件了解しました。我々も明日また全員でキャンプワン予定地へ荷上げをしますのでエー好都合です。どうぞ。」

ジーとしばらく沈黙。

張「・・・えー・・・なくなりました。えー・・・10時に通信していただけますか。どうぞ。」(日本側からの通信がよく聞こえないということで電池を換えていたらしい)

山森「あしたの朝10時ですか。どうぞ。」

張「あしたの夜のつまり、22時です。(エー寝てるよ)・・・まんいち・・・どうぞ。」
(あーそうか寝てないか)

山森「エーと、通常、私たちの生活は、9時には寝ます。夜の9時には寝ますが、幸運な事に明日は、西嶋先生の40んー(なな、なな)47才の誕生日ですので話たちは荷上げを終わってベースキャンプに帰って来た後、誕生祝いをします。そのため、たぶん10時まで起きていますので、エー明日は10時先生方と連絡とります、どうぞ。」

張「ハイ了解。こっちでもまー私たち3人ともね、まー・・・を洗って西嶋さんの誕生日を祝うはずなんですけど。えーとズアーに行かなければなりませんので、西嶋さんに、よろしくお伝え下さい。誕生日おめでとうございますとお伝え下さい。どうぞ。」

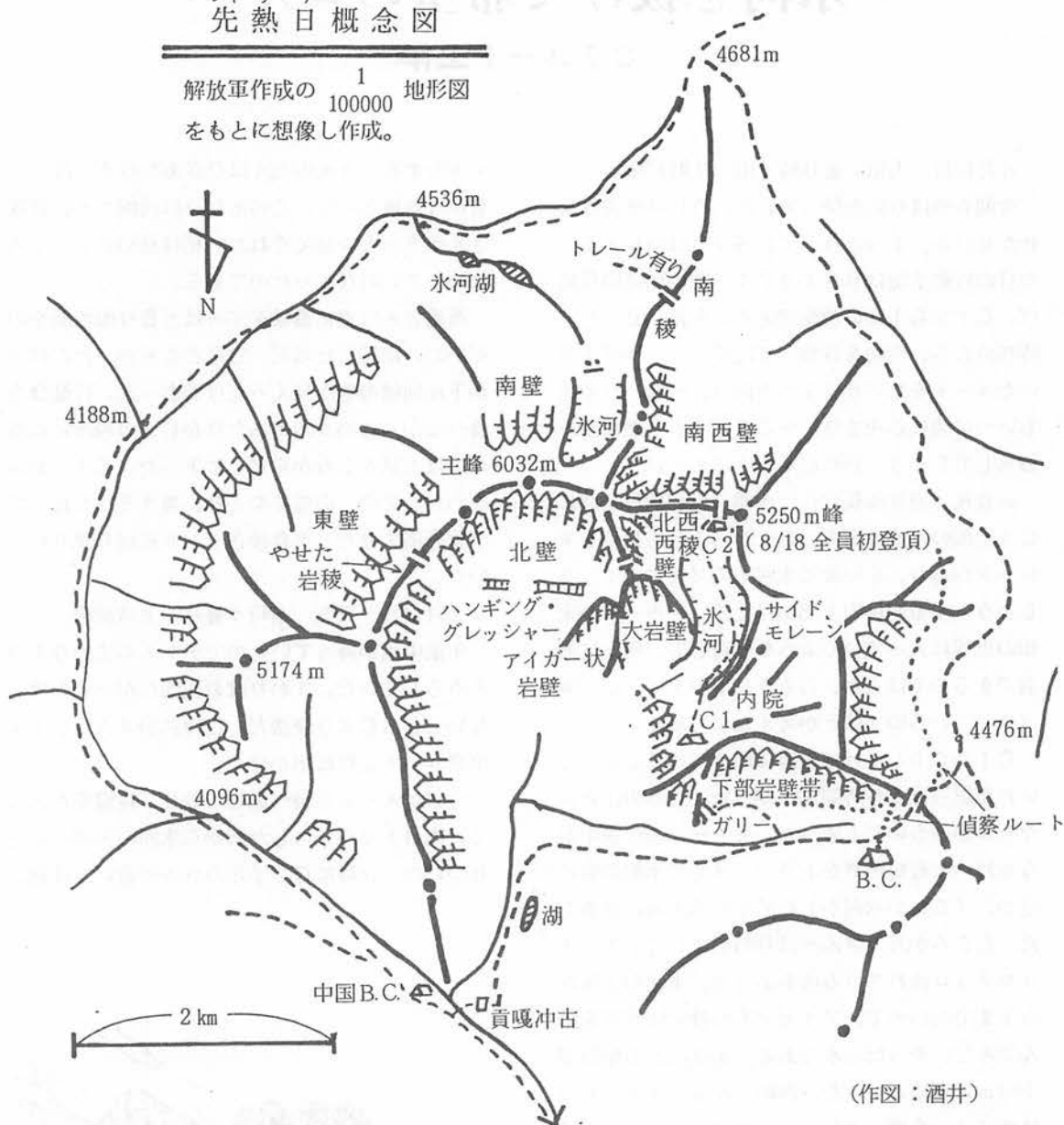
山森「ハイ、それでは、明日10時に。ワンラ。」
(10日中国側との夜9時の定時交信より)

C 1を張ったせい全員22時まで起きている。

11日(金) 雨のち晴、夜雨 C 1 へ荷上げ
7時起床、またも雨模様で出発を遅らす。10時

シャラリ
先熱日概念図

1
解放軍作成の 100000 地形図
をもとに想像し作成。



全員で荷揚げに出発。いったん谷に下る。ガレの中を登ると、30分丁度よい休憩の岩がある。そこで、想い思いにキジを打つ。女性陣はちょっと遠出。そこからヤブ道をトラバースぎみに30分歩く。テープを張って間違えないようにしてあるのだけれど、いつも同じ道を通れないでルンゼ下に着く。ルート工作隊に感謝しつつ、フィックスロープをたよりに脆い緩い岩壁帯を攀じる。荷揚げを繰返していると、海外の山に来ているという実感が湧

いて来る。13時25分前後C1着。16時30分BC着。晴れる。西嶋さんは岩の上にひとり瞑想にひたっている。19時より西嶋さんの誕生会。松館さんの寿司は、すばらしい。菅沼さんは日本からケーキを持って来ていた。中国隊も無線でHAPPY・BIRTHDAYを歌って参加するなど、宴はいつ果てるとも知れず盛り上がった。

(記：大久保 博)

氷河を抜けて希望のコルへ

C 2 ルート工作

8月13日 天気 曇り時々雨 7時起床

今朝もやはり雨が降っていた。昨日は体を休ませたせいか、すっきりしているような気がする。今日の行動予定はBCよりC1へ団、個装の荷揚げ、C1から上部の偵察である。全員がBCを9時45分ごろ、荷物を背負って出発した。何回か歩いたルートをたどりC1へと向う。一服いれる所もいつの間にか決まり、そこを通ると自然に腰をおろしてしまう。13時ごろC1に着く。

昼食後、酒井隊長代行、西嶋、貝塚隊員と共にC1上部の偵察に出発。C1から上部を見るとモレーンがあり、その後に氷河その又後にアタックしようとする西稜の上部が見える。一步一步が未知の世界に入っていくような好奇心で、何かに遭遇できるのではとか、百カラットのダイヤがゴロゴロしているのではとか考えながら歩く。

C1から少し歩けば氷河に取りつけると思っていたが思ったより時間がかかった。日本の山とスケールが違うのだと思った。モレーン稜の途中から氷河への最短距離をトラバースして氷河の前に立つ。『これが氷河か』初めて見る氷河に感激した。石ころがたくさんへばりついていて、水がチョロチョロ流れている所もあった。氷河の上部から下までながめて、アイゼンもつけずに氷河を踏んでみた。やっぱり氷である。30度ほどの傾斜で100mほど続いていた。西嶋さんはアイゼンもつけずにそこを登って行った。他の3人は氷河の横を登った。

5,000m 付近でアイゼンをつけて氷河を登りはじめた。このあたりから少し傾斜もゆるくなり、そのうちほとんど傾斜がなくなってきた。酒井さんは少し遅れてきた。アイゼンを片手に登ってきた。西嶋さんと合流した貝塚さんと私は小さなクレバスを避けながら前へ進んだ。ガスの中にスノーキャップが近くて見えたので、これは別のスノーキャップだと言いながらコルへと3人でラッ

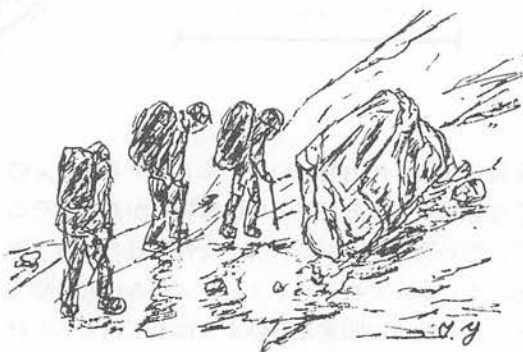
セルをする。コルの近くはひざあたりまで沈み雪もかなり重かった。このあたりは西嶋さん、貝塚さんがラッセルしてくれた。私は息切れして2人についていけなかったのである。

西嶋さんは更に雪稜を50mほど登り南西面をのぞいた。期待した氷河、雪壁どころか、ただはるか下に地獄の底が見えるだけであった。行動食を食べながらこのコルのあたりがC2の場所になるのではと話をしながらC1に下った。C1でお茶をわかつてのどの乾きを取り、焼きそばを食べて夕食を済ませた。夕食後各テントに帰り眠りについた。

8月14日 天気 雨時々曇り 8時起床

午前中雨が降っていたのでテントのまわりをうろうろしていた。まわりはお花畑だがヤクの糞もないし、BCより快適だ。12時25分4人はC1を出発ルート工作に出かけた。

今日はモレーン稜へ最短で登り、稜線をたどって、昨日トラバースした所から氷河の末端にたどりついた。16時にC2予定のコルに着いて休憩、



ここで登攀具をつけて西稜のルート工作に出発した。

最初は西面の氷河の上をトラバースしたのでよくスリップした（アイゼンをつけていなかった）。100mほど登って稜線に立った。ここは氷河ではなく雪がつもっているだけだ。ひざくらいの雪をラッセルしながら岩稜を歩くのであるが少しずつ稜も細くなって石ころの瘦尾根になってしまった。貝塚さんいわく『すごい高度感。』その一言。私はその言葉でまわりを見回し、思ったことは右も左も落ちれば痛いので済まないし、前はまた尾根が痩せている。『こわいなー』時刻は5時も過ぎていたのでメインロープとフィックスロープをザックから出す。

酒井さんがトップで西嶋さんが確保する。酒井さんはバランスを取りながら一步一步前進し時々石をけり落す。なんとか1ピッチフィックスを張り4人は40mほど前進。こんどは西嶋さんがトップで、左側のバンドをトラバースして前に出る。酒井さんが確保、貝塚さん、干場は後から見守る格好である。だいぶ、まわりの高度にも慣れたせいにか心にも余裕がでてきた。しかし岩という岩はすべて崩壊していて慎重に行動しないと、ちょっ



と前に落ちていった岩と同じ運命をたどることになりそうだ。

西嶋さんの姿が見えなくなった。そして雪面に姿を表わした。ここから見ているよりははるかに苦勞しているようだ。40何mもはなれていると支点がどうのこうのと言っているけどはっきり聞き取れない。ようやく2本目のフィックスを張り終え、西嶋さんが戻ってきた。今日はここで終了した。持ってきたメインロープ2本と数本のフィックスロープ他金具をデポして布々稜線を4人で下った。

氷河を下っている途中からまた雨が降り出し、C1に帰ったのが19時40分であった。先にC1に登ってきていたみんなにお茶をよばれて夕食につく。
(記：干場 晃)

ルーズベルト

「木里」が載っている文献は少い。その中にある「木里藏族自治州概況」は有難い資料である。しかし、これも結局は中華人民共和国成立後の産業を中心とした資料に過ぎない。

その中にあるのはほんの申し訳程度に、かつてこの地方がどのような変遷を経たのかが記されている。中国五千年の歴史だから話は古い。秦の時代から始まるのであるが、当初は西昌付近を中心にした地方は「笮」と呼ばれていたらしい。これはもう「三国志」級の時代であり、あまり参考にならない。

周辺の資料を漁っていると共通の人名にぶつかった。その名は「ルーズベルト」である。

まずは「岳人1号」に藤木九三氏が執筆された「謎の山＝アムネ・マチンの究明」の中に、テオ

ドル・ルーズベルトとして登場して来る。又、吉沢一郎氏が「岩と雪2号」に「世界の秘峰アムネ・マチン」としてかなり詳細な記事を執筆されているが、この中でも「このミニヤ・ゴンカーは1929年にT・ルーズベルト」が30,000呎と発表して……」と登場する。

最後は劉曼卿が「女性大使チベットに行く」の「木裏」の中で、「かつて米国の元大統領ルーズヴェルトの子息と海軍武官が木裏に来たとき、土司に兵器を数挺贈った」として登場する。

藤木、吉沢両文献に登場するルーズベルトとこの木里に現われたルーズヴェルトは時代的には同じ頃の人であるので恐らくは同一人物なのであろうと思う。今回は力不足にてこの周辺の文献を細かく調べることができなかったが、何かの機会にまとめてみたいと思う。又、木里に足を踏み入れた日本人が我々の前にいたのであろうか。調べは緒についたばかりである。
(記：山森)

サインはV指岩へ

C 2 荷上

8月15日、西稜のコルをC 2とすることが決まり全員でC 2へ荷上げする。A隊はC 2を拠点に上部ルート工作のため主に個人装備、B隊は幕営用具、食糧、登攀具を荷上げする。

C 1から上部はA隊のケルンを頼りにモレーンの中を登る。落石も落としきって歩きやすくなった。9人もの足で踏み固めれば道はすぐできてしまう。今登山、初めて登山靴をはいた。途中からモレーンを直上せず左へトラバースして氷河にとりつく。氷河の登りはアイゼンをキュッキュッとさせて順調に高度をかせぐ。幅100～150m位だろうか、お世辞にも美しいとはいえない。ヒマラヤの氷河の末端には美しい氷柱帯がある、とばかり思いこんでいたので意外だった。50分ほど登ると傾斜も緩くなり雪も出てくる。ちょうどよいお休み処であるが、付近にはクレパスが口を開いていたり、かくれていたり、でトイレに行くにも気を使う。ここで5,030m地点。ここまで登るとアイガーみみたいな三角岩も、さほど威圧的でなくなる。横状に走る節理も手にとるように見える。手を伸ばして触れてみたい衝動にかられる。そこから更に雪の斜面を45分ほど登ってコルに達した。エスパス1張を設営し、C 2とする。雪積は40cmほど。せっかくC 2まで来たのに視界はきかずホワイトアウトになってしまった。A隊の酒井さん、西嶋さん、干場さんと別れ早々に下山する。

(C 1 発10:40→氷河とりつき11:25→55→5,030mクレパス帯12:45→13:00→C 2 13:40→14:25→C 1 着15:30)

8月16日、昨日同様C 2へ荷上げに行く。昨日と同じ場所で休憩し、昨日と同じような時間帯でC 2に着く。山森隊長はただボーッと歩かず、歩数を数えていた。氷河とりつきからクレパス帯まで1,470歩、更にC 2まで1,360歩、合計2,830歩、1歩30cmとして約850m、40cmとして1,130m、標高差350m、所要時間3時間。

B隊も岩稜登りを経験してみよう、あの指の形をした岩まで。ということでフィックスロープ、スノーバーをかついで取りつく。上部でA隊が奮闘してくれている姿がよく見えるので、とにかく何かをしたい、という気持ちが強かった。トレースを150mほど進むと最初のフィックスが現われ、ユマールをセットする。傾斜も緩く雪もあるので難しくない。2ピッチ目は稜の左側をトラバース気味に登る。かなり大きな岩でもつかむとグラグラするので、そっと押えるようにして進む。まだ足場がしっかりしているので安心できる。岩壁につきあたり、その下は4～5人が立っていられるほどの広さでボルトもよく効いている。安心してセルフビレイをとり後続を待つ。岩壁を右へ回りこむと全く雪のない岩稜となり、アイゼンはずす。ここで南面をのぞきこみ、ワァーすごい、どっちに落ちてでもタダでは済まない、と実感する。傾斜の強い10mほどのフェース状となり岩が脆く落石に注意しながらだましまし登る。その上は馬ノ背状が5m続きハーケンとスノーバーが岩に打ちこんであった。ここの右手にちょうどVサインをしているような岩がある。後続の松館さんに「松さん、これ以上来ないで、そこから荷物放り投げてよ。」と思わず言ってしまう。二人分の荷物をデボし、2ピッチほど上にいる西嶋さんに声をかけ下降する。アイゼンを着けるまでのたった15mほどの下降に神経がピリピリした。フィックスには頼れない。1歩のミスも許されない。頭の中はそればかり…。A隊の3名の奮闘には頭が下がる。がんばってきてほしいが、何よりも無事に降りてきてほしい、と願わずにはいられなかった。

(C 1 発10:25→氷河とりつき11:20→35→クレパス帯12:25→55→C 2 13:35→14:00→上部荷上げ14:00→16:00→C 2 発16:15→C 1 着17:15)

(記：菅沼弘子)

アイスクャップを目指して

頂上ルート工作

8月14日（曇り時々雨）

夜半から強く降っていた雨が、なかなか降り止まない。この山の特徴として、夜半から朝方にかけて強い雨が降ることが多い。日中の大半は曇りで時々雨。それが夕方になると一時晴れて太陽が顔を出す。

出渋っていると、BCから登ってくる5人が、岩稜上に見え出した。

傘をさして氷河上を登る。小さなクレバスがいくつも開いている。コルに着いた頃は、例によって天気が回復してきたため、西稜に登ってみようということになる。

雪稜を400m位登り、岩稜となる所の最初の岩にハーケンを打ち込む。（17：15）

酒井トップで1ピッチ目を登る。傾斜は緩いが実に脆い岩稜だ。大きな岩を左右の谷に墮落すと、周囲の岩を巻き込んで、豪快な岩雪崩となって落ちて行く。

2ピッチ目は西嶋が、岩稜の左側のバンドをトラバース気味に進む。雪面に突き当たり直上し、岩峰の下を右に5mトラバースした後、フェイスを直上する。実に脆い岩だ。

この頃再びガスが濃くなり、寒くなる。18時過ぎなので2ピッチだけで中止。

下降は支点への信頼感がないため、こわごわとしか下れなかった。

<タイム>C1（12：25）～コル（16：00）～登攀開始（17：15）～コル（18：50）～C1（19：40）

8月15日（曇り時々雨）

全員でC2へ荷上げ。視界の悪い中を登り、5,150mのコルにテント1張を張りC2とする。酒井、西嶋、干場の3人がこれに入り、他の6人はC1に下る。

外はガスがかかり、雨も降っているため、テン

トの内で暖い物を飲んでいると、ルート工作に出渋ってしまう。

16時半、意を決して出発。

昨日の終了点より、干場、西嶋とトップで2ピッチ伸ばしたが、あいかわらず岩は脆く、支点到確実なものが得られない。

この岩稜では、概してロックハーケンが有効だ。積み重なった1つ1つの岩はあまり大きくなく、ロックハーケンを打ち込むに適したリスは少い。しかし、アイスハーケンでは、打ち込んでいくほどに岩が動いてしまうのだ。また、シュリングをかけて支点にするような確実な岩の突起もない。昨日打ったハーケンがいつも簡単に抜けてしまったりするのは驚かされた。

時々、C1地点までも視界がきき、下の氷河に日が当たるが、我々の所はいっこうにその恩恵に浴さず、寒い。

下降時には曇りとなり、すっかり冷えきってC2のテントに転がり込んだ。

<タイム>C1発（10：40）～C2（13：40）
ルート工作出発（16：30）～C2（20：10）

8月16日（曇り夕方雪）

起きると外は雪が舞っている。昨日の寒さに懲りて、今日は冬の衣類を着込んだ。今日の行動でどこまでフィックスできるかで、今回の登山の成否が決まる。

登攀用具、フィックスロープでザックが膨れ、昨日の終了点（図の④）まで登るのに時間がかかってしまう。昨日打った支点を1つ1つチェックし、補強しないと安心して使えない。図の②の支点のアイスハーケンはいつも簡単に抜けてしまい、ボルトを打ち込む。その上の指状の岩峰の下の方のピナクルの支点はフィックスロープに荷重をかけると崩れてしまった。

C1から6人が登ってきて盛んに声援を送って



▲西稜概念図

くる。我々もそれに答えるべく頑張るが、ルートは遅々として伸びない。

日が当たると右手の南西壁をしきりと雪崩が落ちる。1つの雪崩が下まで落ちきらないうちに、他からまた次の雪崩が落ちるという激しさだ。こんな豪勢な雪崩見物は初めてだ。

C2で休んでいた隊員が西稜に取り付いた。そのうちに追い付いてくるのかと思っていたが、彼等、彼女等も2ピッチ登り、荷をデポして下って行った。2ピッチだけでもこの稜の悪さが十分わかってもらえるだろう。しかし、本当の悪さは、これから先だった。

日干しレンガを積み重ねたような岩峰が我々の前方に立ち塞がった。『上部の黒い岩壁まで登れば急になるので、たぶん岩も硬いだろう』早く黒い岩壁帯までと頑張って登ってきたが、その前の関門だ。とても正面は登れない。岩峰の手前には小さな平坦地があり、2~3人ならビバーク可能だ。このテラスから右手と左手に水平なバンドが走っている。それに一縷の望みを託す。トラバースして行って上へ出られるか否か……。

一番調子の良い西嶋に全てを任せる。左へ15m程トラバースして行き、

「直上すると何とか上へ出られそうだ」

と言う。脆い岩を5m程直上し、視界から消えて行った。落石がポロポロと落ちてくる。時々、ザ



▲希望のコルから西稜へ

イルが出るが、止まるとなかなか動かない。悪戦苦闘している様子がザイルの動きで察知できる。

さんざ待って、声がかかり、干場が登りだす。干場は西嶋のジッヘルポイントが悪いためさらに登る。大きな落石!!

「だいじょうぶかー」……

「今の落石がフィックスに当たっているので気をつけて登って来い」との声がかかる。

さすがに悪い。脆い。

落石はロープではなく、西嶋に当たっていた。

干場のジッヘルしている所は上部の見通しがきかないため、バンドを5m程トラバースする。続いて酒井、干場と登り、3人がバンドに並んで立つ。

見上げる黒い岩壁帯は絶望的だ。

「まいった!!」

「ひどい岩壁だね。まるで成都あたりの民家の瓦屋根みたいだ」と西嶋。

「ここまでの岩稜より悪いんじゃないかな」

「登るとすると、雪の部分繋ぐしかないね」

「あそこからあそこへトラバースして……」

「しかし、今の雪の状態では安心できるスタンスは作れないよ」

「たとえ無理して登ったとしても、下降が危険すぎる」

「第一、金物がたりないよ。使えるもので残って

いるのはロックハーケン2枚とボルト8本だけだぜ。これだけで高度差300mもの岩壁帯が突破できるかい」

「それにC2からでは遠すぎる。途中1～2回のビバークは必須だ」

……

我々3人は、バンドの上で思いっきり背伸びをして、手の届く限りの所の石を1つずつ攪んだ。そこが、結果的に今回の最高到達点となった。

18時、行動を打ち切り下降に移る。支点の補強、カラビナの回収等に時間がかかる。下るほどに天気は悪くなり、曇、雷、霰、雹となった。金物をたくさん付けているので、雷が怖い。気だけが焦る。下のメンバーが岩稜下の雪稜にフィックスを張ってくれていたのが助かった。

グシャグシャに濡れC2着。C1まで降る予定だったがC2泊まりとする。暖い飲み物を飲みやると心地がついた。今日の様子から、明日以後の行動を考えるが、どうも否定的な答えしか出てこない。

21時頃から降雪が強くなり、テントの下半が埋められた。夜中、寒くてうとうとしたのみ。

<タイム>ルート工作出発(10:30)～下降(18:00)～C2(20:30)

(記:酒井国光)



▲主氷河からルートとなった西稜(右)とアイスクャップを見る

さらば！シャラリ

BCから貢嘎沖古へ

8月18日 雨は降っていない。東はシャラリの下半分や氷河も見えているが、西は霧が立ち込めている。10時過ぎに全員でC2に向かう。通い慣れた道であり早いペースで到着。撤収作業の頃にはミゾレから雨に変わった。

C2の南にあるピークへ向かう。不安定な岩の上でうっすらと雪が積り、足をとられながらも、13時半霧の頂上に立つ。5,250 m。岩屑だらけの頂上であるが、霧が去来する合間に眼下には時折り深い谷底が見えた。登頂儀式を済ませ14時20分頂上を後にする。

C1から個人装備をまとめて、雨の中をBCへと降りる。BCには連絡官と通訳が上がって来ていた。今後の撤収作業の打合わせを行う。

20時過ぎから清酒を開けて残会兼慰労会。

8月19日 昨夜は一晚中雨だった。山森を除く8名はC1の撤収を行う。

8月20日 夜半からミゾレが降り冷えて寒い朝である。そのうち大粒の牡丹雪となる。花咲き乱れる草原に真白い大粒の雪が舞う光景は幻想的である。登頂断念で隊員それぞれの胸に去来する想いを代弁してくれるかのようだ。

ゴミを燃し、5頭の馬に荷を任せ、12時過ぎ

に短かくも多くの思い出を作ったBCを後にする。出発するとひとしきり激しく牡丹雪が降り心の全てを洗い流してくれる。さらば！ シャラリ。思い出の山よ！

途中上から見た「池」に寄る。深い碧色水面に周りの針葉樹が影を落す。静寂そのもの太古の自然がひっそりとたたずんでいた。

久し振りのコンガチョングーに天幕を張る。16時半には馬も荷を運び終えた。またも雨である。

天幕に中国側3名を招待し登山打ち上げを行う。全員でシェルパ風に誕生日の曜日で名前を決めた。

ダワ（月） 菅沼

ミンマ（火） 酒井、西嶋、貝塚、孟

ラクバ（水） 大久保、谷田川、江

ブルバ（木） 干場、張

バサン（金） 山森

ペンバ（土） 松館

ニマ（日） なし

最後はお決りの「サイコロ」。中国側も含め12人が無心にサイコロを振る。

短い夏が終り、それ以上に短い秋があつと云う間に駆け抜けて行く、桃源境コンガチョングーの夜はこうして更けて行った。（記：山森欣一）

桃 源 境

桃源郷の言われは、中国・晋時代の陶淵明の作による「桃花源記」から来ている。ある漁夫が道に迷って桃林に入り「秦」の乱を避けた者の子孫が世の変遷を知ることなく平和で裕福な生を楽しんでいる「仙境」を見という仮託の故事。以来俗世間を離れた別天地を仙境として「桃源境（郷）」と呼ぶようになった。

桃源境と同じ意味に「シャングリラ」と云う言葉がある。我々が向う山は「先熱日・シェルウル」

「薩内日・サルウズィ」などと発音される。本当の発音や意味は現地に行つて確認してみなければわからないが、どうやら最後の「日」はチベット語で「山」を意味する「り」であることは間違いないようだ。

これから訪ねようとする里は、どうみても現代から隔絶されたシャングリラとしか考えようがない。

周囲を高い山と深い谷によって囲まれた木里の山奥に一きわ抜きんでて聳える山を「シャラリ」と仮称した本音はそこにあった。（記：山森）

シャラリ半周トレック

青もうせんを越えて

8月21日（曇りのち晴、夕方雨）

山は昨日の雪で冬の様相となった。昨日までのBC撤収は賢明な判断だったと言ふべきか。今日は先熱日東面、南面の偵察を兼ねてのトレッキングにでかける。夏諾多季、央邁勇にもお目にかかることができよう。

江連絡官と張通訳が同行する。

初め雲が多く、山の眺望も今一だったが、しだいに回復し、ひさしぶりの晴天となった。森林、草原、お花畑。清流。岩壁群、周囲の岩山。それらをいちだんと抜き出した白銀の貢嘎雪山の三つの山々。その一つひとつが、不本意ながら試登の

段階で登山活動を終えた我々の気持ちを和ませてくれる。

4,436mの峠まで往復したが、この谷は今だに大自然がそのままの姿で残り、

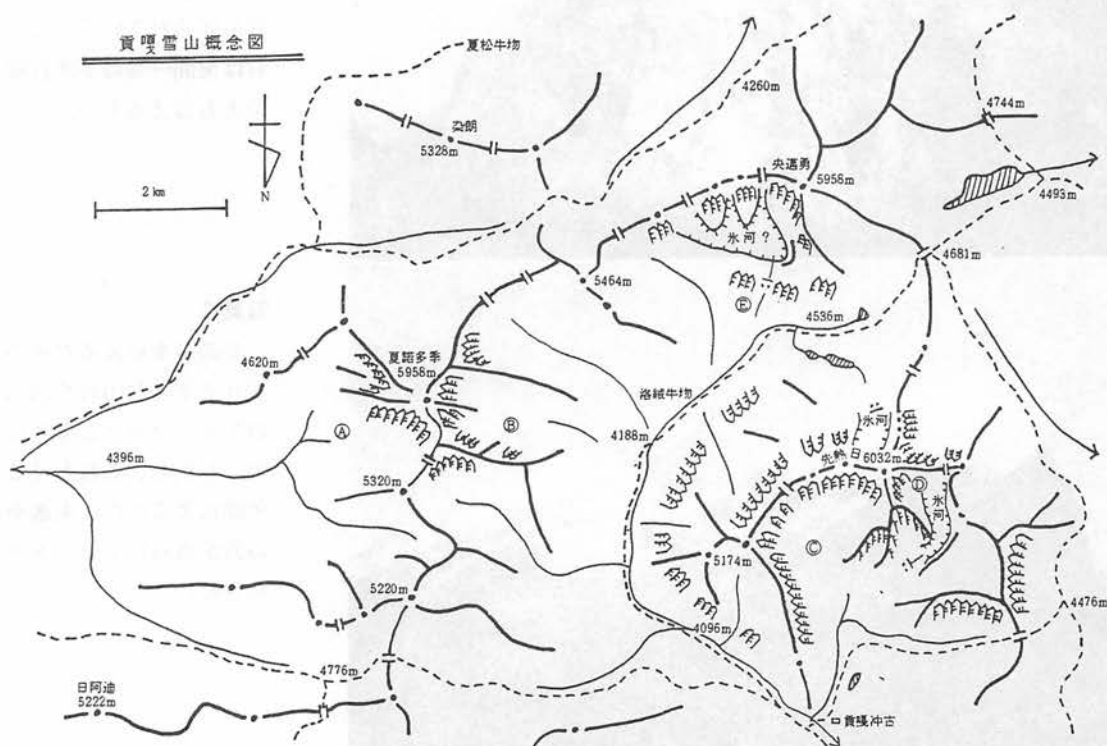
「明治初期の上高地、梓の谷も斯くあらん」

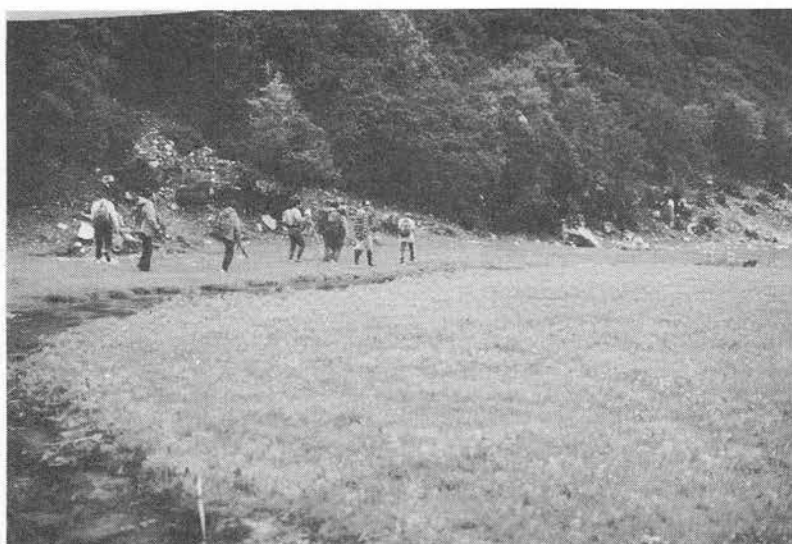
と、思わず日本の百年以上も昔に思いを馳せさせる景勝の地であった。

以下にルートを追って、地図と写真で説明をしたい。④→は写真撮影の場所と方向を示す。

<タイム>出発(10:00)～洛絨牛場(12:15)

～4,536mの峠(14:50～15:20)～洛絨牛場(16:20～)～帰着(18:20)(記:酒井国光)

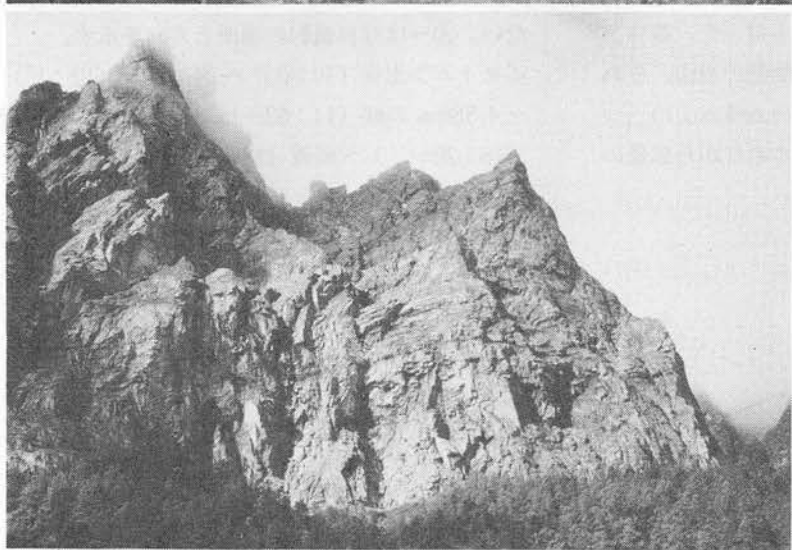




写真A

貢嘎冲古のテント場付近には、黄色の絨毯を敷き詰めたような草原が広がる。その中を清流が流れる。「瞳は梓の青よ」の歌のように、梓川の流れを感じた。

思い思いの格好で出発する。



写真B

先熱日東面の尾根に突き上げるルンゼ付近を見上げる。入山してきた頃、江連絡官はこのルンゼがルートになると言っていたが…。周囲は大きな岩壁に守られている。これらは東面一帯の下部岩壁帯とも言えるものだ。



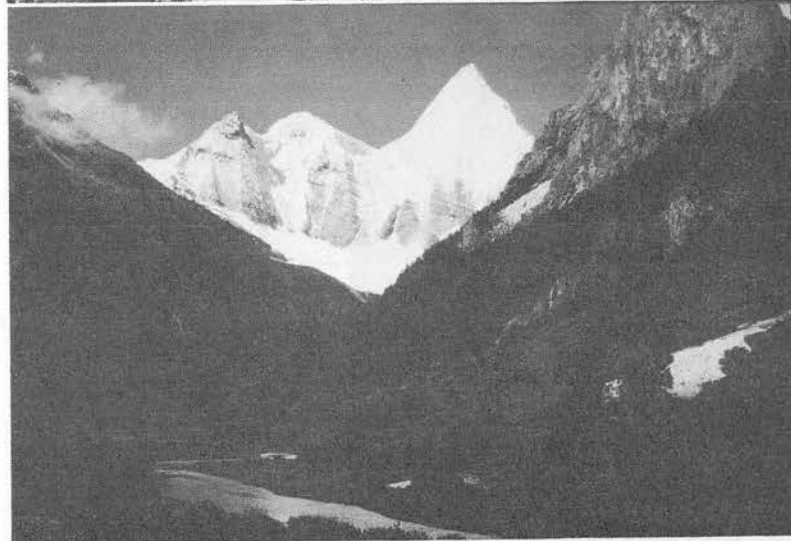
写真C

夏諾多季見える!! そのピラミダルな山容を四川のアルパマヨだと形容した。しかし、これも見る角度によるのだ。央邁勇の方がさらにピラミダルだった。



写真D

先熱日東面 5,174 m 峰直下の岩峰群。この岩場と東壁の関係はどうなっているのだろうか。今後の解明を待つが、こちらの面からの登頂可能なルートはないだろう。



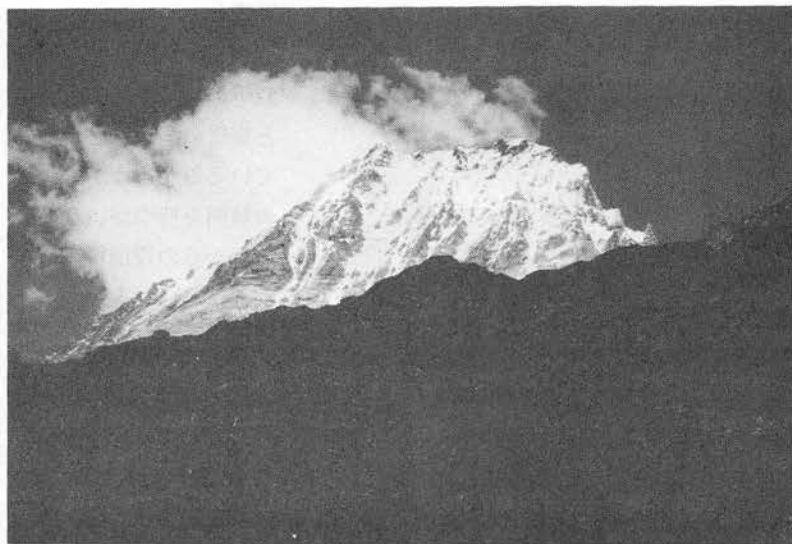
写真E

央邁勇の勇姿。三姉妹が写っているが、実際は五姉妹なのだ。主峰はみごとなピラミッドの雪峰。先熱日西稜 5,000 m 付近から見ると、この右手の北稜に登攀ルートを求めると登頂可能のようだ。



写真F

西より見た夏諾多季。正面の谷を詰めて写真左手（北面）のコルに出れば登頂の可能性もあると考えたが…。



写真G

先熱日東壁。左手の高い所あたりが頂上なのだろうか。この面からの登頂も難しい。



写真H

4,536 m の峠より見た先熱日南面。中央のリッジにより東壁と南壁に分けられているようだ。岩の質などを考えると、この面からの登頂可能なルートがとれるのだろうか。南壁の左端に氷河が入っているが、これについては詳細不明。



写真I

先熱日南稜末端付近のピークを見る。左手へのびる尾根の末端が4,681 m の峠となる。央邁勇アタックのBCは中央の谷にある湖付近となろうか。

チベット人家族との一日

ヤーディン村訪問記

8/22 我々が登山中、大本営滞在の江先生、孟先生の配慮から、馬方の家にバター茶をごちそうになりに行くことになった。奇しくも、BCを下ってからは連日、悔しいけれど好天気恵まれ、秋の空気漂う中、取材人一同は胃ぐすり覚悟でいそいそと出掛けた。

沖古から1時間半程下ったヤーディンの村。例によって石で積み上げられた家だが、この村は門や柵も立派だし、家並も一段とこぎれいで、豊かな人々の暮しぶりを思わせる。

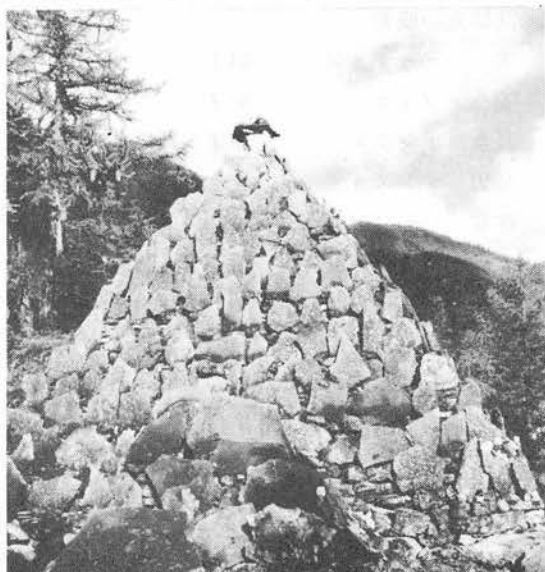
家の周りは緑一面の麦畑が続き、光あふれる青空のもと、村人は畑仕事に汗を出し、遠くで聞こえる牛の鳴き声がまた、のどかな午後をうかがわせている。

馬方の歓迎を受け家の中に入る。外の暑さとは裏はらに、暗い室内はスーと涼しい。1階は干し草が敷きつめられ、馬の部屋となっており、急な階段を登ると10畳位の土間があり、中央に炉が切ってある。炉の上は自然な排気溝となっており、外からの光が差し込んで、煙が一筋に吸いこまれ

ていく。焚き火を燃やし、湯を沸す。ススで黒光りしているヤカンがよく調和している。バター茶がどんどん注がれていく。ここのはコクがあってなかなか美味しい。土間には、皮をなめした座布団が敷かれ、壁際にはきれいな模様の入った大きな木彫りの食器棚が3つ並べられている。いずれも馬方の自作というから恐れている。驚ろいたことに、村人が知らせを聞いてか、多勢集まってきていて、部屋の中に人垣ができ、ざわめいている。

やがて通訳の張さんを介してあれこれ質問の花が咲く。このあたりはチベット語だが、馬方の娘婿は地方の学校を出たということで漢語が通じる。周りの村人も何やら囁きあい、微笑しながら、このやりとりを聞いている。次々とバター茶が注がれ、お腹はいい加減チャブチャブだ。

カメラを向けるとワァーといって逃げってしまう娘さんもいれば、どっしりファインダーに収まる年配ギャルもいる。皆な飾り気のない笑顔がとても素適だ。やはり笑顔はどこの国も共通だ。馬方



▲ヤーディン村まで巨大なマニ塚が続く



▲ツェカの祖母ハージン（76才）

▼ヤーディン村の美女達（右から2人目がボンボン）



の母は76才というが、しゃんとしていたもので、リクエストに応じてマニ車を回しながら経文を唱えてくれ、カメラを向けるといささか緊張しながらも、しゃきとして、いつまでもポーズを決めてくれた。大家族で幸せそうな馬方の照れ笑いがまた、ほのぼのとして良い。土間の隣りは大工の仕事場になっていて、日本でも見かける様な工具が並べられている。またさらに3階は広く屋上になっていて、ヤーディンの村が一望できる。陽が輝き、ポカポカ暖かい中、リクエストに答えて娘たちのダンスが始まる。中にはわざわざ新しい衣装に着替えてきた娘もいる。恥ずかしがりながら、なかなか踊りが決まらない様だが、やがて横一列に並び、手をつないでステップを踏み出す。単調なリズムと、同じステップが繰り返される。すかさず並ぶ、カメラマンの放列。遠くにシャラリが白く光っている。空も冴え、緑の麦畑が広がる最高の舞台上、色とりどりの衣装に着飾った娘たちは本当に華麗だ。平和な時間が過ぎる。やがて踊りの輪の中へ隊員達も混じることになる。恥じらいながらも手をとってくれた娘たちと一緒にステップを踏む。心楽しい一時。

踊りのお礼に写真をプレゼント。瞬時に映し出されるボラロイド写真に驚ろき、黒山の人だかりとなる。

今回の訪問で、テントサイトでは見ることでできない、いきいきとした生活の姿を垣間見ること

ができ、自然の中に暮らす彼らの力強さを改めて、感じる事ができた。1人の馬方として見れば、ただそれだけのことだけれど、この大世帯の主人として取りまく彼の存在は大きく、この厳しい自然環境の中で立派に生活している彼らの強い生活力と知恵には、またまた脱帽してしまう。わずかな出会いだったけれど、いつまでもその豊かな微笑を絶やさずに、元気でいてほしいと願わずにいられない。

（記：貝塚珠樹）

◎訪問先の概要

夫	ドゥディン	44才
妻	ヅェカ	38才
長女	ボンボン	18才 既婚
長男	デズウ	15才
次女	ハーズン	10才
妻の祖母	ハージン	76才
牛20頭、ブタ12頭、羊7頭、山羊15頭		

◎ヤーディン村の概要

- 四川省甘孜藏族自治州稻城县貢岭区日瓦郷並丁戸数28戸、人口150人、学校はない。
- 平均的な婚期は、女17才、男20才で相手は大体親類が決める。
- 葬儀は水葬。日常使用品、フトンと一緒に縛って流す。
- 2人以上息子がいたら貢岭区のラマ寺に出す。

桃源境をあとに下山

高原から一路成都へ

8月23日（晴） 冲古一日瓦一稻城

7時起床、先熱日が朝日に美しい。9時半出発、川に沿い何回か橋を渡り、下る。岩壁を除き、日本的な風景が続く。途中より現地の青年が先頭に立ち、同行する。約2時間後、急な上りとなり、3,600 m余を高巻くが、1時間でまた川のほとりに下り立つ。その後、川岸の広い道を行くようになるが、蝉が鳴き、蝶が飛交い、すっかり真夏の世界となる。やがて大きな集落が見えてくるが、丁度その向うに出迎えのジープが来た所であった。この集落はマニ石が多かったが、冲古のラマ寺の入口にあたるからだろうか。14時15分、水洛河支流に架る橋を渡り、ジープの所に着く。久しぶりの再会に運転手達と握手をする。また、稻城体育協会主任の出迎をうける。人々が集まってくる。15時25分、馬の到着を待って出発。流れに沿ってさか上る。源流地帯は両側がなだらかな山で、テントや小屋掛けが目立つ。17時、4,670 mの峠にて休止。その後、緑豊かな谷を下る。路肩のヤナギラン？が美しい。17時50分、稻城着。カラフルだが、工事中の建物が多い。招待所横の建物は床一面松茸であふれていた。その松茸料理と久しぶりのビールとに舌鼓を撃つ。19時20分、3キロ程離れた温泉へ。ここには6つの部屋があったが、4つはとても熱く、温い2つは石鹸で汚れていた。20日余の汚れをおとす。

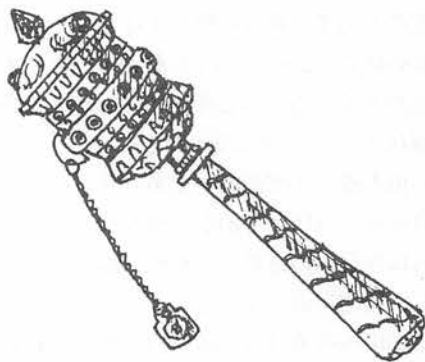
夜、山森、酒井は招待をうけ、県長宅へ。松館、大久保らは、四川省農業科学研究所所員で、日本に留学したことがある壬波氏と懇談。彼によると、稻城は四川省の中で一番貧しく、また地震の多い地域とのことであった。この松茸は成都を経て日本へ輸出しているとのことでもあった。

8月24日（晴） 稻城一理塘一雅江

8時起床、朝よりラジオ放送が街に流れている。9時20分、県長、副県長、体育協会主任各氏らの見送りをうけて出発する。街中から郊外へと向う

家畜の大群に立往生するが、稻城河のゆったりとした流れと相俟って、如何にものどかだった。9時50分、検門所でストップ、その後、稻城河に沿ってさか上る。しだいに巨岩が増え、カルストを思わせる地形になってくる。峠に近づくにつれ、大小の池が散在するようになってくるが、海子山という名を納得する。そんな中を2台のジープは風のように走っていく。擦違う車は殆どない。4,600 mを越える高地を走った後、明るい高原めざして下っていく。理塘高原だ。12時55分、2号車理塘着（1号車はずっと遅れる）。この街は高原にあるためか、何処か閑散として、もう秋の気配がした。しかし、男達は伊達でなかなか御洒落だった。街の奪い合いの昔を思う。

昼食後、理塘の街からまた山道を走る。見下すと、理塘の街が盆の底にあるのが良くわかる。道の両側は高地の似たような風景が続く。昼のビールに私は寝てしまったのだが、暫く走った後、五体投地礼の集団と出会ったとのこと。隊長によると、修学旅行だろうとのことだったが、見る事ができず、心残りであった。種々の本によると、五体投地礼は1日に2、3キロしか進まないとのことだが、祈りの重さというものを考えさせられた。遠々と走って、17時50分、雅江着（1号車は30分程遅れる）。雅砻江のほとりの活気ある街だ



が、治安はあまり良くないらしい。招待所も窓ガラスが壊れたままであったりして、街も何処か殺伐とした感があった。

8月25日（曇） 雅江—康定—泸定

8時起床だが、5時頃より車がうるさい。9時出発、小さな川に沿ってさか上る。今日の道程は200キロ程でゆったりとしている。10時半、高土山通過、緑の山々が続く。11時5分、新都橋着。ここより修理に出してあったジープが加わり、ジープ3台となる。この街は監獄のある街だが、地図に名が出ておらず、街自体比較的新しいのかもしれない。ここより折多山をめざすが、道が大分良くなる。康定が近づくにつれ、家の造りが平屋根から三角屋根に変化してくる。康定はチベットの入口といわれているが、チベット様式から漢様式への変化とっていいのかもしれない。13時、康定着。途中貢嘎山が見えないのが残念であった。康定は活気のある大きな街、昼食後、1時間程街を散策する。雅拉河の流れが砕け散るようで、その流れ沿いに店々が軒を連ね、扱かっている品物も多かった。

15時40分、雨の降り出した康定を後にする。16時半、大河、大渡河と合するが、すごい水流だ。17時、橋を渡り、泸定着。観光地とあって、招待所も大きく、外国人登録票を久しぶりに記入する。ひと休みした後、泸定橋を見学する。ここは長征緑の地である。ここより南にある安顺場は、大平天国の名将石達開が大渡河に行方をはばまれて、清朝軍に全滅した所である。1934年、蒋介石は安顺場にて紅軍を第二の石達開にしてみせると豪語していた。これに対し、紅軍は泸定へと猛スピードで進み、この吊橋をすさまじい突撃によって奪取したのである。鉄鎖の橋の上に立って、大渡河の流れを見ていると、そうした歴史のひとつが切々と浮かんでくる。何と江西から陝西までの長征の道程は12,000キロに及んだという。

夜の街も遅くまで賑やかであった。

8月26日（晴） 泸定—雅安—成都

今日は強行軍のため、6時45分起床。7時45分出発、大渡河に沿って少し南下し、二郎山へと向う。二郎山への道は日光のいろは坂を思わせる。上詰めていくと、ガスの中に見え隠れする大渡河



が何とも幻想的だ。9時12分、二郎山頂通過、ガスが深い。二郎山は3,437mの山だが、奥深く、特にガスに見え隠れする風景は深山幽谷の感がする。天下の名勝、そして難所といえるだろう。10時半、山を下り、天全河沿いの集落を過ぎると、陽が刺してくる。同50分、トラックの故障のため、暫く足止に遭う。待つ間、飛交う雲南アゲハが美しかった。この後、田園地帯を走り、13時半、雅安の街に入る。昼食後、往路と同じ道を成都へ。最後、成都郊外の裁判所前で休止するが、告示によると意外と犯罪と死刑が多かった。19時、錦江賓館着。キャラバンは終了した。

8月27日～30日

27日は登山協会事務所にて隊荷整理、デポ品の梱包を行う。夜、名物火鍋を食するが、辛くて何ともいえなかった。28日は竹細具・蜀繡の工場と武侯祠を見学する。武侯祠は広々とし、特に竹林が美しかった。夜、岷山飯店にて、登山協会の先生方を招き、答礼会を開く。私は早く寝てしまったが、この夜は深夜まで盛り上がる。29日早朝、北京へ。午後、希望者は故宮へ。夜は中国登山協会の先生方と夕食会が開かれる。30日、友誼商店にて買い物をした後、14時30分、JL 786便にて北京をあとにする。楽しい旅であった。

（記：谷田川 武）

隊員の横顔

(隊長を除く寸評は
山森が担当した)

- | | |
|-------|---------|
| ① 住所 | ② 電話番号 |
| ③ 勤務先 | ④ 所属団体 |
| ⑤ 隊務 | ⑥ 高峰登山歴 |

隊長 山森欣一 Yamamori Kin-ichi

1944年2月 生 B型 別名パサン

① 〒134 東京都江戸川区

②

③ 日本ヒマラヤ協会 03-367-8521

④ 山嶺登高会

⑤ 総括、渉外、輸送、梱包

⑥ 1975 インド、ヌン (7,135m) 副隊長

1978 パキスタン、ハチンダール・キッシュ
(7,163m) 副隊長

1980 ネパール、カンチェンジュンガ偵察隊長

1981 ネパール、カンチェンジュンガ(8,586m)
隊長

1982 インド、クン (7,077m) 隊長



1984 中国、ナムナニ (7,694m) 偵察隊長

1985 中国、ギャラ・ペリ (7,294m) 偵察隊長

1986 中国、ゲニ (6,204m) 偵察隊長

1987 中国、ラブチェ・カン (7,367m) 隊長

もじゃもじゃの髭。ヒマラヤを徘徊するヒッピーのような頭髪。黒い顔に眼鏡と額が光る。ヒマラヤの雪男も斯くありなと思わせる独特な風貌。しかし、よくよく見ると眼鏡の奥の目は意外とやさしい。

いやしくもヒマラヤ登山を志す人なら知らない者はないはずの、日本第一の(いや、世界第一のか)中国登山通。

博学多識。弁舌流暢。鄧小平の孫(仮称)通訳張儉とは、毛沢東思想を論じ合い、三国志を語り、さらには、チベット族の世界、ラマ教の真髄をも滔滔と語り、『教えてあげました』。(酒井国光)



◀ ベースキャンプにて

隊長代行 酒井国光 Sakai Kunimitsu

1939年4月 生 B型 別名ミンマ

- ① 〒300-23 茨城県筑波郡
- ② 02975-8-7337
- ③ 聖徳学園短期大学附属小学校 0473-92-3111
- ④ 昭和山岳会
- ⑤ 総括、登攀
- ⑥ 1976 アメリカ、マッキンリー (6,192m) 隊長
- 1979 ヨーロッパ、アルプス (数座) 隊長
- 1980 ヨーロッパ、アルプス (数座) 隊長
- 1983 パキスタン、ビルチャール・ドバニ
(6,134m) 登攀隊長
- 1984 中国、アムネマチンⅡ (6,268m) 副隊長、登頂
- 1986 アメリカ、ドラム (3,662m) 隊長、登頂
- 1988 パキスタン、ブロード・ピーク (8,047
m) 隊長、登頂



山一筋に生きて30年、とりわけ「黒部」を愛し、玄人筋に高く評価されている「黒部別山」の発刊に深く関わり、次いで「黒部雪山」を自費出版するなど、黒部に傾注している。かつての日山協指導委員長。

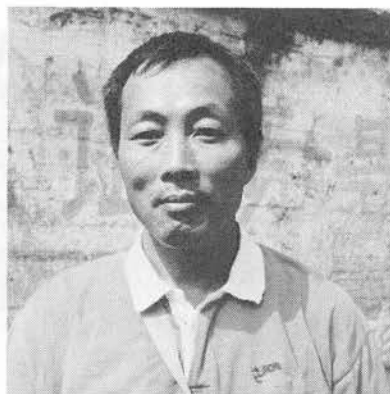
ヒマラヤでは、只今日本の八千メートル峰最高年令登頂記録保持者。偶然そうになったのではなく10年前に会の節目の記念山行を勤務の都合で降りざるを得なかった悔しさを10年後の記念山行で実現したもの。

仕事は小学校教諭。算数が専門。無類の酒好きであるが酔うのは早い。特技は酔って半分寝ていても「そうだ!」と相づちを打ち最後まで酒に付き合うこと。愛する夫人と今春大学生となる子息の3人家族。

隊員 西嶋鍊太郎 Nishijima Rentaro

1942年8月 生 A型 別名ミンマ

- ① 〒921 石川県金沢市
- ②
- ③ 石川県立金沢西高等学校
- ④ でんでん虫倶楽部
- ⑤ 食糧
- ⑥ 1978 パキスタン、イストル・オ・ナール
(7,403m) 副隊長、登頂
- 1980 ヨーロッパ、アルプス
- 1982 アメリカ シェラブランカ



1988 ケニア、キリマンジェロ (5,895m) チーフ

憎めない顔立ち。「上方」を自認し、柔らかい話し言葉の中に鋭い主張を隠す。今回の登山ではこの方法が「オブラート」として流行した。石川県の労山会長を勤める程の山屋であるが、最近では世界を股にかけて放浪し合間に小登山を楽しんでいる。しかし、5月の合宿ではルート最大の難関を慎重なテクニックで突破しかつての片隣をのぞかせた。本登山でも終始トップを引き充分楽しんだ。酒好きであるが流石に上方、なめるように飲む。大学生の子息と高校生のお嬢さん、夫人、両親の6人家族。

隊員 松館正義 Matsudate Masayoshi
1944年4月 生 A型 別名ペンバ

①〒031 青森県八戸市

②

③ コープケミカル㈱

④ 南部山岳会

⑤ 医業

⑥ 1971 インド、ディオ・ティバ(6,001m)登頂

1976 アフガニスタン、コーイ・ムンジャン
(5,440m)登頂



デルマさん。体型と関係なく山では強い。遠征期間中パンツを穿かないで通した。東に腹をすかせている中年がいれば行って包丁さばきも鮮やかに寿司を握り、西に靴に穴があいて泣いている少女がいれば手慣れた針さばきで縫ってやり、連日の雨で大テントが雨漏りがすればシートを縫い合わせてフライを作り、雨が上り太陽が顔を出すと友人のために捕蝶網を持って草原を駆ける。エーデルワイスがあると摘み、ブルーボピーが見つかるのと摘む。自分のためでなく、帰国後立派な額に入れて隊員へプレゼントとするために。現地の人がもう捨てなさいと言う靴を履き、あまりに動きすぎるために膨れた顔にも無頓着で。それでも夜中には、白い天使から贈られた幾つかの薬を飲み、恐る恐る押痕を確認し少しぐらい戻らなくとも安心し、今日一日が無事終ったことに感謝して眠りにつく。こんな彼は皆から「松チャン」と呼ばれ愛されていた。ただ一つ出来ないことがあるのが不思議ですらある。夫人との2人住い。

隊員 大久保博 Ohkubo Hiroshi
1949年4月 生 AB型 別名ラクバ

①〒112 東京都文京区

②

③ 足立区立北鹿浜小学校

④ 江北高校山岳OB会

⑤ 気象、通信

⑥ 1974 ヨーロッパ、アルプス

1983 インド、ヌン(7,135m)



小さな体にハンティング帽を被り、カッパ上下を着て、大きなザックカバー付きを背負い「完全防水ノ蒸れありノ」と呼ぶと元気印の今遠征のアプローチの王者の出来上りである。今遠征で全員が熱中した「サイコロ」ゲームを持ち込み、積極的に普及活動をした。そのためもう一つのゲーム「ウノ」は今一盛り上がり欠けた。ロマンチストである。焚火を囲む時には、何時も空を仰ぎ星座を追い我々にレクチャーをする。そのためか西暦×年×月1日は何曜日がわかる資料を持参しており、このために全隊員と中国側にシェルパ族風の名前をつけることができ盛り上がった。6年前のヌンの登山の夢が今回も果せなかったのは残念であるが、皆に内緒で得意の「詩」を作り一人悦に入っているのだろう。夫人と2人の小学生の子供(男・女)と4人家族。

隊員 干場晃 Hoshiba Akira

1951年6月 生 型 別名ブルバ

①〒924 石川県松任市

②

③ ㈱ ソディック

④ 松任風露山岳会

⑤ 食糧

⑥ なし



高峰登山は今回が初めてとあって何事にも慎重に注意深く当たっていた。成都から南下すると行く先々で「松茸はまだですか？」を連発し、木里に到着した日ボールの中の水に浮いている大量の松茸を見て、隊長の言葉が嘘ではなかったことを実感した。そのために山中で買った松茸の「一級松茸運搬士」となった。

慣れない食糧担当として、BCでは相当気を使ったようだが、油の乗り切った30代後半の処生術をいかに発揮最前線で活躍した。帰路は日本への土産買いに精力を使ったとの噂もとんだ。

現在は愛妻と2人の小さな坊やの4人家族だが、出発前アルパインスタイルで3人目に成功した。

隊員 菅沼弘子 Suganuma Hiroko

1952年7月 生 O型 別名ダワ(トン)

①〒228 神奈川県相模原市

②

③ 養豚業自営

④ 相模勤労者山岳会

⑤ 装備

⑥ 1986 中国、ムスターグ・アタ(7,546m)

副隊長、登頂



「ねえ飲もうよ」「もう寝るの」……酒宴や焚火の時に早々と切り上げようとする男達に彼女から決って声が掛かる。荷物は何時もコンパクトで無駄が無い。真剣に山と取り組んできた片鱗が行動や発言の随所に見られる。それが普通の常識と少し違うようにとられ勝ち。現実とは裏腹に優しく、淋しがりやで夢見るタイプ。松ちゃんにつけられた「オッカア」がニックネームとなった。よく食べよく飲み(水分)よく出すパターンは高所生理の原則に合っている筈だが、少し顔が円くなっていたように思えた。西さんの誕生日に日本からケーキを持参し一同をビックリさせた。今回の隊では異色の存在。世界で誰よりも大好きな「オットー」と2人暮らし。

隊員 谷田川武 Yatagawa Takeshi

1953年9月 生 A型 別名ブルバ

①〒178 東京都練馬区

②

③ 東京都立久留米西高等学校

④ 白嶺山の会

⑤ 記録、庶務

⑥ 1981 メキシコ、ボボカテベトル (5,452m)

1988 パキスタン、ファラク・サル (5,918m)

隊長



高くハスキーな声が焚火の炎の彼方へ消える。典型的な下町で「シ」と「ヒ」が入れ替っていても一向に気にしないで滔々と歌声が放たれる。宴席はロマンチストの谷田川の本領発揮で盛り上がる。

いつも年期の入った愛用のカメラをブラ下げている。今回の隊では一番の物持ちではないかと噂された。山好きではあるが、どちらかと云えば山麓の逍遥派が板についているような雰囲気身を付けており、とても独身には見えない。

帰国後は早々に単独行に別れを告げ、ザイルシャフトを組むように思われたが、現在のところ独身。

隊員 貝塚珠樹 Kaizuka Tamaki

1961年3月 生 O型 別名ミンマ(タマ)

①〒162 東京都新宿区

②

③ 東京女子医科大学日本心臓血圧研究所

④ 同人パイネニアソブ

⑤ 医療、食糧

⑥ 1985 パキスタン、ナンガ・パルバット

(8,125m)

1987 インド、ヌン (7,135m) 登頂



最年少で最後に隊員となった。隊唯一の20代。ベテランの白衣の天使の参加で平均年齢40才を越える隊は大いに盛り上がった。何といっても配給の酒を「余す」ところが貴重な存在であった。

現地の住民達に溶け込む能力に勝れ、所構わずメモとカメラを携えて接近する(高じて馬にまで接近しすぎた)。カメラも2台持参し花、動物、山とシャッターを切りまくっていたが結果や如何?

北海道から上京して2年。山もドンドン登りたいし、できることなら結婚して子供も産みたいと願う女盛り。山にしても、結婚にしても今のヘビースモークは何かしなければならいでしょう! 独身。

連絡官 江硯都 Jiang Yan Du

1954年7月14日生

成都市建設北路2号

美しい奥様と7才になる娘さんの3人家族。いつもは登山協会の外教科長として登山隊の接待や事務関係の仕事に従事している。

初めての連絡官として登山隊が初めて入る地域で困難も多かったのに誠心誠意尽くしてくれた。妹さんが日本語科を出ていて少し日本語が話せる。



副連絡官 孟天立 Meng Tian Li

1947年4月13日生

成都市体育場路1号

同じ年の奥様と22才、17才のお嬢さん、15才の子息の5人家族。1986年の雪宝頂登山にも中国側スタッフとして参加した。酒はあまり飲めない。

H A J からシャラリの申請が出たため偵察に向いてくれた。いつもキャラバンの先頭に立って現場の指揮に当たっている姿が印象深い。



通訳 張儉 Zhang Jian

1961年12月28日生

西南財経大学人口研究所

四川大学日本語科を優秀な成績で卒業と自称する。掛値なしに日本語は堪能である。頭も良く明るい。日本のジョークにも通じている。日本の本の訳書もある。中国で登山隊の通訳としてこのような人物に当るのは奇跡であると云える。惜しむらくは才が長け過ぎていることである。自戒を!



ガイド 薊拉志 (29才)

涼山イ族自治州木里藏族自治州体育委員会

キャラバンの馬の手配と道案内に同行した。たくましい体と聡明な頭脳。野山を縦横無尽に駆けめぐるイ族の好青年。

ベースキャンプでは、隊員に持参した鉄砲の試射をさせてくれた。彼が去ったBCは火の消えたような淋しさであった。



小さな歴史の証言^{できごと}

—山森隊長にことよせて—

酒 井 国 光

今回の我隊の公認ギャンブルはサイコロ。とにかく毎日毎日ご開帳し、一挙手ごとに笑い転げた。陰鬱な連日の雨にもめげず、テントの中は明るさがいっぱいだった。勝は断突に隊長。

「ジャラリ、シャノドジ、ヤンモールン！」と叫び彼の手を離れたダイスは…。

一同、小さなコンロの缶を覗き込んで哑然／＼みごと、「ピンピンピンのピン」。奇跡と言おうか、偶然と言おうか、が6つ／

8月17日、C1での出来事でした。

日本にあってはお馬さんの掛けにも強く、今年（1989年）のオークスではみごと単勝馬券を射止めた。おかげで我々はさっそく彼の家へ押しかけ、特大の桶で鰯をご馳走になってしまった。（もっとも私は、前夜の黒部の衆の宿泊集会からの飲み続けで、鰯を食べたことすら意識にないほど、酔っ払っていたのだが…。）

5月21日、スノーバー作りの日の出来事でした。

＊

「雲南や四川へ行くとね。こんな大きな籠（直径60cmもの）いっぱいの松茸が1,000円も出せば買えるんだ。」

「後頭部がキンキン痛くなるほど松茸が食えるから。」

との話を半ば（というよりほんの少し）信じて中国へ渡った。結果は、事実は小説より奇なり、

「もう松茸なんか見たくもない」と言う程たくさん食べることができたのです。松茸ご飯、松茸のお吸物、油炒め、1本丸ごとの焚火焼き…。もう思い出すのもいやです。その上、帰国時には、日本へのお土産にと、稲城県の県長さんからもらった3kgもの松茸を北京で思い切りよく捨てて来たのです。

これ、全部本当です。当事者の私は、以後10年、日本に於ては松茸を食べることはしないと思っている程です。（食べられないという意味ではない

のです。念のため。）

とにかく、ナイス隊長、ナイスコーディネーターのおかげで、山には登れなかったが、隊員一同中国の山旅を120%満喫しました。

＊

隊長の今回の目標、

「幻のブルーポピーに会うこと」

「先熟日頂上で旗を振ること」

の2つ。10回もの彼の海外登山歴の中のエアーポケット、意外やこの2つがスポッと抜けていたのだ。

前者については、踏んづけて歩く程のブルーポピーにご対面。ご満悦であった。

後者については、残念にも、5,250mの岩峰の上で旗を振っただけで終わった。若し、後者の目標が達成されていれば、あの有名な髭ともおさらばするはずだったが…。今後の課題として残されてしまった。

でも、今回は、

「俺はナムチャバルワに最初のハーケンを打ち込めたら、その時は髭をそるぞ!!」

と宣言したのです。聞いたのは私一人ではないから事実です。アメリカ大リーグでの話だけでなく日本のプロ野球でも、

『ジャイアンツなんか優勝したら、俺は坊主に



▲件の松茸パーティ（貢嘎冲古のキャンプにて）

なる／』と、広言を吐いたアンチ・ジャイアンツのニュース・キャスターの例もある。近い将来、必ず断髭式（断髪式ではない）が実現するものと期待している。

H A J ナムチャバルワ隊には、小さな歴史の証人として、私もカメラマンで参加したいと思っている現在である。

幾山河を越えて

西 嶋 鍊太郎

8月11日、私はシャラリ峰ベースキャンプで47才となりました。この10年間に7回も外国で誕生日を迎えています。大程、1人のことが多くそれも安宿であったり、砂漠を走るバスの中であったりで、時には自分でさえ気付かずに過ぎてしまったこともありました。

今年はシャラリ峰内院へのルートもひらけC1が建設され、いよいよ頂上をとの思いをもってみながベースキャンプに集結しての誕生日で、隊員のみなさんが祝ってくれました。

連日の雨でなかなか姿を見せなかった頂上も夕方になってきれいにあらわれました。気品のある山でした。

大テントの中では私の名前を書いたケーキやにぎり寿司をはじめとする豪華なメニューがならべられ、とっておきの清酒（チンジュ）が出されました。気恥かしいけれどとてもうれしいことでした。それで私もつい柄にもなく立って中国式の答礼のスピーチをしてしまいました。

「わたくし、上方、金沢に生をうけて47年、こんなにもうれしく心に残る誕生日は初めてです。幾山河を越えたシャラリのベースとて何もお返しするものがありません。そのかわり明日から頂上めざし今以上にがんばります。乾杯／」「乾杯／」「乾杯／」「乾杯／」……

私は清酒を入れた赤いプラスチックのコップを打ち合わせながら、つくづく今回の登山に参加して良かったと思いました。

若い時なら「男のロマン」の一言に酔いしれてとび込んだ遠征も、47回も誕生日を迎えるほどの年になるとずい分ゴチャゴチャした理由付が必要となるものらしく、シャラリ遠征も直感的に参加

しようかなと思ってから決心するまでに少し時間がかかってしまいました。

私の参加の理由は次のようなものです。

私の外国の旅のスタイルは出来る限りあちこち多くのところを見てまわり、その行程の中に登山を組み込むことです。昨年はH A Jの中国果洛山とその後のトルキスタン方面への旅を計画して中止となり、かわりにナイル川をさかのぼってキリマンジャロを登りました。

今年は前の遠征から満10年たったの節目の年、記念にもう一度遠征したいという気持もあり、まだ行ったことのない中国での8,000 m峰と考えましたが、実現はむずかしく、それにかわるものとして低くても未知の地域の未踏の山、先熱日への初登頂には大いに魅力を感じました。

迷ったのは、登山のみに時間がとられ、あちこちの見聞がほとんど出来ないのではないかという点でした。

しかし、人とあわせるのが苦手でいつも気ままな一人旅を選んでいる私にとって今回のように知らない方々と多人数でパーティを組むのは自分の修養という点で有意義だろう。その上、いつも、石川県のそれも勤労者山岳連盟の枠の中で登っていて知らず知らずのうちに「井の中の蛙」になっているかも知れない私にとって、全国の、そして労山以外の方々とともに岳友になれば、私自身にとっても私の会にとっても楽しく刺激的でプラスになるだろうと考え、また同じ石川労山の干場君が参加を決めたこともあって、最終的に参加を決意しました。

参加を決めてからはランニングや岩の練習も、コツコツと前以上に真面目にやり、担当の食計画

作成にはかなりの時間をさき、自分でもなれない包丁を持ってみたりもしました。しかし、渉外的なことは全部、隊長をはじめとする東京の方々にまかせっきりで、仕方がなかったとはいえ申し訳なく、また感謝もしています。

北京空港には何度もパキスタンへの経由地として着陸しているのですが、一度も外に出たことのない私にとって中国は今回が初めてとあって良いでしょう。成都、成都から木里、白楊平、そして帰りの稻城から成都へのジープの道程。ブルーボビーに代表される百花咲き乱れるキャラバンと食い放題の松茸、少数民族、おいしい四川料理、参加をためらった「あちこちの見聞ができないのでは」ということは杞憂にすぎませんでした。

登山そのものについては、何かやり残したことのあるような気持もないわけではありませんが、どうしたところで、今回に関して言えばハーケン

類の不足などで頂上は無理だったと思えるので、5,500 m までトップを切らせてもらったこと、山の美しい姿にふれ、桃源境のごとき風景の中を歩けたことで納得しています。

中国人の3人の係官たちの親身の熱烈歓迎もさわやかな印象として今も残っていて、出発前の天安門事件のことなど嘘のようでした。

幾山河を越えての今夏の遠征。帰国後の今も、ベースキャンプでの誕生パーティの時と同じ参加して良かったとの気持で振り返ることが出来ることに私は幸福を感じています。

それは何よりも、青森から東京に至るまでの大変気持の良い8人の新しい岳友を得られたことのうれしさから来ているように思えます。

出来れば、他の隊員の方々も私に対しても遠征そのものに対しても良い感情をもって下さればと願っています。隊長以下、みなさんどうもありがとうございました。 再見ノ

東夷北狄、中華思想は今も続く

大久保 博

一日中激しく揺れるジープの中から街や村の様子を眺める。中国に来ているというだけで興味は尽きない。とにかく広い。街では人、人、自転車の列。村は一面の田んぼ、畑。レンガ造りの家々。ふと、ある事に気が付いた。家の入口の戸びらや枠の色に黄色が多いのだ。黄色、何故黄色なのだろう。そういえば、映画「ラスト・エンペラー」の中にも、黄色の服は帝だけが着るのだと言って溥儀・溥傑の兄弟が喧嘩する場面があったの思い出す。黄色には特別の意味があるのだろうか。

「木火土金水」—— 中国には古くから陰陽五行説という考えがある。天地万物はすべて陰と陽で成り立つ。天地のはじめ、渾沌としたなかで、明るく軽い気が陽の気をつくり、火となる。暗く重い気は陰の気をつくり、水となる。天上では、火は太陽となり、水は月となり、これが組み合わせられて五つの惑星となる。地上では、火と水が組み合わせられて五行ができる。水は土地を潤おし、

穀物を養い、集まって川となって流れ、海に入って鹹（しお）となる。火は上に燃えあがり、焦げて苦くなる。木は曲ったものもまっすぐなものもあり、その実は酸っぱい。金は形を変えて刀や鍬となり、味は辛い。土は種を実らせ、その味は甘い。「木火土金水」と五つの味「酸苦甘辛鹹（かん）」との調和を政治の要諦とした王がいた。

あの有名な邪馬台国のありかを示した「魏志倭人伝」の記述にもこの陰陽五行説によって書かれていると指摘したのは松本清張である。距離や邑の人口の数に五行に合う数合わせがあるので、邪馬台国は九州にあって、近畿には無いと言うのである。事実は今証明されている。

十干十二支にも陰陽五行が結びつく。甲乙…木、丙丁…火、戊己…土、庚辛…金、壬癸…水。甲…陽、乙…陰、丙…陽、丁…陰、戊…陽、己…陰、庚…陽、辛…陰、壬…陽、癸…陰、そして、陽を兄、陰を弟に見たてて、陽を兄（え）陰を弟（と）

「えと」と読む。つまり、甲（きのえ）乙（きのと）丙（ひのえ）・・・甲子（きのえね）木の兄乙丑（きのえうし）木の弟・・・子…水、丑…土、寅…木、卯…木、辰…土、巳…火、午…火、未…土、申…金、酉…金、戌…土、亥…水、「子午線」とは北極と南極を結ぶ線。北極星を「子の星」という。丑寅の方位（東北）を鬼門といい、五行でいう相生が悪く、その災難を免れるために神仏を祭ることを「丑寅除（うしとらよけ）」といているのも、この考えからである。私たちが日ごろなに気なく使っているものにも古くからの謂があるのだ。中国人が黄色に特別な感情があっても不思議でもなんでもない。黄色は中央、中心にあるべき色なのだ。ここにも中国四千年の歴史があったのだ。

キャラバンに入る前日、木里大寺というラマ教寺院に立ち寄った。ラマ僧から白いハータと赤い布を贈られた。白は歓迎の意味で、赤は安全祈願だと言う。これから行こうとしている所は、もう一つのチベット、ラマ教圏という訳でもないが、私は、痛く感激してしまい、無神論者故の俄ラマ教徒になってしまった。行く先々のマニ塚は、左側を通るように、無事登れますように、オンマニパメドフム、オンマニパメドフムと唱えながら、歩く。文革によって邪教と決めつけられ、破壊された寺院の跡やマニ塚を見ると心に影がさして暗くなったのは、無神論者のくせに一つの文化に対する情愛か。

8月7日の夕方、初めてシャラリを見た。流れ行く雲の間に間に、真白い雪を被り、ヒマラヤ襷をサラサラと付け、気高く澄ましたシャラリ。ちょっぴり手ごわいぞ、うまくルートが伸びれば良いがと・・・。ハーケンを打つ間にリスが開いて割れる岩。カラカラと碎ける岩稜帯。黒い色をした丈夫そうな岩壁帯まで、兎に角がんばるというルート工作隊。無理はすまい、今の装備、力では危険が多い。と登山の中止を告げる酒井登攀隊長。私は、赤い首飾りをそっと握りしめた。テントの外では、岩影の青いケシの花（幻のブルーポピー）が一輪、風に揺れていた。

チョングー、そこは、大きなラマ寺院があった所。タルチョーが何枚もはためいている。何の混

りっ気の無い透明な水が静かに流れ、何の屈託も無いといった大きな目をした牛がのそりのそりと草を食む。夜半眼を覚してテントの外に出た。シャラリの肩上方に金色に輝くみなみのうお座フォーマルハウト。北緯28度50分、南の星座がひと際高く輝く。この時、何故か南十字星が見たくなった。

赤々と燃えるたきびを囲み宴は始まった。菅沼さんの瞳がキラキラと光る。心は日本に帰っているのだろうか。職務とはいえ辺境の地にいなければならない江連絡官、彼の歌声は、さわやかだ。ロマンチストの山森隊長、調べはカノン。紳士的な谷田川さん、芯の太い声が魅力だ。マドンナの貝塚さん、オジサン連中にまじってロックで攻める。苦労人の松館さん、ひたすら羊の皮をむき、みんなの腹を満たす包丁三昧。酒井さん、西嶋さん、干場さん、張さん、孟さん、みんなニコニコいい顔だ。登山は成功だ。頂上に立てなくても来てよかった。

この山行のフィナーレ、北京にて。故宮博物院清朝歴代の皇帝が座った玉座を見た。そこに溥儀を見た。テニスをやった庭はあそこか。自転車を乗り回したのはこの辺かな。悲劇か喜劇かラストエンペラー。あなたの国は、今、街の角々に、カーキ色の鉄カブトを被り、自動小銃をもった人民解放軍という兵士が立っている。



忘れ得ぬ旅との出会いから

谷 田 川 武

キャラバンに寄せて

大陸の空の下 3台のジープは走った
山を越え 谷を渡り 遠々と走った
幾多の街を過ぎ 幾多の人々を埃に卷込み
時には土砂崩れと出会い
時には牛や山羊の群れに立往生し
走りに走った。
そして 木の鬱蒼と茂る里木里に着いた
木里の街は意外と開けた山村だった
しかし 人々は素朴で人懐こかった
にこにこした5人娘のその名も薫風堂という店
があった
玉の欠けたビリヤードに熱中する笑顔があった
道端に出したミシンで布を縫う少年がいた。
そんな街をあとに また山道を走りに走った
古寺はつづら折の道を上詰めた高台にあった
復旧の進む中 ラマ僧の衣が印象的で
少年僧の笑顔が凜凜しかった
そして 4日のジープの旅で辿着いたのは
山中の夏村だった。
テントを張った我々に 村人が幾重もの輪を作
った
御下髪の愛らしい娘がいた
笑うと齒の何本も欠けた中老がいた
じっとみつめるまなざしの鋭い少年がいた
満天の星空に 明日からのキャラバンを想った
静かな夜だった。
サルオガセの林を脱けて 崩れた岩の側を通り
水洑の激流を吊橋で渡った
焼けつくような暑さの中 川辺にテントを張り
裸になって岩陰に寝た
夜はキャンプファイヤーの火を焦がし
松茸をたらふく食べた。
次の日は長い道のりだった
幾つもの村を過ぎ 幾多もの驚きの表情と出会
い

橋を渡り 峠を越えて 歩きに歩いた
疲れ果てて辿着いたのは
天上の樂園を思わせる
明るく 美しい草原だった。
次の日も歩いた
岩陰の青いケシが疲れを癒してくれた
高い峠に達すると 曇天の下
はじめて雪の山が見えた
その山と ヤクの群れとを見ながら
段々と胸が高なってくるのを感じた。
4日目は4,700mの峠を越えた
高原に行く馬たちが豆つぶのようだった
その高原から 森林の中を下り
清流のめったりと流れる別天地に着いた
そこにはラマ寺の廃墟があった
タルチョが風に靡いていた。
聖地に足を踏み入れたような途惑いと
汚れない花畑との出会いの喜びとのうちに
次の日も足を進めた
処女の先熱日は その氷河の下部しか
見せてくれなかった
しかし 花畑の上に張ったB・Cは最高だった。

登山に寄せて

ガラガラのカレ場を下って
草地の上に立つと
小さな池があった。
その周囲には
赤や黄色の小さな花々が
谷を渡る風に揺れていた。
そして
その向うには
さほど大きくない氷河があった。
その氷河を見下すように
アイガーを思わせる
黒い立派な岩が立っていた。

さらに
その黒い岩を抱え込むように
先熱日はそびえていた。
その姿は
人々を寄せつけぬかのように
荒々しく 神々しかった。
しかし
ボロボロの岩稜をとって
ルートは少し宛伸ばされていた。
そして
満月夜の前日に
ザイルは5,500mまでに達した。
しかし
予想以上の長く手強い岩稜に
登頂はあきらめられた。

その時
様々な想いが
それぞれの胸を走った。
しかし
誰もが
言葉少なに黙っていた。
そこには
1ヶ月近くを過ごしてきた
仲間の顔があった。
どうもありがとう。そして、ごくろうさま。
ヤンモールン隊長、酒井…会長、上方の西さん、
シェフこと松ちゃん、ラクバ兄、3児のパパ干
場さん、ダワトンかあさん、ミンマタマ、謝謝
你!! 江さん、孟さん、張さん、謝謝你!!

シャラリ登山の想い出

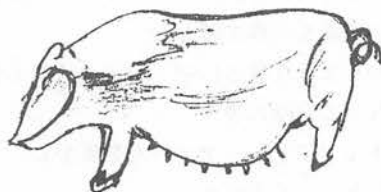
菅 沼 弘 子

四川省の奥地に外国人が入ったこともない桃源境がある。未知なる山旅、そんな言葉に魅かれて参加してみたくなった。初めての顔合せで女性が少ないのにガッカリしたが、中年登山隊、ほとんどが既婚者、かなりの酒飲みが揃っていそう。おまけに山も難しそう…こりゃ楽しい登山になりそうフ、フ、フ、なんて喜んでいた。

最も感激したのは成都を出てからずっと緑の山越え谷越えの連続であり、まるで絵を見ているような光景ばかりだった。どんな山奥にも家があり、畑があり、働いている人々がいた。サーッと通り過ぎてしまうのが惜しくて仕方がなかった。キャラバン中、道ばたや畑でチョロチョロしている豚によく出会った。私は豚に興味があるので足を止めてよく観ていた。品質はともかくとして、チベット人の生活と豚は一体化している。たぶんずっと昔から人と豚はこんな形で共存してきたのだろう、自然に逆らわず、ゆったりと生きている。この豚は幸せだ、などと考えながら歩くのはとても楽しい。

四川省の山は何といっても食べものがおいしく

で大満足だった。特に火鍋にはびっくりした。各テーブルにはトイレットペーパーが置いてあり、鍋にはラー油と香辛料のような物が煮えたぎっている。好みでうなぎ、どじょう、きのこ、野菜などを入れて一煮立ちしたらニンニク油のタレをつけて食べる。最初はビビったが、一口食べたら案の定、口の中は火事だった。あわててビールで鎮め、意を決して2回3回と挑戦するうちに順応できた。土用のうなぎよりはるかに効力がありそう



だ。それにしてもこんな過激な料理は初めてだ。男性たちは翌日も深夜、再挑戦したそうだが私も行きたかった。

今回焚火が3回もできた。そのうち2回は松茸を焼くためであり、あと1回はBC最後の夜しんみりと登山をふりかえった。天をこがすような豪快な焚火は望むべくもないが、パラパラと燃える炎に酒もないのに酔えた。明日はBC撤収かと思うと一晩中でも火を見ていたかった。

反省点としては高度障害に対する自覚が弱かった。ほとんど体調をくずしたことはなかった、と自分では思っていた。しかし写真を見るとどこか

のムッチリおばさんみたいな顔になっているし、何となく身体の重い日が多かった。こんなはずではない、それなりにトレーニングもしてきたではないか、（私はジャラリに行きたいと思ってから出発までに1,000 km走ろうと決めてその目標を達成した、そのことがひそかな自信であったのに…）遅々として進まない足にはがゆい思いをした。ベテランとは自己管理のうまい人だな、と思った。

個人の趣味とはいえ海外登山は家族をはじめ多くの方々の理解や協力をいただいて実現できる。健康で好きな登山ができることに感謝しています。楽しい登山をありがとうございました。

遙か桃源境の旅

貝塚珠樹

過ぎてしまえば短かった夏の1ヶ月。遙か中国の奥地、チベットの少数民族を訪ね、そこに存在するだろうというジャラリを求めて始まった今回のEXP。さまざまな思いの9名が集い、たった3枚の写真をもとに“多分こうなっているだろう。”の発想から準備が進められた。道は通っているか、河は渡れるか、という疑問が残る中、地震による被害が影響しているらしいという情報。そして、本当に山まで辿り着けるだろうか、と心配していた矢先に起きた北京での動乱。山が来るな、と言っているのかなぁ、なんて思いつつ、情報を待ちながらの準備は落ちつかない。

未知なる山を求め、ロマンを追いつけて集まった9名。ほとんどが初対面。不安がないといえバウソになるが、とにかく今は何度か確認された、“1人の力では山に行く能力のない人間の集合体ある。”ということを反芻して、リーダーはリーダーシップを、メンバーはメンバーシップを発揮して、互いに協調していくしかない。いろいろ心配するより、まずは行ってみよう。“まあなんとかなるさ。”というものの、のうてんき、が顔を出す。職場はまたしても首チョン。“まっいっかー。”

それにしても中国は初めてだ。いったいどんな

人間がどんな生活をしているんだろう。ワクワク。でも残念ながら、中国、チベットに関してはさっぱりわからない。三国志の世界、民族の流れのこと。出発前には、知識面の準備まで手がまわらなかった。

ランドクルーザー3台に乗り、雨の成都を出発。道路の両サイドは色とりどりのボンチョをはためかして、自転車の流れが果てしなく続く。カラフルな中、スカート嬢も、裾をバタバタさせながらペダルを踏む。無表情だが皆ペダルを踏む一定のリズムは変わらない。インドの喧噪とは違う。静かだけれど、尽きることのない自転車の波から人々の力強い、生きずきが伝わってくる。アヒルをぶらさげ、丸太を器用にはさんで、涼しい顔をして、ホコリっぽい道をひた走る。どこから来てどこへ行くのやら、流れは途切れることがない。自転車の間をぬう様にして、車は走る。豊かな緑の畑が続く中、なかなか進まない。

これが中国第一歩の第一印象。

南に下るにつれ、しだいに人々の顔立ちや服装が変わってくる。ボーとして寝てはいられない。道はソロバン道路だが、人の手が細目に入っている。土砂崩れの後も、たった1人で石をどかしている。いったいどうなっているのかと、つい、い

らぬ心配をしてしまう。そしてさらに驚く程の山奥にも道路は続く。すごいといえば、四川料理もすごい。一見何もなさそうな店でも、何品もの四川料理が運ばれてきて、それが旨い。まさにグルメの旅。こんなに豪勢でいいのだろうか。そして極めつけ、木里に着いてすぐ、タライ一杯に浮いている松茸と御対面。“やっぱりあった!!。”と皆、長旅の疲れも一気に吹っとんだ。

“うん、幸先良し。”

白楊平から出発したキャラバンは雲が恋しい程暑かった。ことに2日目には、水を求めて犬になり、しまいにはカッパになった。しかし、太陽のお恵みはここまでとは、ひどい話。結局、陽の光を浴びたのは車の移動中と、キャラバン2日間のみ。あとは予定通り、雨季にふさわしく、雨が降るふる、雨の日々。そうはいっても、お花は今が見ごろ。カラフルな花が至る所に咲き乱れて、楽しませてくれる。

山の奥また奥。石造りの集落が忽然と現われて、緑の中、髪を器用に短かく編みこみ、大きなトルコ石をぶらさげた娘がニコニコ出迎えてくれる。のどかな村の生活。民族の争いなんて考えられない、平和な住まい。村人との対話のひと時がキャラバンの楽しみだ。

時間がないのが、ちと残念。

BC入りまで5日間のキャラバン。白楊平から馬方にはお世話になった。文句ひとつ言わず、人の良さそうな微笑をうかべて馬を気づかいながら繰る彼らの生活力には本当に感心してしまう。雨の中焚火をおこし、ナベ一つにおかゆをグツグツ炊いて、茶わん一杯にもってズルズルすすって、旨そうに分け合って食べている。おかずもない。大きな太刀で木を切り、支柱を立て、屋根を張っただけの簡易テントに、馬のクラのクッションを敷いて寝ている。一晩中の雨でひんやり冷たい中、寒くないのだろうか。焚火を囲んで皆でタバコを吸って、笑顔で談笑。ほのぼのと、暖かみが伝わってくる。言葉はわからなくても、笑顔で通じる何かがある。出発の時、遠く放牧している、それぞれの持馬を呼ぶ。“アホーイ、あはい。”可愛いことに、馬は駆け足でこちらに戻ってくる。何て素晴らしい光景だろう。馬方と、馬の心が

▼ベースキャンプにて（右はガイドのソさん）



ピッタリ通じ合っている。

質素で素朴な彼らの力強い姿には教わるころがいっぱいだ。

そしてシャラリー一周を取りまく数多くのマニ塚とタルチョー。こんな所まで信仰の場として足を運ぶラマ教徒たちの信仰の深さには本当に感動する。今、我々日本人が忘れかけている、本当は最も大切な魂を彼らは昔も今も、そしてこれから、守り続けていくのだろう。外国人に解放されて、物質的な欲には決してとらわれないでほしい、と切に願いたい。

今思うと、四川料理に、松茸、ラム肉、ウサギ肉、といったグルメあり、お花畑あり、カンペーあり、ちんちろりんあり、バラエティーに富んだEXPだった。そして何より、頂上へは立てなかったものの、このシャラリーを取りまく、3山の周辺に入り、その素晴らしさを実際に見て、触れて、体中で感じる事ができ、あの乏しい情報の中で当初は、山に辿り着くのすら難しいかも、という心配からみれば、この短期間の中で、それなりの十分な成果があったと思う。

“雨にけぶったシャラリーもまた良し。”

何よりも全員が元気に旨い酒を飲むことができたことは本当に嬉しいことだ。

よく食べ、よく遊んだ。

まさに残された桃源境の旅だった。

未知に魅せられて

干 場 晃

名前もはっきりしない、高さもはっきりわからない、という山が中国にあると聞いたのは、去年の12月の松任風露山岳会（地元で入会している会名）の忘年会の時であった。その時までは海外の山など登りに行くことなど考えもしていなかった私であるがその話を西嶋さんから聞いてから、せめてその山の姿でも見れたらと思った。

床に入ってから山の姿を想像したり、こんな山が今ごろ世界にあるのだろうか？と考えたり、とにかく行ってみたいと思ったのである。

2月の中ごろまたその話が出て、決断の日が生まれてきました。妻子のこと、仕事のこと、いろいろ考えて何んとかなるだろうと思って、先熱日に申し込む。

東京での打ち合せ、八ヶ岳、五竜での合宿、富士山登山などを重ね、中国への出発も近づくともわくわくしてくるのである。

しかし、いざ中国に出発する時は、中国とは何のことかわからない子供に、中国に行ってくるからねと言って金沢駅で別れた時が一番さみしい気持ちでした。何んとしても又ここに帰るぞと、西嶋さんからのビールを飲みながら新たに決意する。そしてひとねむり。

初めての中国、飛行機に乗っていてもその大きさはわからない。北京空港で中国登山協会の歓迎を受け、その後昼食を取る。食事は何とか食べれたがご飯がバラバラなのは印象的であった。

成都空港からバスでホテルまで真暗な道路をスピードを出して走る。時々自転車や耕運機を超越す。成都の街に近づくと思像した中国が少し見えた。家は白熱灯、通りには自転車と人が多い。まさに中国へ来たと感じた。

車で4日、足で5日でベースキャンプ。途中一番気がかりだったのは高山病であった。初めての高山登山でどんな症状が出るのかいつ出るのか不安があった。特にガロからの登り 3,900 m で一休み

してから 4,200 m の峠に向う時は酒井さん、西嶋さんのアドバイスの通りゆっくり、ゆっくり登り 4,200 m の峠に立った時は少し頭が痛い程度で済んだのが嬉れしかった。

そしてシャノドジの頂きが天に突き上げている姿が雄大に思えた。これが外国の山だと思った。

別世界のようなチョングー、松茸のまるかじり、素朴な人間、お花畑、火鍋、ビール、キャラバンで見た風景、崩壊したシャラ西稜。思いだせばきりがないう36日間今から思えば、あっという間のことのように思えます。

いろいろ御指導いただいた山森隊長、酒井隊長代行、又私の初めての高山登山に対していつでも心配してくれた皆様には心より厚く御礼申し上げます。そしてこの原稿が一番遅れた私でまた迷惑をお掛けしたことを深くお詫び申し上げます。

ケサル大王

チベットには「ケサル大王物語」という英雄叙事詩がある。その壮大な物語は、ときには草原に放たれた羊の群れのなかで、ときには満天に輝く星の下で、吟遊詩人の美しい調べにのって伝承されてきた。

それでは「ケサル」のモデルは誰か？三国志の「関羽」モンゴルの「ジンギスカン」仏教を伝来したインド人「パドマサンバヴァ」はたまた、シーザー「カエサル」と諸説が渦巻く。

それでは「リン国」とはどこか。甘肅、四川、青海の三省の境で黄河、金沙江、瀾滄江がめぐる地帯或いは、南の四川とチベットの金沙江にそった境界域あたりにあったともいう。

「リン国」は木里から稻城～郷城にあったと推理するのはあまりにも荒唐無稽であろうか。

ケサル大王の一読をノ

（記：山森）

岩壁に咲く花

山 森 欣 一

5年越しの夢であった。一人の土司が支配する山奥の里「木里」。かつては恵まれた金鉱がありながら、必要な時に必要な量だけを掘り出し、優雅に生を謳歌していた里「木里」。

3年前に雲南と四川の旅が実現した。南の麗江北の理塘には近づけたものの、希望した東の西昌や徳昌、西の稻城、郷城には入れなかった。もっとも成昆鉄道で徳昌や西昌を通過することはできたが宿泊はおろか滞在することも認められない。

その成昆鉄道の車窓から身をのり出して、滔々と流れる長江や大渡河や、赤く露出した肌を見せつつ緩やかに続く丘陵をみながら、いつの日かあの西にある木里から泸沽湖を訪れることを夢見たのであった。

西のチャンタン高原からカイラスやプラン

東のペーからグレートベントの喉であるギャラ北の馬尔康・ソンパン高原から羽根のバイマ藏族中央のシガツェからティングリ

東のカンティからカムの高原リタンとバタン
広大な大地に散在するチベットの民達を知ることができた私にとって「木里」のチベット族は久恋の民でもあった。

資料のほとんど無いこの地について奇跡とも思える漢語による「木里藏族自治県」が出版されており何故か日本の書店に並んでいた。これがおおいに役立った。

開いた初めのページには緩やかな斜面にびっしりと並ぶ家が飛び込んで来た。そして驚くほど多い針葉樹の林。東チベットのギャラ・ペリの偵察の折に回った東久の村を思い出した。そして付図には60指に余る山々が大きな3つの河をとりまくようにびっしりと書き込まれていた。

人々もさることながら、この深い谷合いにどのようなにして村々が造られ、どのような生活が営まれているのだろうか。「木里大寺」はどのように

存在しているのだろうか。

ポツポツと資料請求が来る。しかし、安閑とはしてられない。これはと思う会員に積極的に資料を送った。こうして今回の8人のメンバーが集結し終えたのは2月末出発の半年前であった。更に4月に貝塚が加わり総勢9人となったのである。

私は例によって、この登山にテレビの同行取材を進めていた。協会の苦しい台所を何とかしなければならぬのが事務局長としての努めである。ケサルも狙上に上った。私と子供との夏休み体験も然り。はたまた、隊員の何人かを対象とした案も浮上した。このため同行取材が決定した場合の対策も講じなければならなかった。

第一回の合宿を終えた翌日には、青天の霹靂のごとくH A Jの否、世界のヒマラヤニスト山田昇ら3人のマッキンリーでの遭難が舞い込んだ。このため私は連日対策本部へ詰める形となった。隊として初めての山行である「ハケ岳合宿」もエスケープすることになってしまった。3人の遺体が仲間や家族の手によって帰国するまでの40日間は、身も心もマッキンリーだったと言える。

5月の合宿は成功だった。長い時間をかけてゆっくりと登ることによってお互いの力量がほぼわかったのである。隊長代行として登攀まで担当した酒井さんの好リードであった。

実務は少しギクシャクした面もあった。はっきりと物を言うタイプの私にしては珍らしく、上方風のオブラートに包んだ指示の仕方だったらしい。中高年で経験者揃いと云うことに対する甘さもあったのかも知れない。このため後半バタバタと準備をしたため担当者は現場で苦労したようだ。もっともその場でも中高年の良さが自動的に働いてそれなりにうまく処理されてはいたように思う。

キャラバンは楽しかった。夏の高原は雨である。5年前に夏のチャンタン高原を2年前には秋のティンリ高原を経験していたので、高原は絶対に夏に限ると思っていた。雨の中の花は美しい。

5年前のチャンタンと違うところは、今回は高原ばかりでなく樹林帯を抜けなくてはならないことであった。心配は杞憂に終わった。樹林帯はほとんどジープで抜けることができキャラバンのほとんどが高原だった。そして10回目のヒマラヤ登山にして初めて「青いケシ」と対面できたのである。

登山は自然体でスムーズに進行した。登攀は山を視る確かな目を持った酒井さんのリードの下に経験豊富な西さんがサポートして順調だった。内院へのアプローチとして利用した岩壁帯にもしっかりとしたルートが確保され、小さくとも主氷河に取り付き、美しいラインを描く岩稜に導びかれて確実に頂に向かって行った。

キャンプでは無理のない重量の荷上とローテーションのため、毎日が雨の中の行動でありながら何時も笑い声が絶えなかった。ほとんどを過ぎたベースと第1のキャンプは、黄、紅、紫、白などの小さな花々が咲き乱れ、西の峠に眼をやれば、そこからは常に霧が湧き、岩壁を駆け抜けて行く。時折り雲の間から望むシャラリはあくまでも高く白い雪を装って近寄り難い壮厳さで峻立している。そんな風景の中で、ある人は日本に想いを馳せ、或る人は頂を思う。登山期間は短いのにこんなにもゆったりとした時を過せるのは初めてであった。

登山期間は夏の36日間 場所は四川省南部 目ざすは六千メートル級の未知の山 個人負担金70万円 こんな条件に納得して参加した9人にとって、あまりにも脆い岩の続く稜線を、危険を冒してまで攀じ頂に固執する必要は無かった。限られた条件の中で無理の無い行動をした結果を素直に受け止めた。登頂できれば更に喜びは増しただろう。だが残したことによって頂の美しさは増幅して心にしっかりと染みついているのではないだろうか。

気負うことのない減張のついた登山であった。

岩 壁 よ

おまえのことでいっぱいだった 岩壁よ
寒気に熱き想いをかけたような 雨の中に
緩い傾きの斜面に碎石を堆積し
短かく切り立ったカンテを刻む

棚は安らぎの場所として花々が競い
浅い紺青の溝を 雫が埋めつくす
大蛇のようにうねるザイルの先に
道ははてしなくも高みへと続いた

おまえをうつした とおい追憶だ
誰がそれを伝えるだろう 誰が
それを書きとめるのだろうか……そうして

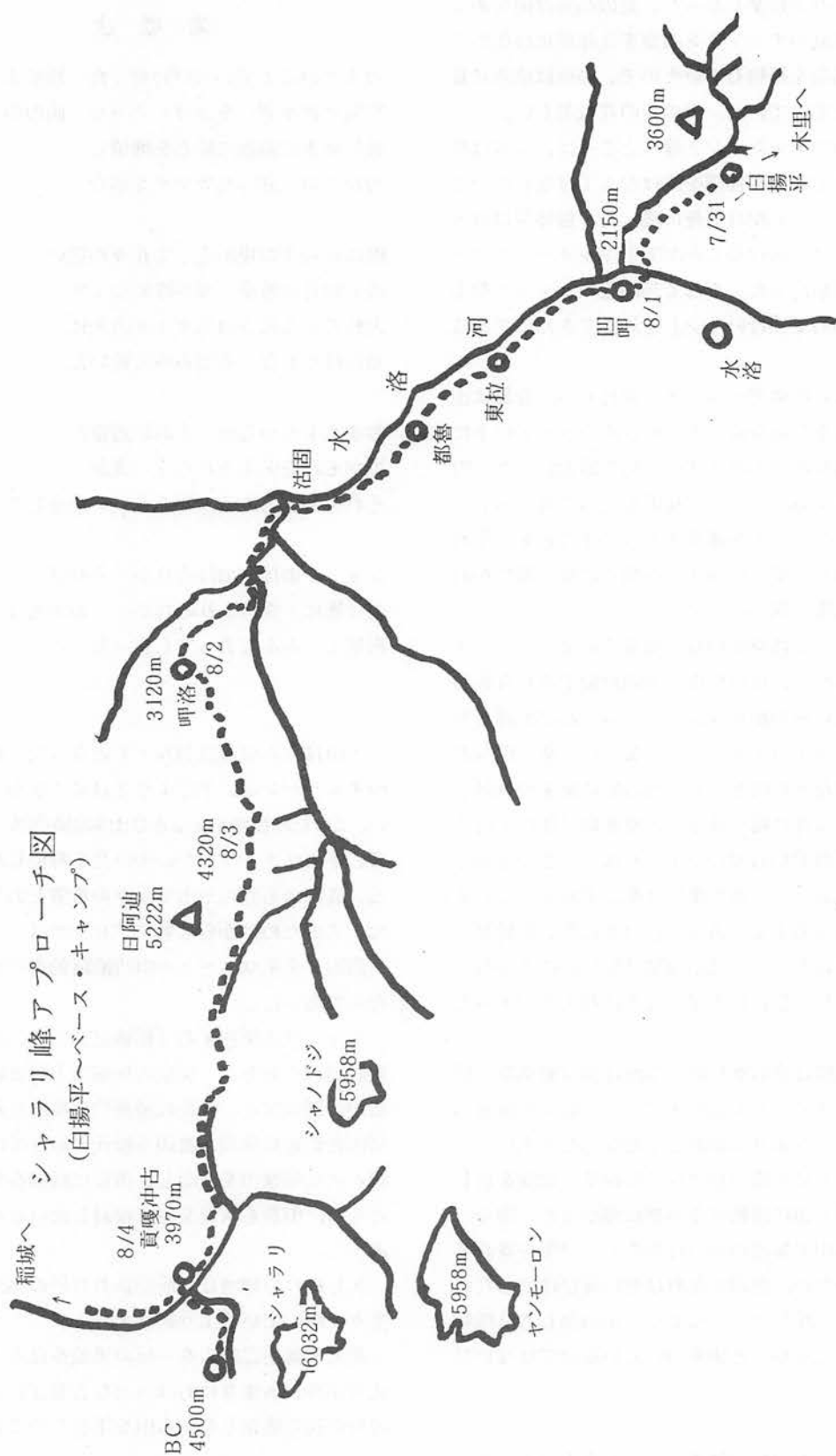
シャラリの頂におぼろ月がくるたび
雨は死に 雪あかりのなかに おまえは
岩壁よ みんな去ってしまった と

下山はカムの高原がルートとなった。往きの雨のキャラバンが、予定より2日多くかかってしまい、このため往路を戻ると登山期間が短くなるので、下山はキャラバンの少い北を希望したのである。成都から許可が出て我々の希望どおりとなった。このためはからずもアプローチは、コンカ山一周約2千キロメートルの四輪駆動車の旅となったのであった。

シャラリの所在する「稻城県」では、県長を表敬訪問したおりに、東京の稲城市との友好姉妹都市が話題になり、県長は積極的に締結を希望した。帰国後新宿郵便局の渡辺英樹氏の紹介で佐久間都議と共に稲城市を訪問し、市長に経過を報告したところ、市長も状況を見て検討したいとの意向であった。

久し振りの理塘は、前回訪れた秋の高原と違い、生々と輝いているように見えた。

最大の難所二郎山を一幅の墨絵を見る思いで越えながら、あまりにもゆったりと過ぎた、今遠征の仲間達に感謝しながら山を下りたのであった。



第II部

隊務報告 考察と研究 報 道

中华人民共和国
外国人旅行证
The People's Republic of China
Aliens' Travel Permit

证字第 89030 号

No.

姓 名 山森欣一
Name
国 籍 日本
Nationality
护照或居留证号码
Passport No. or Residence Certificate No. MH3496417
偕行人 先热日峰登山队共10人
Accompanied by
旅行地点 雅安 泸定
Places to travel 康定 雅江 稻城
有效期至 1989 年 8 月 止
Valid until yr
交通工具 飞机 火车
Means of Plane Train
transportation:
发证日期 1989 年 8 月 止
Date of Issue yr



隊 務 報 告

1. 事務局日誌

1985. 10. 22 山森事務局長が、ギャラ・ペリ偵察の帰途、四川省登山協会を訪問し、初めてジャラリ存在を省地図にて確認する。直ちに口頭で登山の申し入れを行うも、未開放地区とのことで快諾を得られなかった。

1986. 8. 31 山森事務局長が、雲南～四川広域踏査隊の渉外のため、四川省登山協会を訪問し、再度登山の実現を要請する。

1987. 7. 6 中国登山協会に「1988. 7. 25～8. 31」の登山許可申請書を提出。経路は北京～成都～西昌～木里～先熱日～稻城～理塘～康定～成都～北京であった。

1988. 2. 2 四川省登山協会より、四川省人民政府の決定により先熱日を許可するとの連絡が届き、中国登山協会に手続きするよう助言を受ける。

4. 4 再度、四川省登山協会より許可連絡届くも、この段階の許可では、7月に登山隊を派遣するのは到底無理であった。もっとも、この段階でも中国登山協会から許可通知は無い。

10. 21 中国登山協会に「1989. 7. 26～8. 30」の登山許可を申請する。

10. 28 四川省登山協会に、HAJとしては、四川省の登山許可だけでは登山を実施できない旨、連絡した。

11. 20 四川省登山協会より許可連絡入る。

11. 24 中国登山協会より待望の登山許可通知が届いた。

11. 25 「ヒマラヤ 205 号」誌上で隊員募集。

11. 29 会員18名に「先熱日登山のご案内」を発送。

1989. 1. 6 産経新聞に登山計画の紹介記事載る。

1. 15 英字新聞「ジャパン・タイムス」でも登山計画が紹介された。

1. 19 再度会員に「先熱日登山のご案内」

を発送し参加者を募った。

2. 15 「岳人 501 号」誌上にて隊員募集。

2. 22 四川省登山協会より、先熱日と近くにある夏諾多季の写真、周辺の概念図が送られて来た。これにより、キャラバンルートや山姿がおぼろげながら見えて来たのである。

2. 22 松館正義氏の勤務先に「隊員派遣要請書」を提出。

2. 22 登山計画書を作成。

2. 27 中国登山協会へ5千元送金する。

3. 4～5 第1回合宿：HAJ ルームで顔合わせと今後の日程を協議。翌日は東京都山岳連盟主催の高所順応研究会へ参加（山森、酒井、松館、大久保、干場、菅沼、谷田川）

3. 18 中国登山協会へ国際電話にて、議定書の送付依頼と、特別登録料の確認を行う。

3. 19～21 第2回合宿：ハケ岳（西嶋、松館、大久保、干場、菅沼、谷田川）

4. 4 中国登山協会より議定書用紙届く。

4. 15 第1回定例集会（山森、酒井、大久保、菅沼、谷田川、一貝塚一）

4. 16 四川省巴塘でM6.7の地震が発生（この後も4.25にM6.7の地震が発生する）

4. 18 中国登山協会へ議定書送付し、特別登録料7千元を送金する。

4. 18 四川省登山協会へ、白楊平からのキャラバン手段と、巴塘地震の影響などを照会。

5. 1 中国登山協会から議定書届く。

5. 3～5 第3回合宿：五竜岳（9名全員）

5. 10 四川省登山協会より、白楊平からのキャラバンは馬になると連絡あり。

5. 19 読売新聞紙上に登山計画が紹介された。

5. 21 チョモランマ、パスキ・パルバット両隊と合同でスノーバーを作製する。

5.27 第2回集会 山森、酒井、大久保、菅沼、谷田川、貝塚。

6.10 第3回集会 同上の6名

6.4 北京血の日曜日。

6.12 中国登山協会へ国際電話をかけ、今夏の登山が実施可能か確認。結果は、全く問題が無いので予定通り進めて欲しいとの事であった。

6.17～18 第4回合宿：H A J ルームにて梱包作業を全員で行う。

6.26 中国登山協会へパッキングリスト、隊員名簿など送付し、ビザ用招待状を依頼する。

経費 53,375 元を送金する。同時に四川省登山協会へコピーを送付。

7.7 中国登山協会からビザ用招待状届く。

7.12 在日中国大使館にビザ申請。

7.15 合同家族会と壮行会。

7.21 中国登山協会へ最終入国通知 (FAX)

7.24 在中国日本大使館へ「願い書」送付。

7.25 ディリー東北に登山計画紹介される。

出発前夜の最終打ち合わせと、予防注射を H A J ルームで実施。

2. 渉 外

H A J が中国に目を向けたのは、1982 年秋であった。第一期の計画が西南中国とインド、ブータン、ネパールを含んだ「中国及び周辺地域総合探査計画」（詳細はギャラ・ペリの報告書を参照）であるとするならば、次の目標となったのが、「黄河」「長江」「ヤル・ツェンポー」など中国の三大河川を舞台とする活動であった。即ち、それぞれの流域の山を登り、地域を踏査し、川を下ろうとするものである。

初めのトライは「ヤル・ツェンポー」であった。しかし、ここには、政治と経済の壁が大きく立ち上がり、一部の登山しか実現していない。

次は「黄河」であった。5 千 4 百キロ全流の川下りこそ実現しなかったが、1985 年に源流の登山と踏査を実行できたのであった。

長江である。流域には多くの山々がある。1984 年玉竜雪山、1987 年格聂、その他梅里雪山、雀儿山なども目標とされた。その過程の中から生れたのが今回の先熱日である。

興味の対象は、未踏査地域の「木里」にもあった。木里を踏査して 6,000 m の未踏峰を登る、しかもその未踏峰は、ほとんどの岳人が知らない山なのである。

木里に入るには、西の西昌か南の永寧からスタートしなければならない。西昌は正にイ族の本拠地であり、イ族に囲まれた中にチベット族の里があるのである。このことも興味をそそることだった。

H A J の渉外は、単に一つの山について独立し

て進められたものは、どれ一つとしてない。今登山の先熱日についても、この山の置かれている特殊な地域に注目した結果が、長江プロジェクトの渉外の中で開放される結果となったのである。

その結果、我々は素晴らしい山々と郷を知る事ができたのであった。

5 年の歳月は、単独にこの山だけを目標としていたならば長く感ずるに違いない。しかし、H A J にとっては、1984 年玉竜雪山を振り出しに、常にこの流域に目を向け、地元の事情をも勘案しつつ、待つべきは待ち、押すべきは押す渉外を展開しているので格別長くはなかった。自然体としての許可であったように思えるのである。

1985 年 10 月下旬に、ギャラ・ペリの偵察を終えた私は、帰途成都に立ち寄り、四川省登山協会と翌年の海子山、雪宝頂などの計画について協議した。その折りに見た簡単な省地図の中に「先熱日」を見出し、イ族自治州の中にあるチベットの自治県「木里」に興味を引かれ、早速口頭で登山希望を申し出たのであった。

翌 86 年の雲南～四川プロジェクト渉外のため成都に暫らく滞在した折にも、強くこの山の開放を希望したのであるが、この時には、86 年プロジェクトの行程として希望していた。「西昌・徳昌」の滞在すら許可されず、この西昌～木里の地域への入域は困難をきわめたものであった。

しかし、四川省側も、唯単に「困難」と私の希望を退けるのではなく、それなりに関係部門へ

の打診を続けていたのであった。

四川省は中国の中でも大きな省である。このため、対外開放政策は、他と比べて少しテンポが遅いきらいがあった。登山部門も当然そうであったが、チベットへの往復も含めて頻繁に訪ねて来るH A Jの熱意だけは感じとってくれていたようだ。

頃合を見計らって87年夏に中国登山協会に正式に「1988年夏」の許可申請をした。四川省側のニュアンスに「許可」を感じとったからである。すぐに来ると思った許可は来なかった。

1987年12月には、中国の登山関係部門の会議が開かれ、6千米級の山については、各省等が独自に登山隊と議定書を交わせるようになったらしい。その結果、四川省登山協会からは、許可する旨の

通知が来た。

しかし、H A Jは中国登山の窓口を中国登山協会と決め、中国全土の計画をバランスをとりながら実施しているので、四川省だけの許可では実施できない。北京側に何等かの考えがあるから許可が出ないのだ。

隊を組織する限度まで待っても北京から許可は来なかった。止むを得ず'88年計画は延期とした。当然、四川省側は困惑した。

何度かの北京とのやりとりの結果、88年10月になって「89年夏」の登山申請書を提出。1ヶ月で許可連絡が入った。こうして、1988年11月末に今回のシャラリ登山隊は始動したのであった。

(記：山森欣一)

3. 登 攀

今回の先熱日登山では、当初、報道としてテレビ関係が同行するというで計画を進めた。このため、報道関係に隊長の山森が当たり、酒井が登攀部面を責任を持つという分担となった。

基本構想

まず、今回の先熱日登攀の構想についてまとめておきたい。

『一知られざる山を探ってみませんか？一未踏の山々が少なくなったと云われる時代ですが、六千米級に目を転じると未だ未だ未知の山々があり、H A Jが求める一方の旗印である“未知”を探る舞台があります。

四川省に属し、雲南省との境に近い「木里」がその舞台です。西と南を長江、東をヤルンの大河が流れ、北には四川の高原が広がる木里は、山また山に囲まれた桃源境です。地形的に多くの川と山が南北に連なっているため、自動車道は少く、多分あるだろうと云われる山を探るためには、徒歩によらねばなりません。

自動車の終点から目指す山は、西と北にあります。どちらに向えるのか今のところわかりません。資料によれば西の山は6,032m。北は5,755mです。山に辿りつける保障もありますが、チベット族をはじめ、ナシ族、リス族など11の少数民族

が住む木里で充実した登山をしてみませんか？勿論、山頂を極めるつもりで準備します。』

これは、『ヒマラヤ』紙上で隊員を募集したときの文面である。つまり、「未知の山を求める旅」というのがキャッチフレーズであった。この段階では目指す山の山容などは全く未知であった。

*

1989年になって四川省登山協会よりこの山域の写真が3枚送られてきた。2枚は隣りの山、夏諾多^{シャノド}季のものであり、我々の目標の先熱日のものは1枚だけであった。

これらの写真を見て初めて先熱日の山容の一端が臆気ながらわかってきた。当初考えていたよりも難しい山であることがわかった。その結果、先熱日登攀の基本構想を立て、5月合宿や東京での集会で確認し合った。

以下にそれを全文掲載する。

*

1. 基本的確認

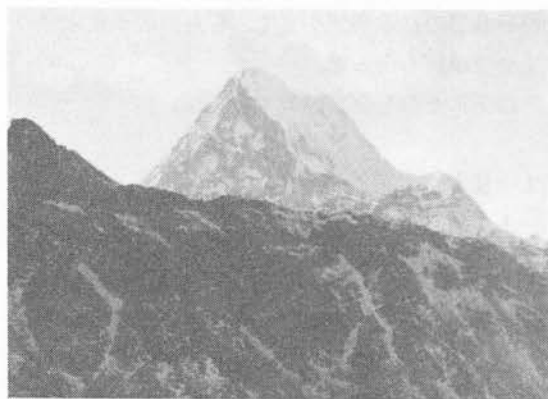
1. あくまで登頂を目的とした登山隊である。
2. 登山の成否は、隊員の能力の総和によって左右される。
3. 出来る限り多くの隊員が登頂するよう努力する。
4. 隊員の生命を危険にさらすような事態はさ

ける。

2. テクニカル・ノート

1. 先熱日及び周囲の山について（写真を見て考えること）

- ① 当初想像していたよりはるかに難しい山々である。
- ② 夏諾多季（5,958m）については正面（東面を中心に）には、登攀可能なルートはない。これは、この周囲の山々の特徴であるとも言える。
- ③ 夏諾多季の頂上部分のスノーキャップ（または、ハンギンググレッシャー）は何を意味しているのか。先熱日には存在しない。
- ④ これは、夏諾多季の頂上部分は広大であるということ、または、西面は比較的なだらかな地形であるということだろう。
- ⑤ とすると、先熱日の頂稜部分にそれがないということは、先熱日は四方が切り立っている山であるということになりはしないか。
- ⑥ 登頂ルートは、写真に見える右手、北面に求めることになる。可能なルートとしては、東面との境の稜か西面との境の稜付近である。
- ⑦ このうち、西面との境の稜は肩につきあげるもので、頂上稜線が長すぎはしないか。
- ⑧ 東面との境の稜をルートにすると、どこからこの稜に取り付くかである。
- ⑨ BCの位置は、写真の撮影位置を標高約4,300～4,500mと推定すると、ほぼ同じ位か、少し下の4,000～4,300mと考えら



▲四川省登山協会から届いたシャラリの写真

れる。

2. 登攀ルートについて

- ① 上部は急な雪面の登攀が主である。（岩場、岩稜は取れない）
- ② フィックス・ロープは30～40本は必要。
- ③ 支点の多くはハーケン（ロック、アイス……長めのもの）
- ④ ユマーリングは、急な雪面のそれを考えればよい。（それ以上だと登攀不可能）
- ⑤ 必要器材の7割はC2～頂上間で使用することになる。
- ⑥ 8月の雪面は硬い。

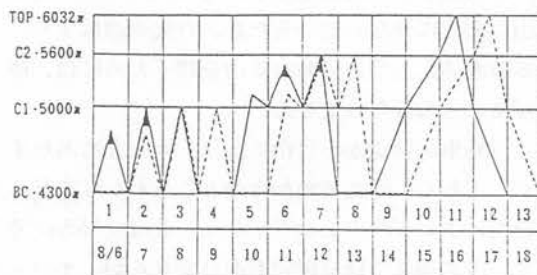
3. 登攀計画

- ① オーソドックスな極地法を採用する。
- ② 高所登山において必要な技術は、
 - 確実な歩行技術
 - 自己確保、フィックスロープ、間接確保の2点である。これらの完全な励行を心がける。また、特にフィックスロープの多用（頂上までフィックス）を原則とする。

4. 行動計画

- ① 行動単位は2つにする。
- ② 3日行動、1日休養のユニットにする。
- ③ 高所滞在、宿泊をなるべくおさえる。
- ④ 現場判断を優先するが、必ず隊長（代行）了解のもとに行う。
- ⑤ 1日の行動時間は6時間を目安とする。
- ⑥ 担荷量は15kgとする。
- ⑦ 順応の悪い者への担荷量は少なくし、過労に落ちないように配慮する。
- ⑧ 体調チェックを毎日、各自が行い、その結果を隊長（代行）に報告する。

表1 行動予定



これらの構想に基き、登攀用具（共同）は以下のものを準備した。

品 名	数	備 考
① 登攀ザイル	5	50 m
② フィックスロープ	40	50 m
③ スノーバー	40	
④ アイスハーケン	35	
⑤ ロックハーケン	15	長めのもの
⑥ カラビナ	27	
⑦ アブミ	10	
⑧ ボルト	11	
⑨ ホルダー	2	
⑩ キリ	5	
⑪ 滑車	2	
⑫ アイスバイル	4	

登山活動の詳細については、第1部登山報告に譲るとして、ここでは

「いかなる判断に基いて、現地で行動したのか」の概要を日を追って記したい。

展 開 *

基本構想の項にも記したように、入山するまではBCを先熱日北面に置き、東面または西面の境の尾根に取り付くことを考えていた。

8月4日、4日間のキャラバンを終え、貢嘎冲古の流れのほとりにテントを張った。その夕方、ガスの切れ間から西面の氷河の一部、サイドモレーンあたりを初めて見る事ができた。西面との境の尾根に取り付くには、あの氷河のあたりに出れば良いと判断した。しかし、この時は、頂上や北壁のあたりはまったく見る事ができなかった。東面との境の尾根へと取り付くにはどうするのか課題として残っていた。

8月5日、朝、再びサイドモレーンのあたりが見えた。馬方は、北面の方へ行く道はないと言っていたが、いざ登りだしてみると、立派な道がついていた。BCをどこにしようか考えながら登る。北面に入り込むと、北壁、頂上が正面に見えるはずだが、ガスのため下部しか見えない。川が西へ曲るあたりで道も西へ曲るが、その時点で、北面

と東面の境の尾根へは岩壁帯のため取り付けないことがわかった。残された西面の氷河にでるには、アイガー状岩壁の裾をトラバースし、氷河の下の方のあたりを登ることになるようだが、そこは落石や雪崩の危険が大きそうだ。もっと西の方へ回り込めば氷河へ出るルートがあるだろうと判断し、上部へとむかう。北面の下部岩壁帯は右または左から突破して内院に入り込めると考え、4,500 m地点にBCを建設する。

8月7日、北面の下部岩壁帯の偵察。右手の尾根は脆くて不可能。左手へ岩壁下を大きくトラバースしたが、左端もかなり困難である。もっと良いルートが西面にあることを期待し、偵察をうち切る。

8月8日、西面の偵察。雨の中、ガスがかかり、広い範囲の展望は得られなかったが、大岩壁、大ガレ、脆い岩稜などから、西面は不可能と判断する。こうなるとBCから内院に入り込むには、昨日偵察した北面の下部岩壁帯の左端しかないと考え。夕方はじめて先熱日の全貌が顔を出した。下部は不明だが、内院から先熱日の西の肩へ突き上げる2本の雪稜のうちの、どちらかをルートにすれば良いことがわかった。

8月9日、下部岩壁帯を突破し、内院に入り込む。

8月10日、C1建設。草地にテント4張。西の肩へ出る2つの雪稜は、氷河を詰めて行けば良いことが判明する。

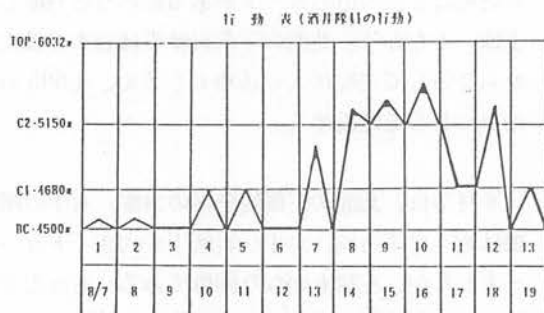
8月13日、C1より氷河を登る。三角形の大岩壁を回り込んでいくと、北西壁が表われ、その左端は岩が露出しており、常に雪が落ちていて上のコルへは出ることが不可能であることがわかった。5,150 mのコルまで偵察した結果、西稜は下部の雪稜から岩稜になり、南側はスパッと切れおちているが、何とか登れそうだ。上部のスノーキャップを乗り越すのは苦勞するだろうが、ここが唯一のルートであると判断し、これに全力投球するこ

とに決定した。

＊

このあと登山報告のような行動をしたが、結果的に1回のアタックもせずに登山を中止した。

隊員の行動は次のようであった。



登山を振り返って

1回の頂上アタックもせずに登山は中止とした。

＊

「BC撤収まであと4日間。この登山期間で何ができるか」

「ルート工作隊のメンバーを変えて、もう1日頑張ってみるか」

「それとも、2～3名の者で、2晩位のビバークを覚悟でアタックしてみようか」

「無理して先へ伸ばした場合は……」

「思い切りよくやめにしようか」

私の気持ちは、朝C2より下り始めた時から迷い続けていた。実際にルート工作に出た3人には、あの脆い岩稜で「やるだけはやった」という気持ちの慰めはあるものの、他の6人に登山中止は物足りなさが残るのは当然だ……。

登山の責任者として

- 岩が非常に脆く、支点に安心できるものが求めにくい。
- 有効なロックハーケン、ボルトが残り10本しかない。
- アイスキャップから頂上までが長く不安。
- 下降時の安全が確保されるのか。

などの点から、何となく「GO!!」と踏ん切る気持ちになれないのだ。このもやもやした気持ちが残る以上、潔く「やめにした方が良い」と決心するのがベストだろう。

他の隊員もそれに賛成してくれた。

隊長の「それでは登山は中止にしましょう」との最終結論を聞き、何かほっとした気持ちになった。

＊

今から考えると、当初「未知を求める」「6,000mきりきりの山」ということで、登攀自体も多少甘く考えていたとは言えないだろうか。

3枚の写真が送られてきて、「想像していたよりはるかに難しい山」とわかったものの、どこかに登頂可能な雪のルートがあるはずだと決めてかかりはしなかったか。登攀準備は、それをもとに準備した。

実際に来て、見た山は、周囲を巨大な雪壁・岩壁群で守られた、見るからに手強い山であった。唯一登頂可能なルート（南面は未偵察）として選んだ西稜だったが、いざ取り付いてみると、碎石を積み重ねたような岩稜だ。硬いと思った上部岩壁帯も、スレートを重ねたような所だ。雪稜、雪稜を想定したスノーバーは無用の長物、厚みのあるアイスハーケンは岩を崩す役にしかたなかった。遅々として伸びないルートに、せっせと荷上げしたフィックスロープは、結局使わずに20本以上もゴミとしてルート上に放置した。

登山期間中のみならず、前後のキャラバン期間中も含めて、実に、雨の降らなかった日は1日とてない。（もっとも雨季を覚悟で行ったのではあるが。）

とにかく、「ああすれば良かった」「こうすれば…」の反省はいろいろある。しかし、

「登れなかったことを悔むのはやめよう」

「登山隊が入ったことのない全山の未知の山へ来て、一発で落せると考えたこと自体を反省しよう」

「一発で落せなかったから、先熱日登攀に興味や関心を失ってしまうという心をこそ憂えよう」

「未知の山へ来て、この山のすばらしさを知った、あそこまで登れた、ここまでこの山のことがわかった。これをもとに、次回は必ず登ってみせるとの『熱き想い』が沸き上がることを期待しよう」

＊

先熱日は、チベット仏教信者の信仰の山である。巡礼者たちは、この山に神々の姿を見いだす。この山を巡ることにより、神々の声を聞く。現世で

の加護を求め、来世での幸せを信じる。

我々登山者にとっても、先熱日は十分信仰の対象となりうる山である。 (記：酒井国光)

4. 装 備

幕営用具、炊事用具のほとんどが成都にデポしてあったため、国内での装備調達作業は楽だった。四川省登山協会でのデポ品確認、再梱包は隊員の協力によってスムーズに行なわれた。ただ、当日は雨天のためテント類を設営して確認するまでしなかった。結果的にエスパースのフライのチャック破損、フライと内張を間違える、フェースノードテントのポールで合わない、等のミスがあったが、大きな不都合にはならずホッとした。デポ品リストだけでは不安な面もある。トイレットペーパーなどは1年も経てばカビ臭くなる。中国の紙製品は質が悪いのでたっぷり持って行きたい。

現地購入品はガソリンだけであり、中国側が調達してくれた。知らない街で買物に走り回ることもなく助かった。

個人装備については、日本の厳冬期程度に羽毛服、高所帽などの防寒対策及び雨対策を加えた。最高到達点が5,500 mとなってしまう、使用せずにそのまま日本に持ち帰った装備も各人あったと思うが、6,000 m程度の山では適当であったと思う。 (記：菅沼弘子)

幕営用具

メスデント (20人用・太陽工業)	1張	◎
ジャンボテント (8人用・クロスタ)	1張	◎
マイクロテックス (4～5人用)	2張	◎
エスパース (4～5人用)	2張	◎
フェースノード (3～4人用)	2張	◎
夏用テント (8人用・太陽工業)	1張	◎
テントマット (2m×1m×9mm 東レ)	15枚	◎
銀マット	3枚	○
ハイビーシート (3.5m×3.5m 藤森工業)	10枚	◎
ツェルト (ゴアテックス、ナイロン)	2張	×
テントペグ (アルミ製40cm)	32本	○
スコップ (アルミ製)	2本	△
スノーソー (アルミ製)	1本	×

細引4mm	20m	×
荷造りヒモ	1巻	△

炊事用具

ガスコンロ (EPI・上部用)	8個	◎
ガスボンベ (EPI・上部用)	50個	○
ガソリンストーブ (ホエーブス 625)	4台	◎
ガソリン	36ℓ	○
ガソリンポンプ	1本	◎
ガソリン用ジョーゴ	2個	◎
ガソリン用ポリタンク (4ℓ)	1個	◎
ベニヤ板 (コンロ台、まな板)	10枚	◎
コッヘルセット	5組	◎
メタ	98本	○
大ナベ	1	○
中ナベ	1	◎
圧力釜	1	○
大ボール (アルミ)	1	◎
調理器具 (各種)	各1	◎
食器セット (皿・ボール・コップ)	10組	◎
上部用食器セット	5組	◎
洗剤	1箱	○
水用ポリタンク (10ℓ)	5個	○
タオル (ふきん、雑布)	4枚	◎
ペーパータオル (あると便利)	1箱	○
アルミホイル	1箱	○

生活用具他

ナタ	1本	◎
ノコギリ	1本	×
ローソク (大・上部用)	4本	○
ランタン	2台	○
単三電池	200本	○
工具セット (針金、ペンチ、ドライバー)	1組	○
文房具セット (マジック、ガムテープ)		○
テルモス (1ℓ、0.5ℓ)	4本	△
亀の子タワシ	2個	×
梱包用具 (ストッパー、P. Pバンド)	適宜	◎

ビニール袋（中、小、厚、薄）	各100枚	○
ほうき	1本	○
ロールペーパー	40個	◎
洗濯石けん（固型）	4個	○
洗濯ばさみ	20個	◎
裁縫セット（テントフライ、靴修理）	1組	◎
個人用装備		
シュラフ	1本	◎
シュラフカバー（自由）	1枚	○
オーバーヤッケ、ズボン（雨具兼用）	1組	◎
オーバー手袋、高所帽	1組	×
羽毛服	1	○

ロングスパッツ	1	◎
雨具、カサ	1組	◎
アイゼン、ピッケル、ヘルメット、ハーネス、 下降器、ユマール、カラビナ、シュリングの登 攀用具はBC以上にて常時使用した。		
ヘッドランプ（行動中は使用せず）	1組	◎
ナイフ、水筒、体温計	各1	◎
毛手袋、毛靴下、着替え	適量	◎
日出帽、マスク、磁石、ホイッスル	各1	△
サングラス又はゴーグル	1個	○
カメラ、フィルム、電池	適宜	◎

5. 食糧

◆はじめに

「男子厨房に入るを禁ず」で「据え膳」をいた
だくしか能のない、そして東京から遠い石川県の
干場、西嶋に食糧係があてられたのはミスマッチ
の感なきにしもあらずであった。

山森隊長より、(1)中国で時間がないので日本で
毎食のレーションをつくって送る。(2)従って中国
での購入は最少にし、日本で寄贈を求めて行き、
不足するものは石川で購入する。(3)寄贈要請は全
員で行うの3条件が提示されていた。

結果的に見て食糧調達については認識のズレが
あったようである。石川ではまず食計画をたて、
必要品目と数量をリストアップし、それに基づい
て寄贈を求め、得られなかったものは全て購入と
考えていた。しかし、チョモランマ、バスキパル
バット、シャラリの三隊への寄贈品が集中し、余
剰を互いに融通しようというH A Jの方式は、不
足があれば寄贈品中心に計画を変更し、どうして
もというものだけ購入するというものであった。

地方の我々にはなかなかそのあたりが理解でき
なかった。そのため東京で新たに参加した貝塚隊
員も食糧係に入り寄贈品中心にメニューの修正が
なされた。しかし、ギリギリまで寄贈を求めてい
たこともあって事前の数量チェックをするといま
もなく、梱包日当日、石川のメニューと併用しな
がらH A J事務所に集められた寄贈品を手にとり
おおよその見当で毎食毎の袋詰をすることになっ

た。当然、かなりの過剰となり、輸送費を圧迫、
ずい分と迷惑をかけたようで恐縮している。

しかし、献立立案にあたっての我々石川の基本
的な考え方が隊長や各隊員の方々に受け入れて協
力してもらえたので係としては、自分たちの料理
の能力がほんの少し開発されたこと、毎食おいし
いおいしいと食べてもらえたことも含めて大変喜
こんでいる。

◆基本的な考え方

平均年令40才を越えるアカの他人9人が1ヶ月
の共同生活をする。当然、感情の摩擦をさけるた
め食することと下ネタに話題が集中するだろうし、
仲良く元気良くやってゆくためにはうまいものを
腹一杯食べられることが大切だと考えた。

それで、可能な限りグルメ料理を追求する。そ
のためにも親睦を兼ね隊長を除く全隊員が一度は
シェフとなり自分の得意メニューを作るという2
本の柱を立てた。

◆実際の食事

(1)ジープで行動中（招待所食堂などで）

さすが「蜀（食）の四川」どんな辺境の食堂
でも 酒（ビール）が飲め、辛くておいしい料理
が何品も出て全員満腹満足であった。

(2)キャラバン中（一例、8月1日夜 酒井氏メニュー）

野菜サラダ、ワカメ酢の物、たくわん、松茸御
飯、松茸吸物、網焼風松茸（松茸を姿のまま枝を
削った串に刺し、焚き火で焼き正油をつけて香り

で頭が痛くなるほど食べまくるシャカリ隊オリジナル料理。帰りのキャラバンでは、これにそのあたりで草を食べている子羊の肉をはさみ、コンニャクの刺身を口なおしに添えると更に美味なることが判明した。)

(3) ベースキャンプで (一例、8月5日夜松館氏メニュー)

鳥肉ジャガ、ソーセージの卵巻、高野豆腐・日高昆布・干ホタテ・ジャガイモ・カンピョウのおでん風煮込み、リンゴ・玉ネギのサラダ、スルメ・身欠ニシン・ヒメタラのマヨネーズそえ。

(4) キャンプ1以上で (一例、8月15日C2の夜)
α米、釜飯の素、ソーセージ、生味噌パックと乾燥野菜の味噌汁、レトルトパックの鰯かば焼。

◆まとめ

成都で肉、卵を買い中国人の氷入りクーラで運搬、ベースまであげた。野菜はトラック輸送の振動でずい分痛んだがベースでは役に立った。玉ネギは探すのに苦勞し、キャベツは奥地でないと入手出来なかった。松茸は山中のキャラバンでキロ八百円ほどで大量に買付けた。

寄贈品はレトルト、乾燥品を問わずすべておいしく、たくわんは中国人にも評判が良かった。モチ米のα米もおはぎなどもつくれておいしかった。

隊員特別メニューは成功的だったが、材料をそろえるのも各人にまかせ袋詰してもらえばもっと満足のゆくおいしいものになっただろう。シェフの中では松館氏がプロ級の包丁さばきであった。

行動食は各人毎の好きなものを入れたボックスをベースにおきそれぞれでレーション化してもらうつもりであった。それは各人の好みが一番強く出ると考えたからである。赤飯パックなど特殊な希望のものは買いそろえたが、大たいは寄贈品にたよったためおしきせ性的になってしまい、消費品に予想通り片寄りが出てきた。日本国内で各人好きなものを必要量だけパックしてもらって持ち込めば無駄がもっとはぶけたと反省している。

松館氏八戸せんべい、菓子では「チュルルン」や「びっくりマンチョコ」に人気が集まった。

毎食のメニュー以外はスペシャルボックスをつかったが、短期登山で忙がしかったこともあり、

十分な利用とは言えなかったが、豆腐やコンニャクなどもつくった。ソーメン、ソバは大量のお湯の必要な割にうまくゆであがらずヒマラヤには不向と思えた。

中国人側から時々、果物、スープ、その他の料理の差し入れがあり、我々も彼等をしばしば招待したが、彼等のつくるものもなかなかであった。

なお、余った使える食料品はすべて中国側、四川省登山協会に寄贈した。(記：西嶋 鍊太郎)

メニューの例

貝塚メニュー (7月31日・キャラバン)

アルファ米、野菜スープ、サラダ、たくわん
大久保メニュー (8月3日・BC)

アルファ米、酢豚(素、牛肉、玉ネギ、ナス、いんげん豆) 松茸スープ、ナスのトッパンジャン、姫タラ、キクラゲの油いため

干場メニュー (8月4日・BC)

アルファ米、豚野菜鍋(豚肉、キャベツ、鳥野菜、味噌)、カレーライス(ボンカレーと玉ネギ、豚肉、じゃがいものいための煮込)、トマト入りスープ

菅沼メニュー (8月6日・BC)

アルファ米、クロquette(マッシュポテト、サケ缶、カニ缶、パン粉、小麦粉、サラダ油) ひじきとわかめのあえもの、味噌汁

谷田川メニュー (8月7日・BC)

アルファ米、コンビーフ入りチーズでのじゃがいも煮、たくわん、しめじの味噌汁

西嶋メニュー (8月8日・BC)

アルファ米、長崎チャンボン、卵入り中華スープ、たくわん

西嶋の誕生祝 (8月11日・BC)

握り寿司(具はソーセージ、むし菊など)、パンケーキ、ワカメゴマ酢あえ、果物缶詰、たくわんなど

シャカリ最後の夜 (8月22日・チョンゲー)

松茸と羊肉(各自、串焼、アルミホイル焼など)
コンニャク刺身、とり雑炊、ねりうめ、たくわん、カニ玉スープ、アルファ米

※登山中持参したアルコール類

日本酒1升瓶3本(入・下山祝各1本、誕生祝1本) ウィスキー13ℓ。缶ビール3本

6. 医 療

今回のE X Pはインド・ネパールと異なり、食べ物、水にはさほどの心配はしていなかった。とはいっても肝炎対策は事前にできる範囲でδグロブリンを行ない、また破傷風のトキソイドも施行した。

今回のE X Pの特色として、

①ホコリっぽい道のジープキャラバンが長い。②雨季のシーズンでもあり、キャラバンルートが不明、③平均年齢が高い隊である。ということから①に対し、トローチ替りのノドアメ、うがい薬、目薬を多くし、②に対し、蚊とり線香、痒み止めを多めに用意、③に対して、いろんなことを想定した薬品を準備し、現地での血圧測定を含めた体調チェックに重点をおいた。

結果

使用薬品としては、長時間のキャラバンから、くつずれ、膝関節痛、とげ、爪の変色、また、下降中の転倒による打撲や、落石による捻挫といった、予想以上に足のトラブル、特に外傷が多く、テーピングテープ類や、湿布剤が多用された。中には、連日の雨の中の行動でぬれた足から自然に感染を起こし、化膿した第1趾を切開、排膿することもあったが、行動には特に支障なかった。

内服薬では、キャラバン～BC入り前後にかけて、下痢止め、鎮痛剤が使用されたが、頓用であり、さしたる量ではなかった。

キャラバン中半よりBC入り後、下痢する隊員が出たが、発症の経過がほぼ同時のものもあり、水、食器類などの、人の手を介しての細菌感染も考えられたが、薬の効果もさほどみられなかったため、原因追求には成り得ないが、高度の影響も含めた、環境の変化や疲労が重なり、抵抗力の低下や、ストレスとなり、本来の胃腸の活動が十分なされなかったことによる、一種の消化不良と考える。尚、症状の訴えに関しては、本人がさほど大きな問題として取り上げずに個人的に経過観察した様な点もみられ、十分考察するに到らないが、いずれにせよ、C1に上がる頃には症状の訴えはきかれていない。心配していたルートも、しっかりとした道がついており、変な虫もいなかったた

め、用意していた薬を使用することがなかったのは幸いである。また、車の移動時には特別なことは必要とされなかった。

高度順化に関して、

BC入り(4,500m)するまでのキャラバンが順化を図る上で適当なUP・DOWNを繰り返し、また隊員のほとんどが何度かの高所経験者であり、順応に関しては焦らず、ゆっくりという意識があったため、スムーズになされたのだと思う。チェックリストのデーターからも1～2日でほとんどが高度に順応している数値が得られている。ただ中には、BC入り後の行動で顔面浮腫や、下腿の圧痕、頭痛を自覚する者も居たが、内服に反応、症状緩和され、行動には支障をきたさなかった。

まとめ

今回のE X Pは高度的なことから、テント数も少なく、そのため各隊員と顔を会わせる機会も多く、また体調不調の際には自主的に報告がなされ、直接隊員の体調を把握することが容易であった。体調チェック表は、自己の体調を把握する1つの手段として使用してもらったが、高所ではいかにして自分の体調をより冷静にみつめ、それを伝えるべく所に伝えるかが、個人はもとより、チーム全体の中でも重要になってくると考える。そういった意味で今回は、各自がしっかり自己管理していたという点で評価したいと思う。

(記：貝塚 珠樹)



持参医薬品

内服薬・その他

• 胃腸

ガスター(20mg)	40	ファイナリンG	21
ブスコパン(10mg)	80	三共胃腸薬	300
セレキノ(100mg)	74	イイラック顆粒	20
正露丸	小2	タケダ胃腸21	40

• 鎮痛

バップファリン	40	セデス	120
ボルタレン	80	ナイキサン	16

• 鎮咳

レスブレン	40	アスベリン	100
テオドール(100mg)	30		

• 抗生物質

タリビット(100mg)	60	エリスロマイシン(200)	60
ビブラマイシン(100)	70	アクロマイシン	30

• 利尿剤

ラシックス(20mg)	58	ダイアモックス(200)	30
-------------	----	--------------	----

• 止痢

ロペミン	90	アドソルビン	95
タンナルビン	95		

• 風邪

新ルルA	210	KZ	40
ベンザエース	80	ダンリッチ	30

• ビタミン

エスファイトG	90	キューピーコーワG	30
---------	----	-----------	----

• 痒み止め

キンカン	1	ウナゼリー	5
------	---	-------	---

• ステロイド軟

ベトネベートN	3	リンデロンV	1
---------	---	--------	---

• 安定剤

コントロール(10mg)	30		
--------------	----	--	--

• 点眼薬

フラビタン	5	リンデロン	1
-------	---	-------	---

• 湿布

5枚入り	5		
------	---	--	--

注射薬

• 抗生物質

シオマリン(2g)	3	ケフドール(2g)	3
セファメジン(1g)	3	ゲンタマイシン(40mg)	5

• 止血剤

アドナ(50mg)	3	トランサミン	3
プレマリン(10mg)	3		

• 利尿剤

ラシックス(20mg)	5		
-------------	---	--	--

• 解熱剤

メチロン(25%)	2		
-----------	---	--	--

救急薬品

メイロン(7%)	10	エフェドリン	3
ネオシネジン	2	ボスシン	5
ノルアド	3	イノバン(100mg)	2
2%キシロカイン	2	ペルジピン(2mg)	4

• 局麻剤

1%キシロカイン	1		
----------	---	--	--

• ステロイド剤

ソルメドロール(1g)	3		
-------------	---	--	--

• 坐薬

ボルタレンSP	20	シェリプロクトSP	30
---------	----	-----------	----

材料・その他

オキシセルコットン	2	弾性包帯(大3・中2)	
オルテックス	2	滅菌ガーゼ	5
ステリーテープ	5	ブレードシルク	2
メス	4	胃カテ(Fr 14)	1
バルンカテ(Fr 14)	1	ペアン	1
クーパー	1	ナイロン糸(3-0)	3
血圧計、ステート	各1	テープ各種	11
角針、丸針	各1	輸液セット	7
注射器各種		注射針(24G・18G)	10
サーフロー針(20G・18G)	5	テーピングテープ	4
フランドールテープ	2	イソジン含軟	1

補液

ハルトマン(500)	3	マニトンS(300)	3
テルモTZ(5%)	2	テルモ生食	2
洗浄用生食	2	ヘスパンダー(500)	1

消毒薬

エチルアルコール	2	イソジン(250ml)	1
----------	---	-------------	---

シャラリ天候概要 (1989年)

(登山中の観測地BC及びC1)

月日	8 時		14 時		20 時		備 考
	天候	温度	天候	温度	天候	温度	
7 / 26	①	—	○	31	●	—	東京→北京→成都
27	◎	—	●	—	●	—	成都
28	○	—	○	—	○	—	成都→石棉 ジープ
29	○	—	○	24	○	—	石棉→西昌 "
30	○	—	○	21	○	—	西昌→木里 "
31	○	13	◎	—	◎	14	木里→白楊平 "
8 / 1	◎	10	○	28	●	—	
2	○	17	○		●		
3	◎		●		●		
4	◎		⊗		●		昼みぞれ
5	①		◎		●		昼夕立
6	●	5	①	7	●	5	
7	●	5	①		●	5	夕方をはじめてシャラリ見ゆ
8	●		①		●	9	夜半上弦の月
9	○	7	①	12	⊖	6	カミナリ
10	●	5	●	6	●	6	
11	●	5	①	—	●	6	
12	●	9	◎	11	●	5	
13	◎	6	●	12	◎	6	
14	●	4	◎	12	●	5	
15	●	4	◎	8	⊗	5	
16	◎	5	⊖	5	①	5	夜半カミナリ、おぼろ月
17	△	5	◎		◎		一日中ガス
18	①		①	—	●		
19	●	4	①	—	●	5	昼みぞれ
20	⊗	3	●	—	●	—	積雪 1 cm
21	◎	—	○	—	○	—	夕方ひょう
22	①	—	◎	—	①	—	チョンゲー
23	○	—	○	—	◎	—	チョンゲー→稲城
24	①	—	◎	—	①	—	稲城→雅江 ジープ
25	◎	—	①	—	①	—	雅江→泸定 "
26	①	—	①	—	①	—	泸定→成都 "
27	○	—	○	—	○	—	成都 荷物整理
28	○	—	○	—	○	—	"
29	○	—	○	—	○	—	成都→北京
30	○	—					北京→帰国

考察と研究

貢嘎雪山三山の考察

酒 井 国 光

本文は、きわめて短い期間、狭い視界での観察から纏めたもので、事実と反することも多々あると思うている。しかし、登山者に全く未知の山域であるので、一つの叩き台の意味で提出するものである。以後の登山隊のより広い視野からの観察により、この山域が正しく解明されていくことを期待するものである。

事前の認識

四川省登山協会より送られてきた3枚の写真をもとに、この山域の山についていろいろ考察した。これについては55ページ「先熱日登攀の基本構想」のテクニカル・ノートに纏めてあるが、再度記したい。

- ① 当初想像していたよりはるかに難しい山々である。
- ② 夏諾多季（5,958m）については正面（東面を中心に）には、登攀可能なルートはない。これは、この周囲の山々の特徴であるとも言える。
- ③ 夏諾多季の頂上部分のスノーキャップ（または、ハンギンググレッシャー）は何を意味しているのか。先熱日には存在しない。
- ④ これは、夏諾多季の頂上部分は広大であるということ、または、西面は比較的なだらかな地形であるということだろう。
- ⑤ とすると、先熱日の頂稜部分にそれがないということは、先熱日は四方が切り立っているということになりはしないか。
- ⑥ 登頂ルートは、写真に見える右手、北面に求めることになろう。可能なルートとしては、東面との境の稜か西面との境の稜付近である。
- ⑦ このうち、西面との境の稜は肩につきあげ

るもので、頂上稜線が長すぎはしないか。

- ⑧ 東面との境の稜をルートにすると、どこからこの稜に取り付くかである。

この時点で、夏諾多季東面のハンギンググレッシャーの成果については日本の山の雪庇のでき方のような捉え方をしていたと言えるのである。

現地においての観察から

例えば、前項④の認識は全く誤まりであった。夏諾多季は、東面どころか四囲が切り立った山であり、西面の南西壁の上にも巨大なハンギンググレッシャーが懸っているのだ。

また、先熱日にも北面の壁には巨大なハンギンググレッシャーが懸り、西の肩付近は大きなスノーキャップに覆われていた。このうち前者については、四川省登山協会から送られてきた写真では北壁の上部しか映っておらず、ハンギンググレッシャーが見えなかったにしかすぎない。

今回の登山で見、経験したことから考えると、この山域の特徴は以下になるのではなからうか。（主として概念図の ——— のライン④から⑥の部分を考察している）

*

豊富な降雨は上部では雪である。境界が5,600m付近にあり、それより上部は常に雪であり、それ以下は雪になったり雨になったりである。

5,600m以上に堆積された雪は、増加し、徐々に下部へ移動する。これらは5,600m付近で地形や気温、降雨などの原因で崩落し、地形と相俟って下端はハンギンググレッシャー状となる。

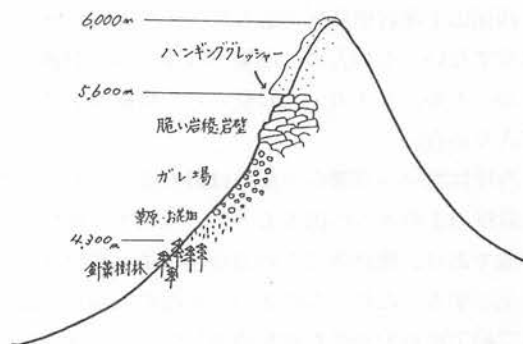
5,600m以下では、雪になったり雨になったりで、雪は蓄積されず、基盤の岩に対し、凍結、融解、浸食などの作用を繰り返す。このため5,600

m以下の露岩部の岩は脆くなり、脆い岩が落ちた後には、急な岩壁、急な岩稜が残り、やせた岩稜が作られる。この付近の山の岩稜で傾斜の比較的緩い個所を観察すると、ほとんどが左右は切れ落ち、稜上は極端に脆いものばかりである。

岩壁、岩稜の下部には広大なガレ場が発達し、その下部は草原、お花畑が広がる。

森林限界は 4,300 m 付近で、豊富な針葉樹林に覆われている。

図は、この山域の様相をきわめてモデル化したものである。



登攀ルートについて

次に1つ1つの山について、概念図をもとに登頂ルートを考察してみたい。

●先熱日(Xiarari)

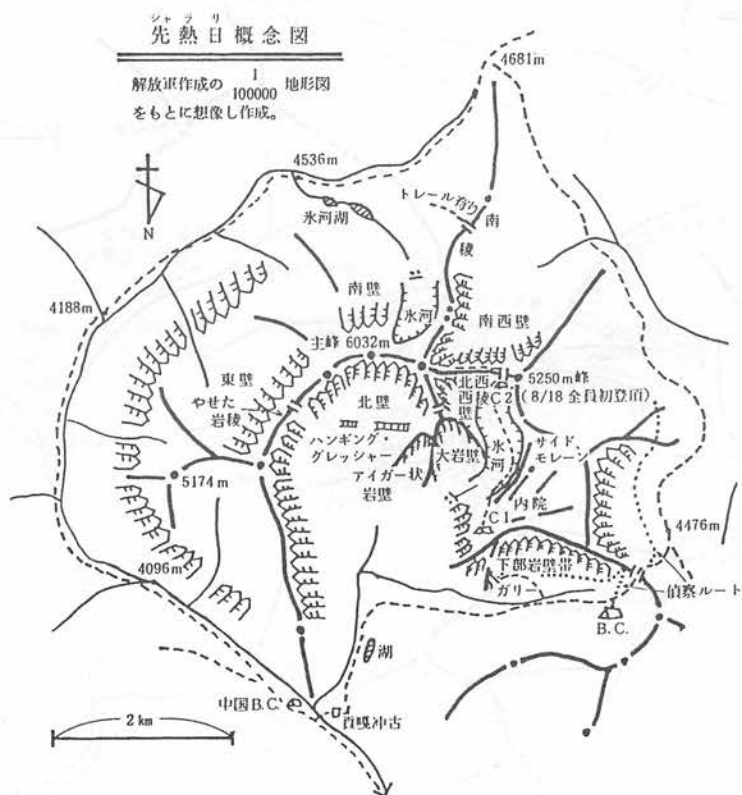
東面

下部岩壁帯に守られ、取り付く島がない。初め、5,174m 付近につきあがるルンゼがルートになると連絡官より聞いたが、このルンゼ上部は岩壁帯であるため不可能である。たとえ、このルンゼか

ら尾根に出ても、上部の屋根は脆く、やせていて登攀不可能である。

北面

北壁は上部に巨大なハンギング・グレシャーが懸り、その基部に近づくことは危険である。この壁の下から東面の境の尾根へ出ること考えていたが、急なガレ場と岩壁が広がり困難である。また出た尾根は上記東面の頂の尾根と同じもので、



登攀不可能である。

西面

西面の下部岩壁帯を突破して内院に入るルートはまずない。このため、内院へは今回我々が通ったルートか、アイガー状岩壁の右の樹林帯を登って入り込む。

西稜は脆いが登攀の可能性は最も高い。また、大岩壁の上のコルへ出ることも、雪の多い時なら可能であり、稜自体はこの方が西稜より多少易しい気がする。ただ、この2つとも西の肩から頂上まで約700mのやせた稜を通過しなければならない。特に、主峰手前のコル状の所までがポイントとなる。

●夏諾多季(Xianodoji)

東面

急峻な岩稜帯で不可能である。

西面

西側4,188m付近から見ると、正面の谷を登り、頂上北側のコル状の所へ出られれば、上部の尾根はやせてはいるが、何とか可能性はあるとふんだ。しかし、北西壁からの落石、雪崩などの危険は大

再び東面

東壁は全く不可能と考えるが、主峰から一段下った東の肩とも言えるあたりに東からつき上げている尾根状のものが、見る角度により見える。これがどこからどのように続いているのか不明だが、上部のみを見る限りでは着目して良いように思われる。

南面

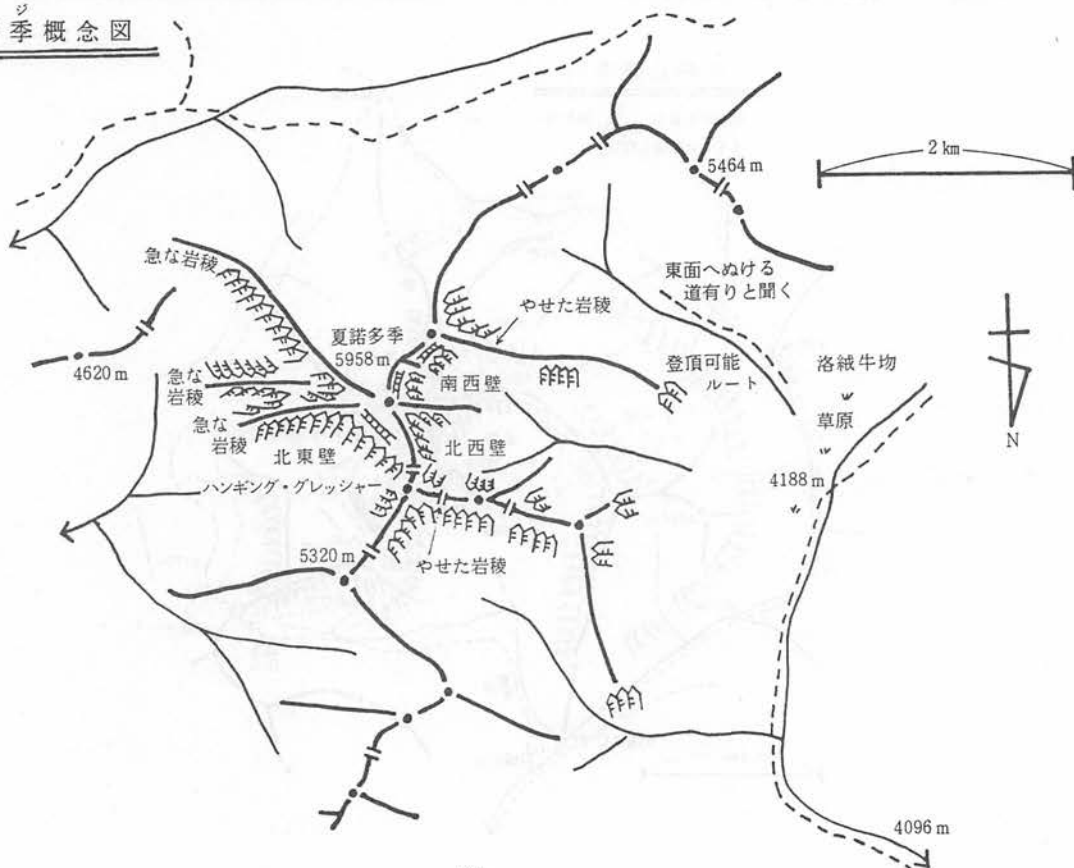
南壁も不可能であろう。また、南稜も西稜から見の限り、やせていて、脆く可能性はない。ただ、南稜との間にある氷河状のものが頂上付近とどのように繋がっているのか偵察してみる必要がある。

きい。コルから上の岩稜は極端に脆いと考えられる。

南面

西面と考えた方が良いかも知れないが、頂上の南側のピークへ西側からつきあげる尾根はかなり可能性があると考え。コルから上部はやせた岩稜で、その上部には南西壁からのハンギンググレ

夏ノドジ
夏諾多季概念図



ッシャーの一部が懸っている。時期の良い時を選べばこれに影響されまい。

このルートに最も可能性を見いだしているのは、頂上稜線が比較的広い雪稜であると判断するからである。

●央邁勇 (Yangmai yong)

北面、西面

三山の中で最も登頂の可能性が大とふんだ山である。そのピラミダルの姿も美しい。

ルートは湖付近にBCを置いて北稜、またはその西の稜を登る。このルートは下部のガレ場と雪稜が主で、技術的には易しい。しかし、雪が多いと時には雪稜上で雪崩の危険もあるので、考えようによっては最も怖い山かも知れない。

東面

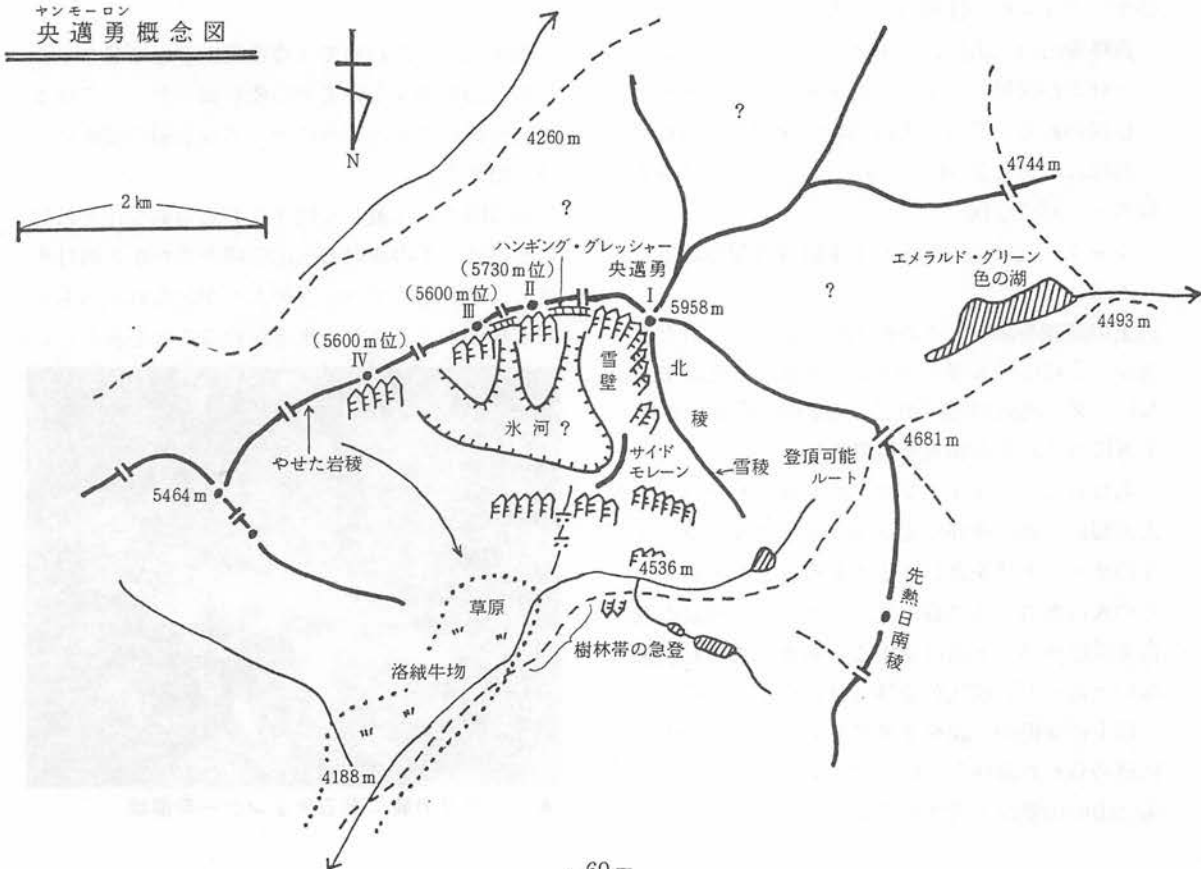
主峰からIV峰の北面に氷河があるらしく、この面から長い稜線をたどるルートも登頂の可能性がありと考える。V峰、IV峰は岩の露出した山だが主峰からIII峰までは雪の峰である。頂上稜線にどこから取り付くかが問題である。

▼ヤンモーロン



洛絨牛場にBCを置き、IV・VのCOL下にC1、III峰付近にC2を出して頂上アタックも面白いと考える。IV・VのCOLまでの岩場、IV峰の登りのやせた岩稜で苦勞しそうである。

ヤンモーロン
央邁勇概念図



シャラリ山名考

山 森 欣 一

中国の山の名前は、現地の住民の発音を漢字に表わしている。今回の山の漢字表記は「先熱日・シェルウル」と「薩内日・サルィズゥ」である。同じ漢人でも北京と四川ではかなり発音が違うため誰に発音してもらうかで異ってくる。加えて聴き取る人の耳の良し悪しで随分と変わってくる。

チベットの世界でも現在地元にいる人が、必ずしも昔からその場所にいるとは限らない。又、たまたま出逢った人の知識度にも随分と左右される。

今回は、地元では非「シャラリ」の意味を知りたいと思った。この地方では一番の都会である木里では時間がなかった。このため止むを得ず山に接近してから聴き取ったのが以下の意味である。

◎白楊平の住民（東の水洛の人が多いらしい）

シャラリは「仏が住む一番高い山」

シャノドジは「三つの山」

◎ヤーディン村の住民（西の人）

貢嘎雪山の三山は、シャノドジが長男、ヤンモーロンが次男、シャラリは末子である。と云う伝説がある。この三人は両親に死別して別れ別れになってしまった。シャラリは菩薩の山である。

◎ズァー郷の住民

シャラリとは仏教で云う千手観音菩薩のことである。

以上の諸説を語ってくれた人が、話してくれた人達がどの程度の知識レベルの人か知ることはできない。又、漢人の通訳がどの程度の予備知識を相手方に与えたかを知る事もできない。

ちなみにベースキャンプに立ち寄ったチベット人夫婦に、通訳を介してシャラリの意味とシャラリのチベット語を書いてもらおうとしたところ、この人は水洛で生れ育ったが、始めから漢語の教育を受けチベット語は話すことも書くことも出来ないと言った。漢化が意外なほど進んでいる。

以下に前掲の三説を参考にして、私なりに山名に込められた意味について考えてみた。

①三山の山姿から考えたこと

三山共に現在も崩壊の進んでいる山である。かつてこの一帯に大きな地殻変動があり、その破壊の凄まじさが地獄絵の様相を呈し、その恐ろしさを近寄り難い存在として末代まで語りつぐうとしたものである。

②ラマ寺の廃墟から考えたこと

古代人は垂直なる物へ畏敬の念を覚え、これが原始宗教の始まりだと云う説がある。

前述したような三山の山姿は、まさしく崇拜の対象となるに充分なものである。そこでチベット仏教の先駆者が、シャラリやヤンモーロンの山姿を仏となるために、無上の悟りを求める大乘の修業僧の姿と見てラマ寺を建立し崇拜した。或いは、シャラリやヤンモーロンの山頂に、この修業僧がいて、日夜仏となるための修業を積んでいるとして、寺を建立し供物を捧げ灯明を燃し続けた。

現地に入って初めて「貢嘎雪山」と命名されたこの三山の神々しいまでの姿を知った。そこはまさに信仰に生きる人々にとっては至福の場所のように思えた。

東の間の夏に美しく咲き乱れる可憐な花々に想いを寄せ、冬の凍れる三山の頭上にかかる満月を見て、彼の地のチベットの人々が、これからも未来永劫変わることなく生き続けることを祈りたい。



▲シャラリの麓にあるチョンゲー寺廃墟

木里藏族自治県の概況

山 森 欣 一

● 木里県は、四川省涼山イ族自治州の中チベット族自治県である。東経100度15分～101度45分、北緯27度45分～29度15分の間にあり、17の民族が住み、1982年の統計では戸数17,934戸、人口101,396人であった。各民族の人口を村松一弥著“中国の少数民族”風に分類すると下記のとおり。

A) チベット高原とその周辺の人々

※チベット系諸民族 (57,634人)

1. チベット族(蔵 Zang) 4,926戸 30,118人

◎2. チャン族(羌 Qiang) 80人

※チベットのない語系の人々

1. イ族(彝 Yi) 4,623戸 23,942人

2. ナシ族(納西 Naxi) 3,268人

3. リス族(傈僳 Lisu) 88人

◎4. トゥチャ族(土家 Tujia) 80人

5. ペー族(白 Bai) 58人

B) 中国西南山地の原住民 (6,305人)

※ミャオ・ヤオ系諸民族

1. ミャオ族(苗 Miao) 1,051戸 6,305人

C) 草原遊牧民の子孫たち (6,515人)

※モンゴル系の人々

1. モンゴル族(蒙古 Meng gu) 6,435人

◎2. トゥ族(土 Tu) 80人

D) 稲作文化のにない手たち (851人)

※タイ系諸民族

1. プイ族(布依 Buyi) 75戸 467人

2. チワン族(壮 Zhuang) 48戸 304人

※古い稲作文化を伝える人々

◎1. タイ族(傣 Dai) 80人

E) 森にけものを追う人々 (160人)

※ツングース系

◎1. マン族(滿 Man) 80人

◎2. シボ族(錫伯 Xibo) 80人

F) シルクロードの住民たち (63人)

※漢化したイスラム教徒

1. フイ族(回 Hui) 63人

G) 漢族(Han) 3,098戸(30,083人)

注1. 各民族の合計は、101,611人となり、資料の数字より215人多くなるが、資料の数字を掲げた

又、この人口を職業別に見ると、大きく分けて農業に従事する者82,762人、遊牧民2,101人、その他16,533人となっている。

注2. ◎印の民族は、解放後に木里県に入った。

● 木里県の面積は約12,000 km²である。日本なら新潟県や秋田県位の広さであり、森林が72%、草原が9%、山や丘、道路などが13%、水面が5%、耕地はわずかに1%である。

県内には、東から雅礱江、木里河、水洛河の3本の川がほぼ南北に流れている。雅礱江と木里河の間を太陽山脈、木里河と水洛河の間を寧朗山脈、水洛河の西を貢嘎山脈が走っている。東の太陽山脈が最も大きく、寧朗山脈が最も長く、貢嘎山脈が最も広い。

この三大河流と三大山脈が、県内を縦貫しているため、県内は切断され4つのブロックに分かれている。さらに、この4つのブロックには、多くの渓谷や河が縦横に交錯していて、その様はまるで漁網を張りめぐらせたようである。

● 木里の名称の由来には3つの説がある。



A) 盐源との県境に木里という大きな寺があり、その名がこの地方の名称となった。

B) この地方が麗江の纳西族の土司「木天王」の所領であったので、その21代前の明の皇帝の姓である「木」という字をつけた。

C) 中華民国時代に出版された「盐源县概況」によれば、清朝末期の四川分図に「米里寺」が書かれており、それが木里と同じ発音だった。

- 木里県で1番高い山は、稻城县との境にあるシャノドジ（夏諾多季 5,958m）である。この山は同時に、涼山イ族自治州と甘孜藏族自治州の州境の山でもある。県内には、シャノドジを含めて、5千メートル以上の山が20以上ある。4千メートルを越える山は100以上、3千5百メートルから4千メートルの山は200以上あり、それ以下の山は数え切れない程ある。

最高峰シャノドジが5,958mであるのに対して、最も低い所は、水洛河が金沙江に合流する地点で、標高1,305mであり、その差は4,608mである。当然、気候の差も激しく、金沙江に合流する所の温帯気候から、シャノドジの寒冷気候まで温度差は40℃以上もある。

夏の時期、木里県人民政府の所在地から出発し、西の宁朗や北の東朗に行けば、幾つもの異った気候帯を通り越さなければならない。まさに「一山で一度に四季あり、十里は同じ気候ではない」という諺どおりを体験できる。

- 木里は、四川省の省都である成都から直線で約400km南西に位置する。ジープ行程で3日間約808km。涼山イ族自治州の州都西昌から直線で真西に約90km。ジープ行程で255kmである。

成都から木里に至るには、岷江、大渡河、雅砻江、小金河など幾つもの山河を越えなければ辿り着けない。正しくそこは遥かなる桃源境と言えるだろう。

- 木里はシャクナゲ（中国語では杜鹃花）の名所である。品種が多く、他ではめったに見ることのできない種類のもでも高山に咲いている。地元のチベット族は、大きなシャクナゲを「ろばの耳」と呼んでいる。それは、この手のシャクナゲが、松や白樺位いの大きさになりその葉が30cmにもなり、ろばの耳にとってもよく似ているためそう呼ばれるようになった。

オムマニペメフム

チベット仏教徒から「マニ車」と「オムマニペメフム」の呪文を切り離すことはできない。この呪文の意味について杉本猪三氏は、「中央アジアの仏陀・岩と雪2号」で以下のように云う。

オム＝仏陀の功德に対する讃美の叫び声

マニ＝宝珠の意で不可思議の妙用を具えた仏陀の聖法

ペメ＝仏の浄土に生ずる無染清浄な蓮華と菩薩とを兼ね現す

フム＝聖衆団に対する感嘆詞

六シラブルあるところから六字呪文と云われており、この六字呪文の文字は、如何なる群をも清浄に洗い去り、その文字を眼で見ただけでも利益があり、読経の声を聞くものはすべて極楽に往くものとされ、その含蓄する処は中国、日本の六字名

号「南無阿弥陀仏」と何ら変らないと解説する。

私は1984年夏、チベットのシガツェにあるタシルンボ寺で経木を彫っている場所を見学したことがあるが、僧からこの呪文はそれぞれ下のような世界を表わしていると説明を受けた。

オム＝神の世界

マ＝神と人との間の世界

ニ＝人の世界

ペ＝全ての生物の世界

メ＝餓鬼の世界

フム＝死の世界

今回の旅では木里、理塘などそれぞれの中心地に滞在する機会がなかったが、チベット本土の都市部では日常的にマニ車を廻し、珠数を数え六字呪文を呪えて歩く姿が見られるのである。



海外登山3度目の松館さん(八戸)

未踏峰征服に意欲満々

日本ヒマラヤ協会 中国・シャラリ峰に挑戦

シャラリ峰は、中国四川省ミニャ・コンカの南西に位置する六〇三三メートルの山。ミニャ・コンカ一帯は解放されて間もない地域。外国人はおろか中国の登山関係者もまだ足を踏み入れていない完全未踏峰の山だ。

松館さんは同協会の会員で、昭和四十六年にインドのデイト・ティバ峰(六〇〇一メートル)に登頂。五十一年にはアフガニスタンのムニジャン西峰(五五三〇メートル)の登頂に成功している山のベテラン。このほか、MTC21が六十年八月に実施した中国酒泉―敦煌四百十五キロクロードウォークにも、支援スタッフとして参加している。同協会の隊

松館 正義さん



あす成田を出発

日本ヒマラヤ協会が派遣するシャラリ登山隊に、八戸市内丸三丁目目の会社員松館正義さんが隊員として参加する。松館さんは海外登山は今まで三回目。「最大限の努力をし、何とか頂上に立ちたい」と張り切っている。

員募集に応募したところ、これらの経験が認められ隊員に選ばれた。

登山隊は山森欣一隊長(東京)

以下九人で、東北からの参加は松館さんだけ。

一行はあす二十六日成田を出発。翌三十七日、成都で荷物の最終チェックをしたあと、車でシャラリ峰のふもとまで行き、来月五日から登山

を開始する。順調にいけば十四、五日には同峰の頂を極められそう。帰国は来月末の予定。

松館さんは「登山は自然が相手。自然が許してくれなければ登頂はできない」と控えめ。それでも「過去の海外登山の経験を生かし、最大限の努力をして頂上を目指したい」と意欲をのぞかせている。

デリーー東北



シャラリ峰に夢をはせる菅沼さん

養豚も 山も全力

神奈川の菅沼弘子さん

ヒマラヤが呼んでる

【神奈川・相模原】ヒマラヤの山々に魅せられ、一つの夢を追いつける主婦がいる。この人は、相模原市磯部の養豚農家・菅沼弘子さん(三三)だ。この夏、中国四川省にある未踏峰・シャラリ峰(ハ〇三二〇)に、日本ヒマヤラ協会・ヤラリ登山隊(山森欣一隊長、九人)の一員として挑戦する。仕事の合間に体力、精神力を鍛え、万全な態勢で二十六日に成田空港を飛び立つ。弘子さんは常時二百頭規模

の養豚一貫経営を、夫の敏康さん(三九)と切り盛りしている。ヒマヤラ遠征は今回で二回目。昭和六十一年に同じ中国のムスターゲ・アタ(七五四六〇)の登頂に成功した。この時、山頂でヒマヤラへの

再挑戦を心に誓った。

最初のヒマヤラ登山の時には、仕事や弘子さんの体力を心配し、敏康さんはすぐに「ウソ」とは言わなかった。だが、フルマラソンを完走し、ムスターゲ・アタ登頂の夢を實現した頑張りには驚いた。今では、弘子さんの登山にかけるひたむきな情熱に、口には出さな

いが理解を示している。

今回登山するシャラリ峰は、四川省ミャコソカの南西にそびえる未踏峰で、中国開放後外国人が訪れたことがない未知の地域。それだけに危険が伴う。仕事が終わると、毎日体力と精神力を鍛えるため、約十キロのジョギングを欠かさず行っている。資金も計

画的にためた。

弘子さんにとって、登山を通しての経験は生活・仕事全般にわたってプラスになっている。精いっぱいやった私は必ず登れる、という気持ちが続くかぎり、いろいろな山に挑戦したい。そのためにも、養豚の仕事を一先懸命にやってみよう。夫には、私のわがままを許してもらい本当に感謝しています。今回は、全く未知・未踏の山なので不安もあるが、楽しみ。と早や気持ちちはシャラリ峰へ。

第Ⅲ部

資料の部



中国登山の手続き

登山申請

中国登山の場合、ネパールやパキスタンのように（社）日本山岳協会の推薦状を添付して外交ルートで提出する必要はない。各都道府県岳連から日山協、さらに外務省と云った国内の煩しい手続きなしに、各登山隊が直接、下記の中国登山協会（CMA）宛に登山申請書を提出すればよい。

登山申請書の申請事項は、参考資料の様式にもとづいて記載する。

従来、中国の登山時期については、春、秋、冬の3シーズンと考えられてきたが、山域によっては夏のシーズンにも許可が貰えるので検討してみるとよい。因に各シーズンの期間は次のようになる。

春（3月～5月） 夏（6月～8月）

秋（9月～10月） 冬（11月～1月）

これらの登山申請書は、日本語でも英語でもどちらで作成してもよい。

（提出先） 中国登山協会

（住所） 中華人民共和国北京市体育館路九号

議定書の調印

申請承認後、登山隊とCMAは協議に入り、議定書を締結することになる。

議定書の事項は別添参考資料の通りである。尚、議定書の調印は山によっては文書のやりとりでも可能であり、北京まで出向かなくともよい。

経費支払い

中国々内の費用については、別添「費用徴収規定」に細かく規定されている。

登録料は、議定書締結終了後すぐに支払わなければならない。もし、期限内に支払われない場合、その許可は自動的に取り消され、他の隊に按

排される。

議定書に基づいて算出された予算額の一部を預託金として規定の期限までに支払わなければならない。そして、中国への入国1ヶ月前迄には、予算金額の全額を支払わなければならない。さもないとエントリー・ビザが発給されない。

（送金先） 北京中国銀行本店

（口座番号） 7110 0594

（口座名） 中国登山協会

注）送金目的の欄に「登山費用」と明記の事。

登山隊は登山終了後、CMAで経費実費と納入金額の差額について清算がなされる。

隊荷の輸送及び通関

中国では山域にもよるが、チベットや新疆地区などは国内輸送距離が長いので登山隊が入国する3ヶ月前迄に北京到着が必要である。隊荷の中に酸素ボンベやガス・カートリッジなどの危険品を含む場合は、4ヶ月前迄に北京に到着するようしなければならない。これはこれらの危険品を運ぶ汽車等の便が決まっているため、その便に合わせる日数がさらにかかるからである。

隊荷の梱包が済んだら、速かにパッキング・リスト及び送り状（Invoice）を作成してCMAへ3部送付しなければならない。

隊荷をアナカン（Unaccompanied Baggage, 旅行者手荷物別送品）輸送する場合、北京の通関は荷送り人が居なくてもCMAが代理で通関してくれる。従ってInvoice及びAir Way billの荷受人名には、CMA気付で隊長名、登山隊名を書いておかななければならない。

成田～北京間の航空路線では航空券のディスカウントがなく飛行距離の割には高いチケットを買わされている。そのため旅行代理店によっては手荷物のエクセス・パッケージについて便宜を計

ってくれるところもあるので相談してみるとよい。

ここで、アナカン輸送について少し触れてみよう。

まず、隊荷の発送予定日が決ったら、その約1ヶ月半前位に航空荷物輸送業者へ連絡をして、目的地迄のキャリア（飛行機）をブッキングして貰う。この時に必要なことは、

- 1) 隊荷の現地到着希望日
- 2) 隊荷の概算重量と個数
- 3) 隊荷の形状・寸法

などを連絡しなければならない。

こうして隊荷輸送のキャリアを予約した後、登山隊は隊荷の集荷・梱包と出発前の一番慌ただしい時期を迎えることになる。

次にアナカン輸送に必要な書類について述べてみよう。

1) パッキング・リスト (Packing List)

持ちだし隊荷の全てについて各カートン毎にパッキング・リストを作成する。リストには、品名、数量、重量、価格(※1)等の項目を記載する。

(※1: 価格表示には2通りある。1つは、C. I. F. (Cost, Insurance & Freight) で、保険料運賃込み価格。もう1つは、F. O. B. (Free on Board) で、積み込み渡し価格。どちらの価格表示なのかを明記しなければならない)

パッキング・リストを作成したら、それらの物品を消費・非消費物品に分けてリストを作る。

2) 送り状 (Invoice)

送り状には、カートン総個数、マーキング名、品名、総価格、荷送り人の住所・氏名、荷受け人の住所・氏名等を記載する。

この場合の注意点としては、荷送り人と荷受け人の氏名は、同じく隊長名とする事。

3) 東京税関成田支署長宛ての「航空手荷物別送品の許可願い書」

航空手荷物別送品としての輸出を承認して頂く願い書。帰国時に別送品の持ち帰りがある場合は、輸入時の通関も併せてお願いしておくこと。

4) 別送品の外国製品の申告書

別送品の中にある外国製品を申告しなければならない。パッキング・リストの中に※1はフラ

ンス製、※2は西ドイツ製、※3はイギリス製、※4はイタリア製………と云ったマーキングでシュラフや登山靴などの外国製品を申告すれば良い。(中国向けパッキング・リストには不要)

5) 国外持ち出す米の量の申告書

別送品中のお米の量を申告しなければならない。隊員数と登山期間から国外持ち出しするお米の量が適当かどうかチェックされる。

6) 全隊員のパスポートのコピー

パスポートの2頁から5頁のコピーをメンバー・リストの順に重ねてとじる。

7) 全隊員の航空券予約証明書

東京から搭乗する飛行機のフライトナンバーの書かれた航空券の予約証明書

8) 登山計画書 (和文)

以上の書類が揃ったら航空貨物輸送業者へ隊荷を引き渡す。ファクシミリやジェネレーターのような機械類は、通関時に別送品としては認め難いと云ったクレームをつけられることがある。そのような場合は、それらの品の登山活動における必要性を記した願い書を提出しなければならない。

通関が切れたら、輸送業者からエアーウェイ・ビル (Air Way Bill) を受けとる。

Air Way Bill を受けとったら、送り状を付けたパッキング・リスト及び Air Way Bill を3部、CMAへ送付する。

次に中国登山に於ける隊荷の関税であるが、撮影機、カメラ、腕時計、通信機器、登山装備、衣類等の特別管理物品については、申告登録後に免税で通関されるが、燃料、食料、医薬品等の消耗物品については、申告総価格の10%が輸入税として徴収される。

入国時に申告した通関申告書の控えは、出国時に必ず申告物品と現物のチェックがなされるので大切に保管しておく必要がある。

その他、チベットでの登山の場合、カトマンズから隊荷をラサへ持ち込むことも可能である。

メンバー・リストの送付

登山隊が入国する3ヶ月前迄に全隊員のメンバー・リストを3部送付しなければならない。記載項目は、①氏名②性別③生年月日④住所⑤職業⑥パスポート番号⑦パスポート発行日⑧登山経験等で、これにパスポート用サイズの写真を添付する。

エントリー・ビザ

CMAから招請状が届いたら、在日中国大使館にビザの申請をする。

エントリー・ビザ申請に必要な書類

- ①全隊員のパスポート
- ②各隊員の必要事項を記載したビザ交付申請書
- ③全隊員の写真（パスポートサイズ） 各1枚
- ④CMAからの招請状

エントリー・ビザは、単数（一次）で6ヶ月間有効のものが交付される。

ビザ交付手数料は、3,000円

トランシーバー

中国の場合は、CMAへトランシーバーの周波数、型式、出力、台数を記載したリストを3部、入国の3ヶ月前迄に送付した後、中国側の判断によって許可される。現在のところ明確な規定は知らされていないが、市民バンド及び140～150MHzの超短波（VHF）の周波数のものは許可されている。

中国々内の手配

中国々内に於ける隊荷輸送、交通機関、賓館・接待所、現地雇員、ポーター・ヤク・ラクダ、現地購入品など全ての手配は、基本的にはCMAが請負う。

これによって登山隊は、中国内総支出の5%を総合サービス料としてCMAに徴収される。

中国側協力員への支給装備

中国側の連絡官、通訳、コック、ベースキャンプ要員等には、別添規則に基づいて手当と装備を支給しなければならない。この装備支給については金銭で解決することも出来る。

日本国内でこれらの支給品を全て揃えるとなるとかなりの金額になるため、金銭で支払っている隊が多いようだ。因に中国側協力員の支給装備は次の費用で用意される。（ ）内はチベット

連絡官及び中国人要員	200ドル（270ドル）
高所協力員	300ドル（405ドル）

トレッキング

中国々内の山地旅遊（トレッキング）に関しては、1986年1月に設立された中国国際体育旅遊公司（王富州総経理）の扱いとなる。

西藏自治区の場合は、登山隊もトレッキング隊も全て西藏国際体育旅遊公司によってアレンジされる。

中国国際体育旅遊公司

北京市体育館路十号

（電話）752831～264、755053

中国登山申請書式

自費で中国を訪れるすべての登山隊は、中国登山協会の要求する、この書式に従い申請すること。

1. 組織

隊名：

国名：

隊長名：

隊員数：

2. 目的

スポーツ：

科学調査：

スポーツ及び科学調査：

3. 目標及びルート

第一希望 — 山 名：

ルート：

第二希望 — 山 名：

ルート：

第三希望 — 山 名：

ルート：

4. エクスペディション期間

第一希望 — から まで

第二希望 — から まで

第三希望 — から まで

5. 科学調査のテーマ

6. 写真撮影の目的

7. エクスペディション実施前の偵察

人 数：

時 期：

8. 中国登山協会に要請する援助

9. 中国への入国及び出国

入国日：

出国日：

出岳地での行動期間：

10. 食糧・装備等（詳細なリストを添付すること）

品 名：

数 量：

重 量：

11. 自国内後援組織

12. 北京での代理人

申請書作成場所：

申請者氏名：

申請日時：

外国登山隊に対する登山費用徴収規定

第一条 自費で中国の山を登る外国登山隊を対象に、中国の対外開放された山に関する管理条文、に基づき本規定を定める。

第二条 外国登山隊は、本規定に従って各費用を支払わなければならない。また、各費用の金額はUSドル建てになっている。

第三条 外国登山隊は、次の費用を支払わなければならない。

（一）登録料、預託金および予算費用

1. 外国登山隊は、中国側の関係部門と議定書を結ぶと同時に、中国登山協会に登録料を納付する。
2. 外国登山隊は、定められた期限内に預託金を納付する。納入された預託金は予算費用の一部に充てらる。
3. 外国登山隊が、自己都合によって遠征を取り消した場合、既に納入した登録料と預託金は返戻されない。
4. 外国登山隊は、中国に入国する一ヶ月前までに予算費用の全額を納入しなければならない。

（二）都市部のサービス費用

1. 外国登山隊（登山隊に随行する中国側要員も含む）は、山への沿線における市内でのサービス費用を請負い式で請求される。
2. そのサービス費用には、以下の費用は含まれていない。

・登山隊と一緒に入・出国することが出来ない登山隊員についての出迎えおよび見送りの費用

- ・ 25 Kg を超える手荷物および貨物の運送にかかる費用 ・ 2 元を超える観光地の入場料
- ・ 遠い郊外への観光ツアーにかかる交通費 ・ 小さな手荷物の保管料 ・ タクシー代金
- ・ クリーニング料金 ・ 医療費 ・ 電話料金 ・ 飲み物代

3. 外国登山隊は、自己都合によって、日程および人数を変更した場合、それによって生じた損失について負担しなければならない。

(三) 中国側の連絡官および他の要員の費用

1. 報酬金

- ・ 登山活動に参加する日から終わる日まで、人ごとに日数で計算する。

2. 山での食事費用

- ・ 中国側の要員の山での食事は、人ごとに実際に食事した日数で計算する。

3. 登山装備の費用（キャンプおよび専門用具を除く）

- ・ 一回の登山ごとに計算する。

4. 生命保険および医療保険費

(四) 山への交通費および運送費

1. 車の賃借料は、車型、走行距離および停車日数に従って計算する。また、空車の帰路費用は別に徴収する。

2. ベースキャンプの当番車は、走行距離のほかに、停車日数に応じて停車費用を徴収する。

3. 登山用の専用道路については、道路補修費を徴収する。

4. ラクダ、ヤクおよび馬の雇用料金は、実際の使用日数および滞在日数に応じて計算する。

雇用期間内に動物が死亡した場合は、その地方の規則に従って補償する。

(五) 山でのゴミの処理費用

(六) 山への沿線および登山途中で撮影、または広告にあたる記念物を設置する場合は撮影料および広告費用を支払わなければならない。

(七) 管理費

登山活動にかかる総額の五パーセントを徴収する。

本規定の各項目の費用の金額については、中国登山協会によって毎年公布される。

(第四条) 外国登山隊が、中国へ持ち込む物品・装備については、輸入税を支払わなければならない。

(第五条) 外国登山隊に対するサービス項目（例えば航空券、汽車の切符、郵便、通信、ガソリン、食品、装備）などについては、中国の規定に基づきサービス料金を徴収する。

(第六条) 本規定の解释权は、中国登山協会に属する。

(第七条) 本規定は、公表された日から発行する。

徴 収 費 用 の 金 額

(1 9 9 0 年 版)

(一) 登録料および預託金

単位: USドル

山 の 種 類	登 録 料	預 託 金		
		入国一年前 までに	入国半年前 までに	入国一ヶ月前までに
チョモランマ峰	2 7 0 0	2 7 0 0	5 5 0 0	予算全額の全残額
8 0 0 0 m 以上	1 7 6 0	2 1 6 0	2 7 0 0	〃
7 0 0 0 m 以上	1 0 8 0	—	2 1 6 0	〃
6 0 0 0 m 以上	7 0 0	—	1 3 5 0	〃

(注1) 団体の人数が20名を超える場合は、超過人数一人につき30USドルの登録料を別に徴収する。

(注2) 6000m未満の山(岩登りを含む)の登録料は、一人につき30USドルとする。

(注3) 初めて解禁された山あるいは未踏峰に登山する場合は、特別登録料を徴収する。

8000m以上の山 27,000～41,000USドル

7000m以上の山 13,500～27,000USドル

6000m以上の山 8,100～13,500USドル

6000m未満の山 2,700～8,100USドル

(注4) 新しいルートに登山する場合は、許可が必要である。許可されたそのルートの登録料は、通常ルートの200パーセントとする。

(注5) ある特殊な山を解禁する場合は、中国登山協会は別の規定に基づき特別な料金を徴収する。

(二) 都市部のサービス費用

単位: USドル/人・日

金 人 数 地 額 区	10人以上	6 ～ 9	2 ～ 5	1人	備 考
北 京	36	43.20	63.20	104.90	部屋選択可
新疆・青海・四川・甘肅・雲南	33.50	40.30	59.50	102.40	〃
県級招待所	30	30	30	40	〃
県以下の食宿点	20	20	20	30	ホテル代含

- (注1) 以上の金額には、ホテル代は含まれていない。
 (注2) 同じ場所、同じ時間に隊員数が15名を超える場合には、一人を無料とする。
 (注3) チベット地区の宿泊、食事代は別表による。

(三) 連絡官及び中国側要員の費用

単位: USドル

職 務		報酬金(人日)	山中食(人日)	装備費(人回)	保険料(人回)
連補 絡 官佐	チベット	13.50	13.50	270	55
	その他	10	7.60	200	55
連 絡 官	チベット	18.00	13.50	270	55
	その他	15.00	7.60	200	55
高連 絡 級官	チベット	28.00	13.50	270	55
	その他	20.00	7.60	200	55
通 訳	チベット	13.50	13.50	270	55
	その他	10.00	7.60	200	55
高ボ 所	チベット	13.50	13.50	405	150
	その他	10.00	7.60	300	150
高ガ イ 所ド	チベット	15.00	13.50	405	150
	その他	15.00	7.60	300	150
B要 C員	チベット	13.50	13.50	270	55
	その他	8.00	7.60	200	55
低ボ 所	チベット	19.00			
	その他	15.00			

(四) 輸送費

1. 車の費用

単位: USドル/車・Km

車 種	チベット地区	新・青・四等	駐車料金	当番車の駐車料金
F級ジープ	0.68	0.60	32.5	16.00
S級ジープ	0.60	0.48	27.0	14.00
Fミニバス	1.50	1.20	54.0	—
C級ミニバス	1.20	0.86	40.5	—
F級大型バス	1.90	1.51	67.6	—
C級大型バス	1.50	1.20	54.0	—
トラック	1.30	0.90	54.0	27.00
軽トラック	1.00	0.70	40.0	20

2. 当番車の駐車料金は上表を参照のこと。

3. 道路補修費

単位: USドル

種 類	大 型 車	小 型 車
シガール〜チョモランマへの専用道路	1 6 2	1 0 8
マザー〜イリク間の専用道路	1 3 5	8 1
チベットの他の山への道路補修費 および草地損失費	8 1	4 1

4. 荷役動物の雇用料金

単位: USドル

地 区 動物の種類	新 疆 ・ 青 海 ・ 四 川 等	K 2 地 区
ラ ク ダ	2 1 . 6	2 7
ヤ ク ・ 馬	1 6 . 0	—

停留費用および空載の帰路費用については、上記レートの半額を徴収する。但し、動物の往復費用は徴収しない。また、工人も別に料金を徴収しない。

チベット地区

- ・ヤクは一日一頭につき11USドル、停留期間は半額を徴収する。
- ・ヤクは三頭ごとに一名のヤク工を雇用すること。
- ・ヤク工の保険料・装備費は一人につき120USドルとする。報酬金・食事代は一日15USドルとする。
- ・往路と帰路に4日間の費用を支給すること。

(五) 山地の環境保護費

一人毎回15USドルとする。

登山隊が、国家自然保護地区を通るとき、関係部門の規定に基づき、別途費用を徴収する。

(六) 撮影料

8 5 0 0 m以上の山	6 , 7 6 0 USドル
8 0 0 0 m以上の山	5 , 4 1 0 USドル
7 5 0 0 m以上の山	4 , 6 0 0 USドル
7 0 0 0 m級の山	4 , 0 6 0 USドル
6 0 0 0 m級の山	2 , 7 0 0 USドル
5 0 0 0 m級の山	1 , 9 0 0 USドル
5 0 0 0 m以下の山	1 , 3 5 0 USドル

四川省高峰登山小史

登山年	登山内容
1928年	ジョセフ・F・ロックは、西康省ムリの北西にあるコンカリン山群を探索。
1929年	ジョセフ・F・ロックは、アメリカのナショナル・ジオグラフィック・ソサエティの遠征を率つてミニヤコンカ山群を探索。
1930年	スイスの地質学者、アーノルド・ハイムは、8月から11月にかけてミニヤコンカ山群を探索・測量し、27万5千分の1の地図を作成。
1932年	ミニヤ・コンカ (7,556m) R・L・バードソル、A・B・エモンズ、ターリス・モア、ジャック・ヤングの4人からなるアメリカの「西康遠征隊」は、ビュチュー谷側から北西稜を経て登頂。10月28日、登頂者はモアとバードソル。
1956年	ミニヤ・コンカ (7,556m) 中国登山隊、偵察に入る。
1957年	ミニヤコンカ (7,556m) 初登頂 中華全国総工会隊 (史占春隊長以下29名、内登山隊員は17名) は、6月13日に史占春隊長ら6名が登頂。然し、下山時に3名が転落死する。
1980年	ミニヤ・コンカ (7,556m) ・9月から10月にかけて2つのアメリカ隊が南西稜と北西稜から挑んだが、どちらも失敗した。南西稜隊 (A・ハーワード隊長ら6名) は、6,250m 迄で断念。北西稜隊 (A・リード隊長ら6名) は、10月13日雪崩で1名死亡し2名が重傷となった為、6,000m で断念。 ・北海道岳連隊 (京極紘一隊長ら6名) は、秋にハイローコーとイヤンツエーコーに入って偵察をした。
1981年	ミニヤ・コンカ (7,556m) ブレ期に北海道岳連隊 (川越昭夫隊長ら25

登山年	登山内容
	名) が北東稜から挑んだが、5月10日のアタック時に8名が滑落死して断念。
1981年	チョンチャン (6,886m) ブレ期にスイス隊 (R・ブーテリエ隊長ら10名) は、ハイローコーのB・Cから主峰 (6,886m) と南峰 (6,600m) の初登頂。続いて載山 (6,410m) と2つのピラミッド・ピーク (6,150m, 6,020m) ロング・リッジ・ピーク (6,100m) にそれぞれ初登頂。他に5,480m から5,020m の5峰にも登頂。
1981年	チアズ (6,540m) ブレ期にイギリス陸軍隊 (H・デヒ隊長ら9名) は、北西稜から挑んだが、6,000m で断念。山群北西部偵察時にリウチ・コンカ (5,928m) に登頂 (4月16日に2名)
1981年	スークーニャン (6,250m) ・同志社大学隊が4月から7月にかけて2隊を送り込んで登頂。 第一次隊 (和田豊司隊長ら7名) は、ルート偵察後、南東稜にルートを決めて挑んだが5,620m で断念。引き続き7月から第二次隊 (川田哲二隊長ら8名) が南東稜に挑み7月28日に2名登頂。29日、30日にも登頂する。(合計7名が登頂) ・ポスト期にはアメリカ隊 (J・ドニニ隊長ら5名) が、北壁にルートを取って4名が登頂。
1982年	ミニヤ・コンカ (7,556m) ・ブレ期に市川山岳会隊 (斉藤英明隊長ら7名) が北東稜に挑んだが、頂上直下で断念。帰途1名遭難。 ・同じブレ期にスイス隊が初登ルートの北西稜に挑み、5月25日に登頂。頂上からの下降中に1名遭難。 ・また、カナダ隊 (R・グリフィス隊長)

登山年	登 山 内 容
	も同じ北西稜を試みたが、悪天候のため稜線に達しただけで断念。 • ポスト期にはアメリカ隊（J・マーフィ隊長ら7名）が北西稜を目指し、10月3日に2名登頂。他に付近の5,800m級の数峰にも登頂。
1982年	チアズ（6,540m） ポスト期にアメリカ隊（F・ベッキー隊長ら6名）は、南稜から11月17日に初登頂。（3名登頂）西稜ルートも試みるも頂上直下で断念。
1983年	セレスティアル・ピーク（5,334m） 秋にアメリカ隊（エドワード・ヴェイル隊長ら6名）は、南西壁からの初登頂に成功した。
1983年	スークーニャン（6,250m） • HAJ隊（角田不二隊長ら2名）は、秋に入山し北壁を試登した。
1984年	ミニヤ・コンカ（7,556m） 秋にドイツ隊（ゲハルト・シュマッツ隊長ら3名）は、北西稜から挑み10/6に全員登頂した。
1985年	ミニヤ・コンカ（7,556m） • 秋にチュン・キン・マン隊長ら3人の香港隊が北西稜を試登（5,700mまで）したが大雪崩が発生し九死に一生を得た。
1985年	セレスティアル・ピーク（5,334m）

登山年	登 山 内 容
	アメリカのキース・ブラウンが南東稜から単独登頂に成功した。
1986年	シュエバオ・ディン（5,588m） • 夏にHAJ（遠藤隊長ら10人）と四川省登山協会（鄭 発ら6人）の合同隊が入山。8月5日4名が初登頂に成功した。翌日にも9人が頂上に立った。
1986年	ゲニ（6,204m） • 秋にHAJの山森欣一が東面を偵察した。
1987年	ゲニ（6,204m） • 夏にHAJ隊（飛田和夫ら13人）が入山し、南東稜を登るも悪天候のため5,300m地点で断念した。
1988年	ゲニ（6,204m） • 春にHAJ隊（飛田和夫ら7人）が入山し、南稜から6月11日3名が初登頂に成功した。翌日にも2度目の隊長を含む5人が登頂した。
1988年	チェルー（6,168m） • 秋に神戸大学（北口博教隊長ら7人）と中国地質大学（朱発栄ら9人）の合同隊が入山し9月24日12人が初登頂に成功した。翌日に2人も登頂した。
1989年	シャラリ（6,032m） • 夏にHAJ隊（山森欣一隊長ら9人）が入山したが脆い岩のため5,500mで断念した。

我々が訪れた「貢嘎雪山」周辺は、今もっとも注目されていると云えるだろう。東を長江へ注ぐ大河である「大渡河」「雅礱江」が流れ、西と南は長江の上流である「金沙江」が激流となって流れている。北にはチベットへと続く川（四川）蔵（西藏）公路が横断するカムの高原が広がる。

かつて「西康・シーカン」と呼ばれたこの地域と雲南やビルマを約1世紀前に4回にわたって踏査した記録が訳本として出版された。

清時代の末期の漢人やチベット族、ロロと呼ばれていたイ族、モソと呼ばれていた納西族などの100年前の生活や習慣などが描かれており、この地域に興味を持つ人にとっては欠かせない本であ

る。その中から一節を紹介しよう。

「木里には3～4人の中国人の交易商がいる。彼らは陝西省からきたという。しかし、彼らは非常にチベット化されており、チベット訛りの中国語を話しさえする。」

現代とは何という違いだろう。我々のベースキャンプに立ち寄った水洛のチベット人は、水洛で生れ育ちながら、チベット語を書くことも話すことも出来ず、漢語の教育を受けて育っていたのである。

（記：山森）

書名：雲 南—インドと揚子江流域の環—

H. R. デーヴィス著 古今書院

12,000 円

2/25/2018 12:00 PM



四川省登山の和文参考資料一覧

(1979年開放以後のもの)

- 1) ミニャ・コンカ (Minya Konka) 7,556 m
 - 1.貢嘎山 (1981年ミニャ・コンガ 7,556m 登攀と遭難の記録) 北海道山岳連盟 1982年12月30日
 - 2.貢嘎の東 (中国四川省大雪山脈貢嘎山 7,556m 偵察の記録 北海道山岳連盟 1981年3月1日
 - 3.手記・さようなら、北壁に逝った友よ (阿部幹雄) 「山と溪谷 531号」1981年8月号
 - 4.さようなら、ミニャ・コンガの友 (阿部幹雄) 「山と溪谷 531号」1981年8月号
 - 5.ゴンガ山・銀雪の王 (羅仕明) 「月刊 人民中国」1982年11月号 200円
 - 6.ゴンガで遭難した松田隊員救出記 (曾慶南) 「月刊 人民中国」1982年11月号 200円
 - 7.ドキュメント：ミニャ・コンカ大生還へのミステリー (徳丸壮也) 「山と溪谷 546 & 547号」1982年8 & 9月号
 - 8.インタビュー：「ここでは絶対にしねない」 (編集部) 「岳人 423号」1982年9月号
 - 9.ミニャ・コンガの奇跡 (救出、治療の戦い) 李高中 「岳人 423号」1982年9月号
 - 10.ミニャ・コンカ奇跡の生還 (松田宏也) 山と溪谷社 1983年1月20日 900円
 - 11.手記：ミニャ・コンカからの生還 (松田宏也・構成 徳丸壮也) 「山と溪谷 552号」1983年1月号
 - 12.ミニャ・コンガの生と死 (編集部) 「岩と雪 90号」
 - 13.山一青春 菅原信・中谷武両君に捧げる 市川山岳会ミニャコンガ登山隊 1984年5月
 - 14.1982年ミニャコンガ遭難の記録 市川山岳会ミニャコンガ登山隊 1984年5月
 - 15.登山史を語る山道具 (松田宏也の装備品) 「山と溪谷 615号」1986年12月号
- 2) スークーニャン (Siguniang) 6,250 m
 - 1.四姑娘山1981 同志社大学体育山岳部 1982年10月24日
 - 2.壮士征姑娘羅姑娘愛壮士 鋭峰・四姑娘山の初登頂 (川田哲二) 「岳人 412号」1981年10月号
 - 3.四姑娘山・やさしい乙女 (羅仕明) 「月刊 人民中国」1982年7月号
 - 4.中国四川省・四姑娘山群のビッグ・ウォールを攀る (エリック・パールマン) 「岩と雪 106号」
 - 5.四姑娘山の旅 (角田不二) 「ヒマラヤ 145号」1983年12月号
 - 6.四姑娘山の自然 (山岸喬) 「ヒマラヤ 150 & 151号」1984年5 & 6月号
 - 7.四姑娘山の山旅「ヒマラヤ 153号」1984年8月号
 - 8.スークーニャンの山旅 (小林英見) 「ヒマラヤ 157 & 158号」1984年12 & 1985年1月号
 - 9.大姑娘山麓トレッキング (伊佐九三郎) 「山と溪谷社 630号」1988年1月号
- 3) ゲニ (Geni) 6,204 m
 - 1.格 (ゲニ) 偵察報告 (山森欣一) 「ヒマラヤ 183号」1987年2月号
 - 2.神の山、ゲニ登山計画「ヒマラヤ 189号」1987年8月号
 - 3.神の山、ゲニ峰 残してしまった課題 (飛田和夫) 「ヒマラヤ 192号」1987年11月号
 - 4.神の山、ゲニ峰 日本ヒマラヤ協会 昭和62年12月1日
 - 5.神の山、ゲニ峰—H A J ゲニ峰登山隊計画「ヒマラヤ 199号」1988年6月号
 - 6.神の山、ゲニ峰初登頂「ヒマラヤ 202号」1988年9月号
 - 7.白く輝く神の山・ゲニ初登頂 (飛田和夫) 「山と溪谷 638号」1988年9月号
 - 8.未踏の秘峰 ゲニ初登 (飛田和夫) 「岳人

- 495号」1988年4月号
- 9.雨の山晴れの山 秘峰ゲニ初登頂(遠藤京子)
「岳人495号」1988年9月号
- 10.神の山 格基峰(1988年初登頂の記録)日本
ヒマラヤ協会 1989年6月12日
- 4) チェルーシャン(Chola Shan) 6,168m
- 1.中国の未踏峰チェルー山に日中学生合同で14
人が登頂(神戸大学・中国地質大学合同登山
隊)「岳人500号」1989年2月号
- 2.日中合同登山隊のチェルー山登頂とその意義
(平井一正)「山522号」1988年12月号
- 5) シャラリ(Xiarali) 6,032m
- 1.桃源境への旅 シャラリ登山計画「ヒマラヤ
210号」1989年5月号
- 2.桃源境への旅 もう一つのチベット シャラ
リ峰登山記「ヒマラヤ216号」1989年11月号
- 6) シュエバオ ディン(Xuebao Ding) 5,588m
- 1.雪宝頂及びその姉妹峰について(鄭榮発)
「ヒマラヤ174号」1986年5月号
- 2.岷山の霊峰へ(日中四川雪宝頂合同登山計画)
「ヒマラヤ177号」1986年8月号
- 3.天府の霊峰 雪宝頂「ヒマラヤ180号」1986
年11月号
- 4.中日合同雪宝頂登山の印象(羅凡)「ヒマラ
ヤ185号」1987年4月号
- 5.天府の霊峰 雪宝頂 日本ヒマラヤ協会
1987年8月5日
- 7) ミンシャン
- 1.岷山の秋・1983 中国ナムチャ・バルワ登山
隊強化合宿の記(角田不二)「ヒマラヤ148
号」1984年3月号
- 2.中国人の岩登り訓練-1983年-「HIMALAYA
日本ヒマラヤ協会年報Ⅲ」昭和61年9月15日
- (その他)
- 1.中国の高峰 中国登山協会監修 東京新聞出
版局 昭和56年1月29日 2,000円
- 2.中国登山ハンドブック(未知、秘境、未踏の
山総ガイド)上越山岳協会 ベースボールマ
ガジン社 1981年 1,800円
- 3.中国の山へのアプローチ(阿部淳)「ヒマラ
ヤ104号」1980年6月号
- 4.世界のアルピニストがねらう中国の山々(王
鳳桐)「月刊 人民中国」1982年5月号
- 5.開かれた中国の高峰「岳人400号」1980年10
月号
- 6.中国登山レギュレーション全文対訳「岩と雪
75号」
- 7.中国にくる外国の登山団体・登山旅行団の費
用徴収についての規則「岳人409号」1981年
7月号
- 8.進む中国奥地の山岳研究(渡辺義一郎)「岳
人415号」1982年1月号
- 9.これからの中国登山「ヒマラヤ142号」1983
年9月号
- 10.中国登山研究「ヒマラヤ142号」
- 11.中国横断山脈東南縁部踏査紀行(松本恒夫)
「山岳第79年」1984年12月1日 3,500円
- 12.氷山雪嶺二千年(周正)譚佐強/田川常雄・
訳 ベースボールマガジン社 1985年3月10
日 2,200円
- 13.雲南・少数民族の天地(NHK取材班)日本
放送出版協会 昭和60年2月20日 1,600円
- 14.チベット研究文献目録「日本文・中国文篇」
1887年~1977年(貞兼綾子編)亜細亜大学ア
ジア研究所 昭和57年4月10日 6,500円
- 15.中国登山研究会報告「ヒマラヤ174号」
- 16.中国登山の和文参考資料「ヒマラヤ175号」
- 17.中国登山研究会報告「ヒマラヤ184号」
- 18.中国の費用徴収規定(1987年1月発効)「ヒ
マラヤ186号」
- 19.チベットとその周辺の少数民族-白馬チベッ
ト族(山森欣一)「ヒマラヤ186号」
- 20.同上一チャン族-(同)「ヒマラヤ189号」
- 21.同上一カムのチベット族-(同)「ヒマラヤ
191号」
- 22.中国登山リポート(1980~88年)日本隊の活
躍が目立つ高峰登山(李舒平)「岳人503号」
1989年5月号
- 23.中国登山費用徴収規定の改定(1989年1月)
「ヒマラヤ212号」
- 24.激震の中国、日本隊の動静「ヒマラヤ214号」
- 25.ヒマラヤ登山入門、中国編1~7「ヒマラヤ
202号~206号、208号~210号」

御協力者名簿

(株)ICI 石井スポーツ 岩館センベイ店 梅内
忠雄 倉持 功 近喰 司 相模原農業協同組合
佐々木 常廣 サンヨー食品(株) 昭和マツタカ
(株) 新進食料工業(株) 菅沼 勲 (株)田中製
作所 東レ(株) (株)永谷園本舗 日東プラスチ
ック(株) ニッカウキスキー(株) 八戸物産
(株)ポッカコーポレーション 林 清剛 古館
彰一 増子 春雄 まる常商店 (株)ミザール
(株)ミドリ十字 宮崎 久夫 山本 光一 (株)
ロッテ

(順不同、敬称は省略させていただきました)

編集後記

- ・私達が夢みた「シャラリ」の地は、想像以上に美しい場所であった。私達の予想をはるかに上まわる感動的な姿でシャラリは聳え立っていた。
 - ・今回の登山は、夏の時期にヒマラヤ登山の実行を希望する会員向けに企画されたものである。会員には、様々なニーズがある。高さを求める人、未知に魅力を感じる人、事前準備に重きを置く人、定められた負担金を出し、個人の満足だけを求める人。そして、これらの条件は、時の経過によって徐々にではあるが確実に変化して行く。
 - ・「70万円、6千メートル、夏・36日間、四川省の未知の山」本部から呈示された条件を検討し、それぞれの隊員は集って来た。集って来た隊員の持つ能力は均一ではない。そして、初対面の人が多い。そこで最初の合宿で本部からは、「自分一人の能力では、実現できない登山であるが故に参加した」ことが基本原則であることを説明し、納得してもらった。
 - ・今回の登山には二つの問題があった。直前になって遠望写真が一枚届けられたものの、山姿や登路が不明であり、短期間登山では現地で時間切れになる恐れがあった。これは何とかクリアできた。
- もう一つは、雨季に登山することである。現実に登山実行する時の天候は、現地に行かないと判からない。出発前から雨対策については、現地で

対応できると考えていたが、今回の体験では、ルートの状態、地形等を適切に判断できる能力があれば、6千メートル前後に頂上を持つ山ならば、登山そのものに重大な影響を与える要素ではないと思われた。

・私達の隊も、昨今多くなりつつある所謂「中高年者」の登山隊であった。私達の隊は9人のうち5人までが中高年である。56% 2人に1人は中高年である。ちなみに日本のヒマラヤへ出かけた登山隊で、隊員の中に中高年者が占める割合を調べてみると1970年代後半('76~78)の平均が6%、17人に1人が中高年者であったものが、1980年代後半('86~88)の平均では18%、5人に1人が中高年者となっているのである。

私が酒井、大久保、貝塚を知っている以外は、ほとんどが初対面同志であり(石川県組を除く)ながら、中高年特有の意地の張り合いやエゴのむき出しなどが無かったのは、今回参加した中高年組がそれぞれに高峰登山の経験を持ち合わせている程度ゆとりがあったことが大きな要因のように思える。この経験は、今後隊の中に中高年者が占める割合が大きくなる傾向があるので、私にとっては大変有意義であった。

・再戦を拒ぶような姿で高原の奥に聳びえるシャラリ。次の機会には、シャラリを登り水洛河を下り、母系社会を保ち未だ通い婚の習慣を守っている泸沽湖を抜け、再び玉竜雪山の麓を通り、密林に冷厳として鎮座する梅里雪山へ足を延してみたいものである。(記:山森 欣一)

発行日 1990年3月

発行所 日本ヒマラヤ協会(HAJ)
(The Himalayan Association of Japan)

〒169 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506号 ☎ 03-367-8521

FAX 03-367-4509

振替 東京0-48954 「日本ヒマラヤ協会」
編集者 山 森 欣 一
